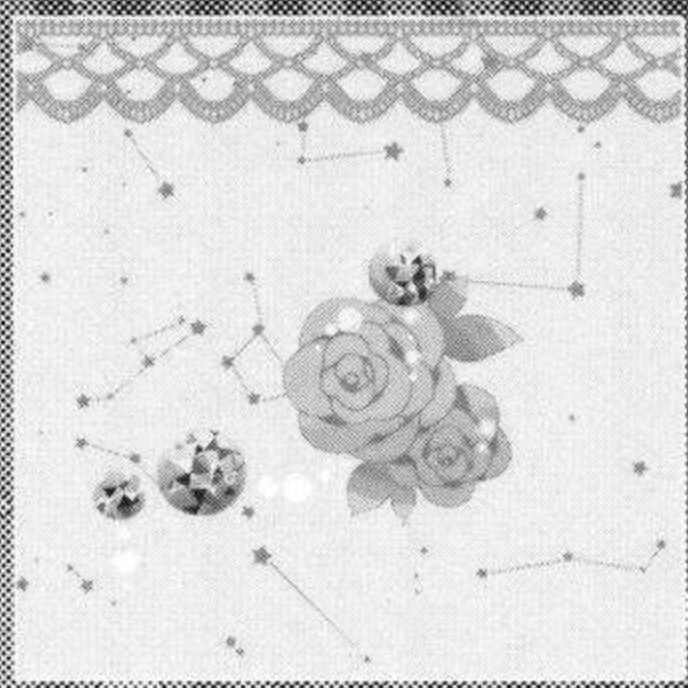
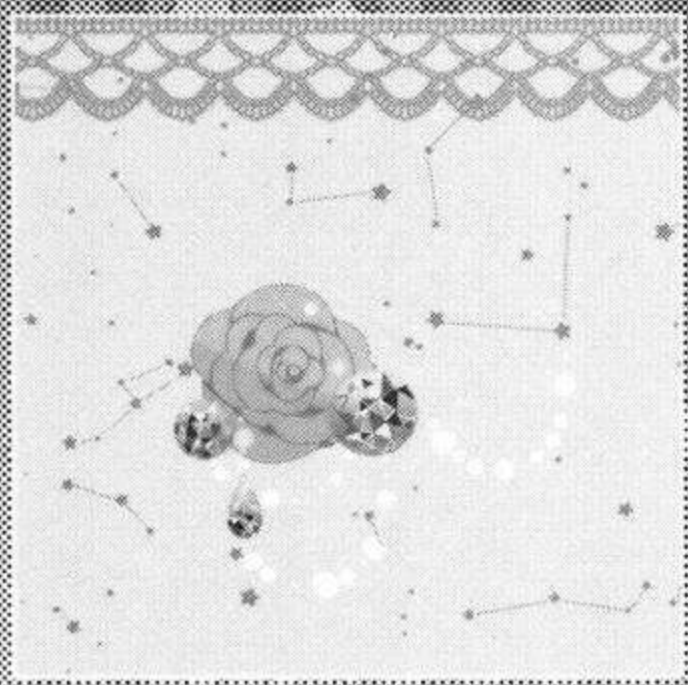
虹の旅行
~The Arcadia of seven colors~
虹色パレットシリーズ

この度は宜朱ハネムーンアンソロジーをお手に取って頂き
誠にありがとうございます。
元を辿ると「自分の幸せを置き去りにしてしまいそうな
二人が、幸せな新婚旅行をするところが見たい！」
という私の我儘と、フォロワーさんの
「人里離れた静かな場所で二人で星空を見上げる宜朱」
という素敵ツイートから生まれた企画です。
寄稿して下さった皆様の素晴しい新婚宜朱がぎっしり
宜朱愛もぎっしりなアンソロになっておりますので
どうぞごゆるりとご堪能くださいませ。





★★巻頭カラー★★
ノベルティイラスト　/めろる

003　扉
004　目次

★★COMIC★★

005　ハッピーハネムーン　/アオイ
012　RING　/チコブ
015　最後の楽園　/花鳥マサムネ
028　osoroi(イラスト)　/LEA
029　可愛い二人　/房前

★★NOVEL★★

034　延長線上のハニー・ムーン　/鴻神江夢
041　いちばん大切なもの　/ぽん
055　人魚姫にはなれない　/しきり
061　シーサイドラブストーリー　/笠原のばら
066　My body is filled with your tears.　/ナカシマクロ
079　海の彼方に　/山岡鉄心
093　BECAUSE I LOVE YOU　/織斗梓穂

102　Writers comment
105　編集後期
106　奥付

結婚しました

新婚旅行前日

いよいよ明日ですね

楽しみだな～

ハッピーハネムーン

アオイ

ダイムくんも同伴可でよかったですね

そうだな

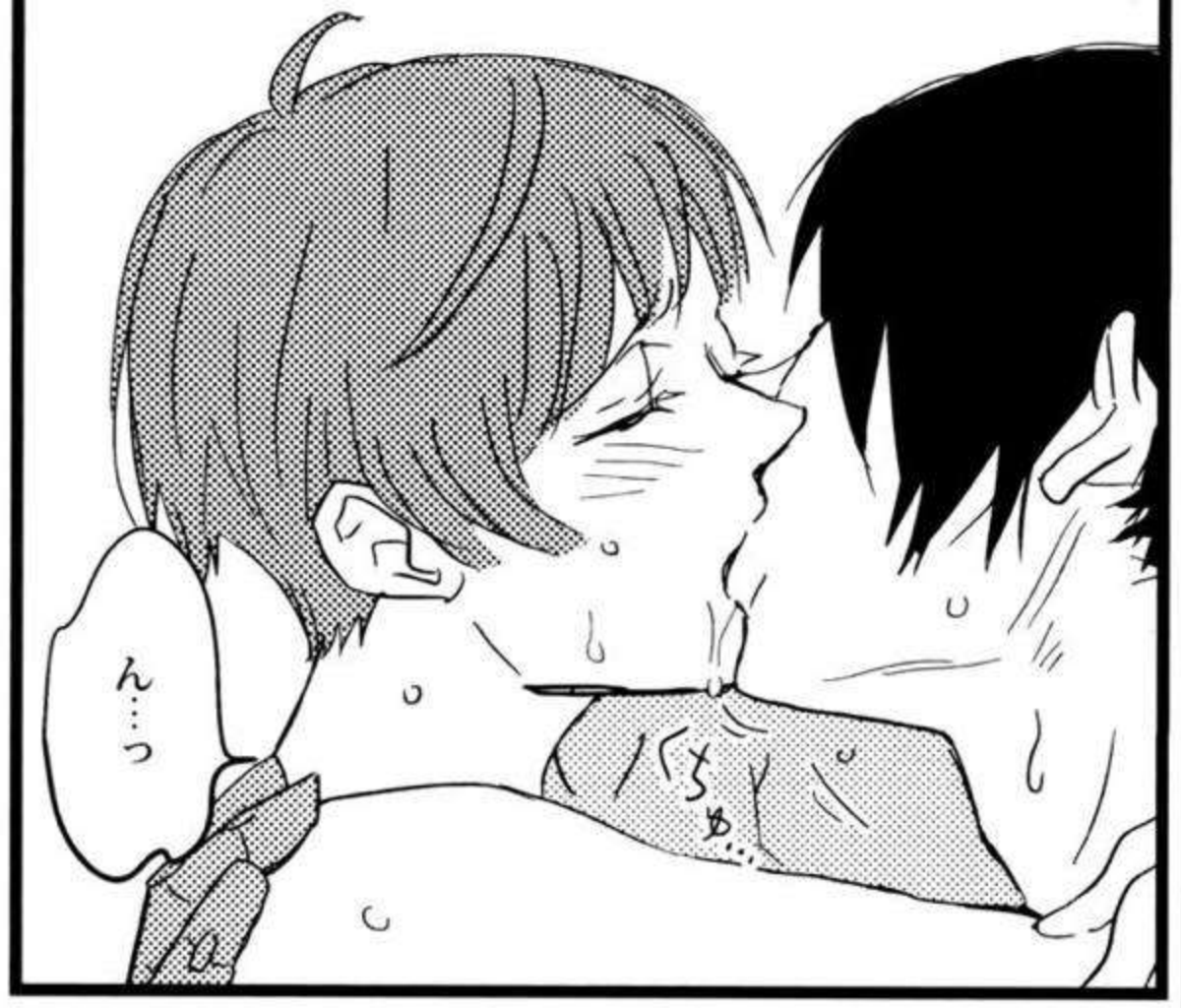
くすぐったい♡

プロ プロ

かーっ
…
ん？
ガシ・
常守と一緒になれて…
…嬉しいなと
…幸せになりましょうね
…ああ
あ！
私たち結婚したんですから

伸元さん

あ…朱…


ん…っ
くちゅ…

…あっ
ギリッ
くちゅ
くちゅ♥

…すごいな

あなたの中
…ばかっ
グチュ♥

…伸元さん
うん？
はは
ふぅ

…いっぱい

愛してくださいね

もうひとりじゃない

…ああ

?!
グスン
やっ
やだ
なに
泣いてるんですか！
ンッ
あなたを
たくさん愛そう
END.

キラ キラ

キラ キラ

RING

チコブ

ごろろ——ん

かざのぎ

あかね

ガチ

…。

えっ ちょっと

はっ これは!!

かかかかっ

いっ

いやいやいや 赤くなりたいのは こっちですよ!

すまない!!!!

ボーッ

もーっ
なんとか言ってくださいよ！
呆れて物も言えないやつですか！

ポーンスコ！

あー…
いや、その…

フッ

貴女も

そんな可愛い行動するんだなと思って…

ギシッ

彼は右手に指輪をしている。

彼の右手と
私の左手

あっ…っ

ん…。

ちゅっちゅっ

ピクンッ

くちゅん♡

ピクーッ

朱

あ

感触を直に
感じたいから
だそうだ

あっ♡

はぁっ

はっ♡

ふっ

カチッ

触れ合った時
カチカチと
指輪がぶつかる

キュッ…

カチ…

私たちだけの
この音が

たまらなく
幸せなのだ

あっ♡

end♡

おはよう

ん……

……そうだ
私、宜野座さんの
お嫁さんになったんだ

最後の楽園
花鳥マサムネ

おはよう…
ございます

結婚式を
挙げたのは
つい先日で

今は
新婚旅行の
真っ最中です

今日は
どうしようか

腰が立たない
んですが

そうか
じゃあこのまま
ごろごろしていよう

ん？

……あの

もぞ

もぞ

そうか
じゃありませんよ！
せっかくの景色
全っ然楽しめない
じゃないですか！

地上に残された
『最後の楽園』の景色
今逃したら
もう二度と見られない
かもしれないのに

……すまん
ちょっと
張り切りすぎた

……ちょっと？

可愛い花嫁に誘われたら張り切りもするだろ

宜野座さ

朱

ここは俺とあなたしかいないんだ

！……伸元さん

ゆ♡

ゆっくり休んで動けるようになったらビーチに行こう

……はい

彼は優しい人だ楽園の海のように

ちゅっ

ちゅっ

今日の夕陽のように
熱くて
綺麗な人

こんなにも優しくて
綺麗な人に
私は
隠し事をしている
言えないことが
増えていく

朱……
どうした？
まだ怒ってるのか？

彼との
距離が縮まる程に
増していく罪悪感で
不意に
息が詰まりそうになる

こんなに、幸せでいいのかなって

こんなに優しくてかっこいい素敵な人が私の旦那さんでいいのかなって……思って

っ……

ねぇ、伸元さん喩え話ですけど……

?

カリッ

人間を食べて取り込んで大きくなる怪物がいるとします

もし……私があなたの前から消えて姿を変えてしまったら……そう、怪物に食べられてその怪物になってあなたの前に現れたら

あなたは私に気づいてくれますか？

何だそれはお伽噺か？

う～ん

……

そうですよね

よくわからんが俺に何も言わず置いて行くなら俺はあなたを許さないだろうな

でもあなたがどんな姿に変わっても俺は気づく自信があるぞ

！

……嬉しい

変なこと言い出して……照れ隠しか？

私
怪物になっても
いいと思ってた

それで大切な人達が
幸せになるなら
私が
『私』じゃなくなっても
いいって

……今は？

あなたが
何に苦しんでいるのか
俺にはわからないが…
その怪物は
倒せないのか？

傍にいたいの
……伸元さんに
嫌われたくない

そうですね……
怪物が死んだら
たくさんの人が
不幸になります

なら
一緒に逃げようか
怪物が追って
来れない
場所まで

……逃げるなら
綺麗な南の島が
いいですね
ダイムくんも連れて

あなたが傍にいるなら
どこだっていいさ
ダイムも文句ないだろう

伸元さん……

ぷちゅう

……でも

あなたを攫ったら
ご家族や友人に
余計恨まれてしまうな
あなたが寂しい思いを
するのは嫌だし

すあ余ごあ

家族は……
作れますよ？

!!

……伸元さん
続きは、
部屋に戻って

……
そうだな

無理だな

あなたがこんなに俺を求めてるのに
ひいなよ♡なかきゅうこう
なぁ……俺の可愛い奥さん何が欲しいか言ってごらん
ちゅっ
……っ
止められる訳ないだろ
あっ
あ？

朱

ぎゅるんっ

うぅ……
また
こんなにして

ひ、人が……
来ちゃったら

給仕ドローンしか
来ないさ
誰とも
すれ違わなかっただろ？

あなただって
こんなに
勃起させてる
くせに
ほら、言え

あちゃ

あちゃ

あっ♡
あっ♡

なかちゃん…

伸二さんの
赤ちゃん欲しいです

朱

ぷっ♡

ぷぃゅ

あ

伸元さ……

ちゅっ♡

ん……

ちゅっ♡

世界に私と伸元さんだけ……みたい

は。

そうだな

はー

幸せなのに寂しくて切ないのはなんでだろう

おっ

ちゅ♡

ぶりゅ

ゴルゴ

ぷぁぁ♡

ゆっさ

好きっ♡

ぷしゅぅぅ

ぷ

ぷ

ぷぁっ♡

伸元さん♡ 十わにらぶ てぇぇ♡

赤ひゃん作るのぉん♡

ゆっさ

あがぁっ

ゴルゴ

なあ

……はい？

……伸元さん

まだ怒ってるのか？

星が綺麗ですね本当に楽園に来たみたい

……ああ、でも

end

LEA

あれ？
宜野座さん
もう着替えちゃった
んですか!?

ああ…
もう公安局に
戻るだろう？

可愛い二人

房前 /Fermion

貴女はその服似合ってるな

可愛いよ

かあああな…

えっ？

あわわわわ

なっ…！宜野座さんってば何言ってるんですか!?

宜野座さんこそさっきのパティシエ姿格好良かったです！

!?

っ…！

かあああ

ぎゅっ

貴女に褒められるとこそばゆいな…

きゅん
宜野座さんが欲しいです…
はぁ
ふっ…

はあ

あっ

ぎ…のざ…さっ…

はっ…

すぷっ

あっ

ぬぷっ

常守…

はっ…

はあ

ズッ

ズッ

ズプッ

ぶるっ

やっ…もう…

つっ…！

はっ

ああっ!!

はっ…

はあ

ズッ

ズッ

あっ

fin.

延長線上のハニー・ムーン

鴻神江夢

それでは、ごゆっくりおくつろぎくださいませ。笑顔と共にその一言を残した仲居が部屋を出て行った直後、朱は座椅子に凭れてふーっと大きく息を吐いた。

「疲れたか？」

湯呑に注がれた緑茶の湯気を顎に受けながら伸元が問えば、朱はうん、と軽く首を振ってはにかむ。

「なんか、いつもと感じが違うって言うか……」

同じように湯呑を持ち上げ、ちょっと緊張しちゃったと続ける朱へ伸元は小さく笑った。言われてみれば玄関からここへ来るまでの間、観光していた時のはしゃぎようとは打って変わって猫をかぶったように大人しかった事に思い至る。

「あっ、でも温泉もお料理も楽しみだよ！」

「分かってる。それも目的の一つだろう？」

今度こそ声に出して笑いながら言えば、朱はうう、と縮こまってしまった。伸元はふ、と息を吐き、湯呑を茶托へ置くと朱の隣の座椅子へと移動する。

「の、伸元さん？」

「すまない。からかい過ぎたな」

「……ううん、そんなことないよ」

どうやら機嫌を取り戻したらしい朱がふふ、と微笑み触れ合った肩へ頭を凭れさせてきて、伸元は背に回した手でそっと髪を撫でた。

朱が幼馴染から人生の伴侶となったのは一週間ほど前。今回の旅行は年に数回ほどあった恒例の家族旅行ではなく歴とした『新婚旅行』ということもあり、無意識のうちにお互い気分が高揚していたのだろう。顔を見合わせて笑い合い、伸元は気を取り直すように息を吐いた。

「夕飯まで時間もあるし、ひとまずその温泉に入るか」

「うん！」

軽やかな返事に伸元が腕を外せば、朱はすっと立ち上がって入口近くに置かれた旅行鞄へと歩み寄っていく。この旅館の売りは露天風呂付きの客室で、案内されているここも多分に漏れず海を一望できる小さな風呂がある。が、支度をする朱の荷物を見るにどうやら大浴場へ向かおうとしているようだった。

そのことを伸元が問えば、折角だから大きいお風呂も楽しみたいという返事があり、それもそうかと同じように着替えやタオルを持つと揃って大浴場へ足を向けた。

「じゃあ、また後で」

ひらひらと手を振って女湯へ消えていく朱を見送り、伸元も男湯ののれんをくぐる。観光シーズン真っ只中の風呂場はそれなりに混雑しており、そして皆一様に苦笑めいた表情を浮かべているのを見た伸元は、自分も同じ顔をしているのだろうなと内心で肩を竦めた。

海の幸がふんだんに使われた豪奢な夕食を済ませ、部屋へ戻った二人は並べて敷かれた布団を見て揃って黙り込んでしまった。

かれこれ十数分はどちらも口を開かず、窓の外に広がる月に照らされる夜の海を眺めている。——否、伸元は何度か声を掛けようとしてはいるものの、朱がその気配を察しては困ったように眉尻を下げてしまうため軒並み失敗に終わっていた。

無言を貫き売店で買ってきたビールを傾けている朱を横目で見て、伸元は気付かれないよう小さく溜め息を吐く。

ずっと妹のような存在だった朱へ自分が特別な感情を抱いていると気付いたのは、彼女が大学を卒業する頃だっただろうか。何がきっかけだったかは定かではない。それより少し前から想いを告げられてはいたものの、既に社会人となっていた伸元にとっては思春期特有の漠然とした憧れを錯覚しているだけだと聞き流していたのだが、こちらが自覚してしまえばその想いを無下にすることも出来なくなってしまった。

——まだあの時の告白は有効だろうか。そんな遠回しな返事をした伸元に、朱は幼い頃の面影を残しつつも大人びた微笑みで嬉しそうに頷いてくれ、安堵したのもそう遠い昔ではない。そこからとんとん拍子に話は進み、結婚の二文字が出てきたときは想いが通じ合った瞬間の伸元以上に互いの両親がやっとかと言った表情を浮かべていたのも記憶に新しい。

そんな紆余曲折があった所為か、伸元はどうしても朱に手を出すことが出来ないでいた。聖人君子や木石でもない以上好意を持つ相手へ触れたいと思う気持ちは一般男性並みに持ち合わせてはいたものの、改めて朱にそういうことを確認するのが気恥ずかしかったというのもある。ずるずると先延ばしにしていた『問題』がここにきて表面化してしまったことに、伸元はひっそりと頭を抱えたくなった。

「あの、伸元さん」

沈黙を破った朱の声に、伸元は窓の外へ向けていた目を彼女へ向ける。アルコールの所為だけでなくほんのりと染まった頬に柄にもなく胸が高鳴り、衝動的にその身体を抱き寄せていた。

早鐘を撞く鼓動も、緊張に震える手も、何もかもバレてしまえばいい。それくらい、朱を欲している。

「朱」

腕の中へ朱の小さな身体を閉じ込め耳元に唇を寄せて囁いた声は、自分でも驚くほど甘く低く響いた。微かに肩を跳ねさせた朱だったが、ゆるゆると上げられた双眸には待ちきれないと言わんばかりの光が灯っている。

「……うん」

請うような眼差しで囁く朱の頬を撫で、伸元はそっと唇を彼女のそ

れに重ねる。戯れや一時の別れの挨拶ではない、先に進むための口付けを交わすために。

明るいのは恥ずかしいと呟いた朱の言葉に従い、宜野座は部屋全体を照らす明りを消して朱の側へと戻った。枕元に置かれたルームランプでもはっきりと分かるほど赤くなった朱の頬を両手で包み、閉じられる双眸を合図にキスの続きを始める。

「は、ぁ……、ん、伸元、さん……」

「……朱」

名を呼び合いながらいつもより深く長く交わしたキスで上がった呼吸を整えながらゆっくりと朱を横たわらせ、その小さな身体を閉じ込めるように両腕を顔の横へ突く。緊張に強張った顔を見下ろし、自分も同じような表情を浮かべているかもしれないと伸元が思った時、その視線が僅かに逸らされた。

「朱？」

「……これも……」

羞恥に染まった頬を隠さないまま朱がルームランプを指し示して遠慮がちに呟き、伸元は苦笑を浮かべる。

「これ以上は我慢してくれ。全く見えないというのは……さすがに困る」

「……っ！」

本当は明るい中で彼女の全てを余すところなく見たい。そんな本音を押し隠して囁き、すかさずその唇を塞ぐように口付けを落とす。ちゅ、ちゅっと触れるだけのキスを何度か交わしているうちに反射的に閉じられていた彼女の瞼がゆっくりと開かれ、物言いたげな眼差しで伸元を見上げてきた。

次いで、所在無げに胸元へ置かれていた朱の手が首筋へ絡んでくる。引き寄せられるままに唇を重ね、今度は初めから舌を絡め合うキスを交わした。

「ふ……ん、んぁ……」

キスの合間、薄い浴衣の上から身体のラインを確かめるように腰から脇腹を撫で上げれば、唇の隙間から熱い吐息と声が零れて鼓膜を甘く刺激してくる。それに気を良くした伸元が胸元の膨らみへ掌を滑らせると、朱が微かに身体を跳ねさせた。

「っ、ご、めんなさい」

「……いや、こちらこそすまない。大丈夫か」

驚いた拍子に上体を起こし思わず手を離したものの、そう問えば朱は躊躇いがちに一つ頷く。浮かせたままの手を取られ、自ら胸元へ押し付けてくるその健気さと大胆さに伸元は軽く息を飲んだ。

こんな風に続きを強請られて止められるほど人間は出来ていない。据え膳食わぬはなんとやらという言葉が浮かび、伸元は朱に気付かれない程度に自嘲する。改めてその形と柔らかさを確かめるように撫で、朱の手が離れたのを見計らって掌を滑らせると、腰の帯を解き合わさった前身頃を肌蹴させた。

「あ、あの……っ、変、だよね……」

浴衣から腕を抜かせている間、お祝いに頂いたんですけどと泣き出しそうな声で朱は言う。仄かな明かりの中に浮かぶうっすらと上気した朱の肌を慎ましやかに隠す少し大人びた雰囲気の下着に、伸元はふっと笑みを零した。普段の快活な彼女とは正反対な印象を齎すそれに、朱が『妹』ではなく一人の女性であることを再認識する。

フリルがふんだんに使われたブラと肌の境目へそっと指先を乗せれば、温泉に入ったからというだけではない熱がじんわりと伝わって

くる。口元を掌で覆い不安げな眼差しを揺らめかせる朱の額に小さな口付けを一つ落とすと、
「良く、似合ってる。脱がせるのが勿体ないくらいだ」
「……っ！　の、伸元さん、それ反則っ！」
率直な感想を告げれば、朱は真っ赤に染まった顔を逸らしてしまった。どこがどう『反則』なのか分からない伸元は小首を傾げつつ、宥めるように頬へキスを落とす。
「ごめん、朱」
そのまま至近距離で名を呼べば、視線だけでこちらを見た朱がそろそろと顔を元に戻す。仕切り直しのようにちゅっと三度目のキスを今度は唇へ振らせれば、ふふ、と彼女が楽しげに笑った。
続けて、と言わんばかりに胸元で止まっていた手に朱の手がまた重ねられ、布地の上からその形をなぞり背中へ滑らせると朱が身体を浮かせる。そこへ両手を差し込み、手探りで漸うホックを外しブラを取り払えば、何故か朱の身体からほんの少しだけ強張りが失せた。
「朱？」
どうしたのかと伸元は名前だけで問い返す。肘をやや引き気味にして露わになった胸元を隠しつつ、伸元の首筋へ両手を置いた朱は小さな苦笑を湛えた。
「伸元さん、こ、こういうことに、慣れてるんじゃないかなって……思ってたから」
痛いところを衝かれ、伸元も薄く苦笑した。不格好なのは分かっていたが片手で外せるほど慣れているわけではなく、無様な姿を見せるよりは幾分かマシだと言い聞かせていたものの、改めて指摘されてしまえば立つ瀬がない。
ただ、朱のその言葉を引き出した感情――妬心とも言うべきそれが心地よく、伸元は謝罪を乗せた口付けを朱の鼻先に落とした。
「……伸元さんって結構意地悪」
「そうか？」
「うん」
「まぁ、さっきから朱が可愛いことを言うからだな」
「っ！」
言葉を失った朱の顔を覗き込み、視線だけで続けていいかと問いかける。躊躇いがちに小さく頷いたのを見て、伸元は改めて露わになった乳房へと直接触れた。
僅かに硬くなった膨らみの先端が指先に当たり、朱の身体がふるりと震え肌が粟立つ。指の隙間から零れる吐息と共に快楽を伝えてきて、伸元は知らず知らずのうちに肩に入っていた力を抜いた。
「や、ぁっ、そこ……、んっ」
幼い頃のビー玉遊びのように、それよりも繊細な力加減で硬さを増した尖りを転がす。耳を擽った声は甘く、痛みなどは感じていないと判断した伸元は反対側の乳房へ顔を寄せ、唇を這わせてやはりツンと自己主張しているそれを口へ含んだ。
「ひゃあっ!?　や、の、ぶちか、さんっ！」
盛大な、けれど嬌声というには些か甘さの足りない悲鳴を上げて朱はまた身体を震わせ、今度は制止するように手を掴まれる。さすがに性急すぎたかと顔を上げれば、空気を求めるように口を開閉させる朱が蕩けた眼差しで伸元を見上げた。
「痛かったか？」
「ちが、その……なんか、むずむず、して」
首を振って伸元の言葉を否定した朱は、頬の紅潮を更に濃くしてもぞりと身悶えする。視線を落とせば両足を擦り合わせているのが見え、伸元は上体を起こすと太腿を掌で撫で上げ下腹部に残る布地に指先をかけた。

はっと朱が目を見開き、制止の意味をもって手が重ねられる。小刻みに首を横に振る朱の眦には涙が、眼差しには困惑が浮かんでいた。
「朱、手をどけてくれ」
「……い、や」
「嫌なら仕方ないな」
「え……？」
「脱がすのが勿体ない、って言っただろう？　俺はこのままでも構わないが……」
暗に脱がさずとも行為を続けられるという意味を込めて告げつつ、反対側の手で付け根の辺りをつつ、となぞる。どういうことか理解したらしい朱はぐっと手を掴む指先に力を込めるものの、やがてゆっくりと外された。細い腰を包み込むように両の掌で掴むと、朱は先刻と同じように僅かに腰を浮かせる。そのまま掌を滑らせ布地を引き下げれば、ぬち、と微かな重い水音が耳に届いた。
思わずそこへ目をやるが、中途半端に脱がせた下着をそのままにするわけにもいかない。伸元はするすると細い足を辿って朱を一糸まとわぬ姿にさせると、またぴったりと隙間なく合わさった膝頭へ手を置いた。
「っ、ま、待って！」
「駄目だ。もう待たない」
都合三度目ほどになる朱の言葉を伸元はとうとう聞き流した。全く経験のない朱とは違い（片手で数えられる程度ではあるものの）それを知っている伸元にとって、朱の反応がわざとではないと頭の隅で理解していても我慢の限界というものもある。やや強引に力を込めて足を割り開けば、下生えの奥はしっかりと蜜を湛えていた。
こくりと喉を鳴らし手を伸ばせば水音を立てて愛液が絡みつき、掬い取って乾いた指先へと馴染ませ襞を辿る。全体に塗り込めるように動かした後、隠れた花芯へそっと触れた。
「あ、ぁんっ！」
びくりと今までにないほど大きく身体を跳ねさせた朱の両足が反射的に閉じられかけ、伸元はそれを阻むとひくひくと波打つ下腹部へ唇を落とす。臍の周りを舐め、ちゅ、ちゅっと音を立てながらゆっくりと下がり下生えを通り越し、蜜を塗れさせたそこへと顔を寄せた。
「やっ、やだ、やだっ、そんなとこ……っ！」
濃い女の匂いが鼻腔を擽り、逃げを打つ腰を抱え上げた両足ごと掴んで固定し舌を這わせる。舐め取る先から蜜はとろとろと流れだし、口走る否定の言葉とは裏腹に朱の身体は徐々に伸元を受け入れる為の準備を整えようとしていた。
ぷっくりと主張を始めた花芯を舌先で転がし、襞を辿って泉の入口を舐めあげる。どこか甘さすら感じるほどの蜜を啜り、ゆっくりと舌先をその中へ差し込んだ。
「あっ、な、なに……っ、やぁ、あっ！」
侵入者を拒むように狭いそこは、それでも次第に伸元の舌を受け入れるように開いていく。ある程度の柔らかさになったところで片手を外すと、舌を引き抜き指先を添わせた。傷つけないように慎重に、ガラス細工を扱うほどの繊細さでそっと埋め込ませれば、ひゅっと朱の喉が息を吸って鳴る音が聞こえて伸元は顔を上げた。
「……朱」
「っ、ぁ、伸元、さん……？」
荒い呼吸のまま返事をした朱がそこで漸う呼吸を思い出したのか大きく胸元を上下させたのを見て、伸元は無意識に安堵の微笑みを向ける。じっとこちらを見つめる潤んだ眼差しに微笑みを向ければ、了承のように鳶色の双眸がゆっくりと瞬きをした。
敷き布団のシーツから離れ彷徨いだした手を取り指を絡めて握り

合い、まだ少し硬い体内を解すように指を進ませる。口元を塞いだ掌の隙間から零れる声は先刻よりも甘い響きを伴っていてぞくりと腰が震え、重点的にそこへ刺激を与えながら更に指を増やして中を検分するように動かしつつ唾液と蜜に塗れた花芯へ再度触れた。

「あ、ん、やぁっ！」

一際高い声を上げ、朱の背が弧を描き全身を硬直させる。指先に伝わる秘部の軽い締め付けに伸元は興奮で乾いた唇を舌で潤すと、指を引き抜いて身体を起こした。

余韻に喘ぐ朱が揺れる眼差しを投げかけてくる。それに笑い返して未だ身に着けたままの浴衣と下着を手早く取り払えば、ふっと朱の視線が下肢へ落ち、気まずそうに逸らされて内心で苦笑した。

腕の中で色付いていく彼女の姿に煽られた劣情ははっきりと兆していて、朱は十中八九これを目の当たりにしてしまったのだろう。それでも再び朱の身体を包み込むように覆いかぶされば、背けられていた顔がゆるりと伸元に向き直った。

「伸元、さん」

「……怖いか」

赤く染まった円い頬を撫でながらそう問いかければ、朱は軽く首を横に振る。開かせたままだった足の間に身体を割り込ませて腰を寄せ、熱の篭る互いの中心をぴったりと密着させた。

く、と朱の喉が引き攣りきつく目が閉じられる。ただしそれは先刻の問いかけへの否定が嘘だったという訳ではなく、この後に訪れる衝動を――指や舌で与えたものよりも強い快楽を受け止める為の準備のように見え、伸元は真一文字に結ばれた唇へ己のそれを触れあわせると、少しだけ腰を引いて熱の先端を朱のそこへ宛がった。

「ひ、ぅ……っ」

くちゅん、と音を立てて屹立を飲み込んでいく体内は熱く狭い。朱の短い髪を宥めるように撫で梳き呼吸を促せば、ふ、と薄く開いた紅い唇から細い呼気が零れた。

朱の表情は先刻よりも綻び身体からも僅かに力が抜けていて、覚悟していたであろう痛みがそこまで強くないことに安堵した様子を見せている。その所為か朱の呼吸に合わせていた挿入は徐々にスムーズになり体内は熱を導くように蠢いていて、辛うじて繋ぎとめた理性を手放しかけた。身体を支える為に朱の両側に突いた手に力を込めてそれを堪え、熱塊の全てを朱の体内へ沈めきれば再度下腹部が密着する。

「……ぁ、全部……、はい、って……？」

「ああ」

繋がった場所から湧き起こる痺れにも似た快感が背筋を駆け上って身体が震え、それが伝わったのか朱が微かに眉根を寄せる。まだ僅かに早い呼吸を整える為か大きく深呼吸をした朱は、腕にかかっていた手を滑らせ首筋へと絡められた。

「動く、ぞ」

「……ん」

誘いのような、合図のようなそれに伸元は短く宣言すると、朱は素直に一つ頷く。小刻みに体内の奥を先端で擦り少しずつ刺激を与えれば呼応するように朱が啼き、甘やかなその声が聴覚から、屹立へ纏わりつく体内が触覚から、快楽に身悶え湛えられた恍惚の表情が視覚から、これ以上なく伸元の本能を煽ってくる。

その声や表情から痛みはないと未だ冷静な部分で判断し、抽送の速度と深さを上げていく。膝裏を掬い上げ角度を変えて腰を押し付けた瞬間、

「んぁ、あっ、ああっ！」

朱の唇から一際甘い啼き声が零れ、伸元は口角を笑みの形に吊り上げた。悦楽に身悶える細い肢体を支えて何度もそこを突けば蕩けるよ

うな嬌声が聞こえ、熱を取り込んだ体内も伸元が与える快楽へ呼応して同じだけ返してくる。

目の前で、腕の中で、愉悦に溺れ淫らな声を上げる朱の姿に眩暈がしそうな程。えも言われぬ心地よさで理性は既に瓦解していて、より深く繋がりたいと腰の動きを加速させていく。

「……っ、あか、ね」

弾んだ吐息に混ぜて名を呼べば、ゆっくりと鳶色の目が焦点を合わせ見上げてくる。緩慢な動作で伸ばされた両腕に誘われるまま手を足から離し上体を倒せば、縋りつくように首筋へと絡みついた。

「ぁ、あぅ、や、も、あ、あぁ……――っ！」

強く、体内の一番深い場所を切っ先で貫く。甲高い掠れた声を上げびくびくと身体を震わせた朱の体内に絞り込むように熱を締め付けられ、ずくりと腰が疼いた。

「く……っ」

浮いた背の隙間に両腕を差し込み、抱き締め、腰を押し付けたまま動きを止めてきゅうきゅうと蠢く体内に逆らわず快楽の証を注ぎ込む。その熱が伝わったのか、朱が零した熱の篭った吐息を、伸元はそっと唇で吸い取った。

まだ僅かに早い呼吸のまま、伸元は腰を引き朱の中から抜け出していく。ん、と鼻にかかった甘ったるい声にまた熱が集まりそうになるが、軽く首を振ってそれを振り払い身体を起こそうとして――それは絡みつく朱の腕によって止められた。

「どこ、行くの……？」

「風呂。入りたがるんじゃないかと思ったんだが」

「……もうちょっと、このままがいい……」

眠たげな力のない声は拗ねているようにも聞こえ、伸元は諦めて朱の隣へ身体を横たわらせる。さすがに掛布団をこの上から被せるのは気が引け、脱ぎ散らかしたままだった浴衣を取って朱の身体を覆えば、彼女がふふ、と小さく笑った。

「朱？」

「んー……気持ち、いいなぁって……」

ぽつり、小さな小さな声で落とされた一言に伸元は目を見開き朱を見る。が、当の本人はすうすうと穏やかな寝息を立てていて、きっと今何を口走ったかも覚えていないだろうことは想像に容易い。

はぁ、と伸元は溜め息を落として起き上がると、朱を抱えて立ち上がる。さすがに寝入っている相手に手を出すほど非情ではないつもりだが、それでもこのままでは気が済まないのも正直な気持ちだった。

このまま風呂に入って目を覚まさなければ朱の勝ち、目を覚ませば――。

そんな一方的な賭けを。朱には聞こえていないと分かっていてその耳元に落としながら、伸元は露天風呂へと足を向けた。

【終】

いちばん大切なもの

ぽん

オートドライブにした車内で、朱は小さくあくびをした。目的地まではあと約三時間。毎年訪れる奥多摩の山岳地帯よりも遠い。

「運転を代わるから、少し眠ったらどうだ」

助手席から、宜野座が優しく声をかけた。

「オートだから大丈夫ですよ。宜野座さんこそ夜勤明けでほとんど寝てないんですから、寝てください」

「いや、それが全然眠くない。遠足の前の日の子供のような気分だ」

照れたように右手で口もとを覆った宜野座を見て、朱はほほえんだ。

宜野座と朱は、二泊三日の新婚旅行に出発したところだった。といっても、純粋な旅行ではなく仕事も兼ねてはいるのだが。

国外捜査から帰国して数ヶ月後、宜野座と朱は恋人同士になった。それからしばらくしてシビュラシステムが二人に結婚適性を出し、すったもんだの末結婚してから約二ヶ月。

宜野座は当初、朱にとってプラスにならないと渋っていたが、「一般市民と潜在犯の結婚がうまくいったモデルケースとなれば、潜在犯の権利向上に役立つ」という朱の思惑も汲み取り、最終的には結婚を了承した。二人そろってシビュラの観察対象となることも含めて。

密かに想い続けてきた朱と恋人になれたことだけでも、潜在犯である自分にとっては過ぎたことだと思っていた宜野座は、結婚によって朱には不利益ばかりが増えるのではないかと懸念していた。世間体を気にするような朱ではないが、「夫が潜在犯である」という事実は、かつて宜野座の母親がしたような苦労を背負わせてしまうのではないかと。

それでも、結婚し特例として（制限つきではあるが）朱と一緒に暮らし始めた宜野座の犯罪係数は緩やかに回復してきており、心から嬉しそうにする朱を見ていると、この結婚は間違っていなかったと宜野

座も思うのだった。なにより、愛する朱との間に確かな絆が結ばれたことは、宜野座にとってこのうえなく幸せなことであった。

「それにしても、捜査を兼ねた新婚旅行だなんて、宜野座さんには『公私混同だ』って怒られるかと思ってましたけど、意外でした」

「そうだな……あまり好ましくはないのだろうが、実のところ俺もラッキーだと思っているんだ。刑事課の人手不足具合では旅行なんて、こんな機会でもなければ行けないだろう？」

今回、現場が遠方のために泊まりがけの捜査になるとわかったら、案の定係員全員の視線が宜野座と朱にそそがれた。そこへ唐之杜が「せっかくだから新婚旅行にしちゃえば？」と言ったところ、他の執行官たちも皆賛成したのだ。霜月だけは苦々しい表情をしていたが、表立って反対しなかったのは、彼女なりに宜野座と朱に気を使ってくれたのだろう。どういう手を使ったのか知らないが、朱はちゃんと局長の許可も取った。

長野県南部に、国土交通省の補助を受けて帝都ネットワーク建設が屋外スキー場を含むレジャー施設「帝都スノーパーク」を建設した。都心から数時間もかけなければやって来られない不便な場所に、天候に左右される屋外施設。主に富裕層をターゲットにしているにしても、儲けが出るとは到底思えない。営利目的の施設にしてはあまりに非効率的だ。

都心から遠く離れた場所に建設された特権階級向けの施設。それは違法ドラッグの密売など、不穏なことに使われる可能性を想起させた。実際、宜野座は過去に、中央省庁持ち回りの療養施設がおぞましいことに使用された事件を目の当たりにしたことがある。だが、帝都スノーパークがそのような不当な目的で建設されたものかどうか証拠はない。そこで公安局員という身分を伏せ、帝都スノーパークへ、いわば「偵察」に訪れることになったのだ。

「宜野座さんってスキー得意なんですよね？　私やったことないので教えてくださいね」

「俺だって何年ぶりだろうな。体が覚えているといいんだが」

朱は戸籍上「宜野座朱」となったが、職場ではこれまで通り常守で通している。その方がなにかと便利だというだけではあるが、互いの呼び方も「宜野座さん」「常守」と変わっていない。何年もそう呼んできた呼び方を今さら変えるのもなんだか照れくさかった。

長旅の末、朱たちは施設に到着した。目的地に近づくにつれて積もった雪の厚さが増して、車から降りた朱は一面の銀世界に驚いた。都内ではうっすらと積もるだけでも珍しいことだ。

「うわー、すごい雪……っ、くしゅん！」

「大丈夫か？　ちゃんとウェアを着ろ」

「あ、ありがとうございます」

朱は鮮やかな濃いピンク色のスキーウェアを選んだ。派手すぎるかとも思ったが、万が一吹雪などに見舞われた際には目立つ色の方がいいのだと宜野座に教えられた。その宜野座はスカイブルーのシンプルなウェアを着ている。

スキー板はレンタルすることにしていた。板だけでなくウェアなどもすべて借りられるらしいので準備しなくても良かったのだが、「旅行の準備」というのが楽しくて、板以外のものは持参した。

ちらりと宜野座を見て、朱はため息をついた。

「……宜野座さんって、なに着ても似合いますね」

「そうか？　あなたも、似合っていてかわいいぞ」

「なっ……、もしかしてテンション上がってます？」
「そうだな。とりあえず捜査はひとまず置いておいて、スキーを楽しんでいいんだろう？」
「ええ。夕方までは楽しんじゃいましょう」

初心者の朱だったが、宜野座の指導を受けて、一時間後にはプルークボーゲンだが転ばずに滑れるようになっていた。
「スジがいいな。明日には中級コースも行けるようになるんじゃないか？」
「いいコーチがついてますからね。ところで宜野座さん、教えてばかりでつまらなかったんじゃないですか？　私、少し休憩してここで見てますから、一人で滑ってきてもいいですよ」
「そんなことはないが、じゃあお言葉に甘えて、ちょっと行ってくるよ」

朱はベンチに腰掛けて、ひらひらと手を振った。
オープンしたてで招待客のみの利用に制限されているせいか、混雑することもなく滑ることができている。広大な敷地に、金のかかったリフトやロープウェイなどの設備。スポーツやレジャーはストレスケアの一環として推奨されてはいるが、ここは一般市民がそう簡単に来られるところではない。
やはりどこか違和感を覚える。だが違和感の正体はまだわからない。
「んー、だめだ。まだ来たばかりだもんね、捜査はまたあとで」
ひとりごとをつぶやき、太陽が反射してまぶしいゲレンデを眺めた。
遠くにスカイブルーのウェアが見えた。
真っ白いキャンバスに鮮やかなシュプールを描きながら颯爽と滑り降りてくる宜野座の姿に、朱は目を奪われた。朱と違って、スキー板はぴたりと合わせられている。ザッ、ザッ、と小気味いい音を立て

て、朱のすぐ近くで板を止めた宜野座は、いつの間にか周囲の視線を浴びていた。
「ただいま。……なんだろう、視線を感じるな」
しばらくの間見とれていた朱は、悔しいくらいかっこいいな、と思った。

ひとしきりスキーを楽しんだあと、夜は屋内レストランで完成記念のパーティーが開かれることになっていたので、二人揃って参加した。宜野座は、会場の片隅で飲食するふりをしながら、全体に注意を払っていた。見たところ怪しい者はおらず、パーティー自体も特に変わったところはない。
化粧室から戻った朱が、小さな男の子を連れていた。
「宜野座さん。この子、シュウヤくんって言うんですけど、館内に併設されてる託児施設を抜け出して来ちゃったみたいで。ちょっと送ってきてもいいですか？」
「構わないが、託児施設？　保護者はどうした？」
「お父さんはお仕事で、お母さんは妊娠中で、もうすぐ出産予定らしいんです」
シュウヤという名の男の子はうつむき、つまらなそうに服の裾をつかんでいる。「念のためだ。許せよ、常守」と言ってから、宜野座はデバイスで彼をスキャンした。
「瀬川柊哉か……。色相は問題ないな」
子供のサイコパスは不安定なため心配したが、簡易スキャンの結果は問題なさそうだった。しかし、浮かない顔をしている。
「パパもママもあかちゃんのことばっかりでつまんない。ぼく、あしたがたんじょうびなのに」
「そっかあ。クリスマスイブがお誕生日なんだね？　何歳になるのか

な」
「五さい」
朱の表情が一瞬こわばった。逆算すると、男の子の生年月日は、二一二年十二月二十四日。その日は朱にとって、友人を亡くした忌まわしい日だった。
すぐに笑顔を取り戻し男の子を連れて出ていった朱だが、宜野座はその心情を思いやってやるせない気持ちになった。
いつまでたっても朱の心に残り続ける悲しい記憶。メモリースクープに立ち会い、また自分自身も目の前で父親を亡くした宜野座には、朱の体験したものがどれほど残酷なものであったか、痛いほどよくわかる。
朱が戻ってきてからも、その笑顔がどこか寂しげなものに感じて、宜野座は心を痛めた。

結局、パーティーでは怪しい人物もおかしな動きも見つからなかった。
朱たちは、スノーパークに隣接する温泉街にある旅館に二泊することになっていた。朱は努めて明るく振る舞っていたものの、無理をしていることは宜野座にはよくわかっていた。
その夜、宜野座は「長旅と初めてのスキーで疲れただろう」と言葉をかけ、朱をただ抱きしめて眠った。
朱は毎年、ゆきの命日には墓参りに訪れていた。今年は、その日に行けないからと、数日前に宜野座とともに訪れて結婚の報告もした。
いつまでも自分を責めてもゆきは還ってこないし、彼女の分も一生懸命生きようと思うものの、やはりあのときの自分の無力さを思い出してしまう。
朱は、宜野座に気を使わせてしまったことを申し訳なく思っていた。それでも、今夜はどうしてもそういう気分にはなれそうになかったから、なにもせず隣にいてくれる宜野座の優しさを心からありがたいと思い、その温もりを感じて眠りについた。

翌日は、前日とうって変わって天候がすぐれなかった。吹雪とまではいかないが、雪が舞い、視界状態もあまり良くない。
スキーを諦め、天候が回復するまでは目的のひとつでもある捜査に専念することにした。
屋内施設もかなりの広さがある。昨夜パーティー会場となったレストランや、温泉を利用したスパ、スポーツジムやエステなんかも揃っている。
ひととおり見て回ったが、どこも客で賑わっていて、特に怪しいところは見あたらない。
「本当に、単なるレジャー施設なんでしょうか……？」
「ひとつ気になることがある。色相スキャナの設置場所は確認したか？」
「ええ。施設の見取り図に照らし合わせると……」
デバイスを立ち上げ、スキャナの場所をインプットした朱は「あっ」と声をあげた。
「外につながる出入り口周辺はカバーしてますけど、中に入ってしまえば死角だらけですね」
「ああ。しかも特別室とやらは専用の入り口まであって、一般客は立ち入れない。スキャナが設置されているかどうかもわからん」
「気になりますね」
周囲を見回した朱は、通路の片隅で男の子が所在なさげに立っているのを見つけた。
「あれ、柊哉くん？　どうしたの？」

「パパ、きょうもおしごとだって。ぼく、ひとりでつまんない。ねえ、おねえちゃんたち、ぼくとあそんでよ」
宜野座と朱は顔を見合わせた。
「あのね、柊哉くん、遊んであげたいんだけど、ちゃんとパパかママに言ってからじゃないと」
「……じゃあもういいよ。ぼくなんて……」
柊哉はうつむいて、両手をぎゅっと握った。
「ぼくなんていらないこなんだ！」
「柊哉くん、待って！」
悪天候の中、外へ向かって駆け出した柊哉を、宜野座と朱は追いかけた。
山の天気は変わりやすいというが、ついさっきまでそれほどではなかったのに、外はもうひどい吹雪だった。
「俺が行く。あなたはここで待っていろ！」
宜野座は朱を制して一人、柊哉を追いかけようとした。
「でも……」
「必ず連れて戻る。温かい飲み物でも入れて待っててくれ」
逡巡する朱に、宜野座は安心させるように一瞬笑顔を作ってから駆け出した。

普段ならすぐに追いつけるはずの子供の足になかなか手こずらされたのは、吹雪の中で、しかも不慣れな場所だったからだろう。小さな背中を見失わないよう必死に追いかけた結果、宜野座は完全に方角を見失った。
それでも、柊哉が足を滑らせ、崖下に落ちる寸前でその腕を捕まえることができたのは、本当に運が良かった。柊哉をしっかりと右腕で抱きとめ、左手で木の枝をつかんで必死に踏みとどまる。義手のおかげで、針葉樹の葉による痛みは感じない。
「大丈夫か？」
「うっ……、うわあん！」
泣きじゃくる柊哉を抱きしめて頭を撫でてやった。防寒着も着ていないで震えていたため、宜野座は自分のスキーウェアの前を開けて、中に入れてやる。
「よしよし、落ち着くんだ。一緒に帰ろう」
泣きながらもこくこくとうなずく柊哉を抱きかかえ戻ろうとするが、吹雪で方角がわからない。こういう時は闇雲に動かない方がいいと判断した宜野座は、悪い視界の中でもあたりを見回し、大木の根元にできた小さな洞を見つけた。宜野座は無理だが、柊哉一人なら入れそうな大きさだったので、そこに入れて、覆いかぶさるようにして吹雪から守る。
宜野座はデバイスを立ち上げ、朱への通信を試みた。しかし繋がらない。
「通信エラーだと？　いくら山奥とはいえ……」
吹きつける雪と風のせいで、少しずつ体が冷えてくるのがわかる。目の前の柊哉を見れば、寒さに震え、涙に濡れた瞳で不安そうに宜野座を見上げていた。自分がしっかりしなければ、と宜野座は柊哉を落ち着かせるべく穏やかな声で話し出した。
「なあ、すまないと思ったが、君のことを少し調べさせてもらった。君の名前――『柊哉』は誰がつけたのかわかるか？」
柊哉はきょとんとして泣きやみ、「パパとママ」と答えた。
「そうか……。君の『シュウ』という字に使われているヒイラギという植物を知っているか？」
「……みたことある。トゲトゲしていたそうなやつ」
「あのトゲは自分を守るためにあるんだ。それからヒイラギには魔除

けの効果があると昔から言われている」
「まよけ……？」
「ああ、おそらくは君のことを、悪いものから守ってくれますように、という意味が込められているんだろう。君のパパとママは、とてもいい名前を君にプレゼントしたんだな」
「でも、パパとママのいちばんはもうぼくじゃなくておなかのあかちゃんになっちゃった……」
「君にいいことを教えよう。大切なものは、なにもひとつだけとは限らない。いくつあってもいい。『いちばん大切なもの』を増やせばいいんだ」
「どういうこと？」
「パパとママにとっては君も『いちばん大切』だし、おなかの赤ちゃんもきっと『いちばん大切』だ」
早くこの状況をどうにかしないといけない。その焦りを悟らせてはいけないと思った宜野座は、柊哉の頭を優しく撫でた。
「パパとママにあいたい」
柊哉の瞳にまた涙がにじんだ。
その時、びゅうびゅうという風の音の中から、聞き覚えのある電子音がかすかに聞こえた。これは――？
振り返った宜野座のすぐうしろに、小さくて黒くて丸いものが見えた。雪の上を動くそれがダンゴムシだ、と認識した次の瞬間、デバイスのコール音が鳴った。朱だ、とすぐにわかった。
「宜野座さん！　すぐに行きます！　そこを動かないでください！」
救助ドローンをともなって駆けつけた朱は、瞳を潤ませながらも気丈に柊哉を励まし、宜野座とともにスノーパークの屋内施設へと戻った。

柊哉の父親と、大きな腹を抱えた母親は涙を流して柊哉をきつく抱きしめた。思ったとおり、柊哉が両親からちゃんと愛されているとわかって、宜野座は安堵のため息をついた。
安心したせいか眠りに落ちた柊哉を抱きかかえたまま、柊哉の父親が頭を下げた。
「ありがとうございました。なんとお礼を言ったらいいか」
聞けば父親は、学生時代からスキーをやっていて、本当はプロのスキーヤーになりたかったが適性が出ず一般企業に勤めていたそうだ。それが、今回このスノーパークの完成前にスキーインストラクターの適性が出たため、一家で引っ越しまでして転職したとのことだ。
「念願だったスキーの仕事に就けて、二人目の子供が生まれることもあって仕事を頑張らないといけないと思ったんです。それが、柊哉に寂しい思いをさせていたとは……。」
やや唐突に、宜野座が尋ねた。
「柊哉くんの名前は、今日が誕生日だからつけたのでしょうか？」
「……よくわかりましたね。妻が、植物が好きで」
「ヒイラギは、十二月二十四日の誕生花です。すばらしい名前をつけてもらった柊哉くんが、ご両親から愛されていないはずがないと思ったんです。柊哉くんはとても寂しがっています。どうか、誕生日を祝って、柊哉くんを大事に思っていることをあなたがたの口から伝えてあげてください」
「どうしてそこまで……？」
母親が声をあげた。
「俺は、大切な人に大切なことを伝え損ねた経験があります。そういう後悔を、あなたたちにしてほしくない」
柊哉の両親は、神妙な顔で宜野座を見た。

「今日は、この子の誕生日をみんなで盛大に祝います。私たち夫婦にとって、柊哉は大切な宝物ですから」

宜野座たちが旅館へ戻り遅い夕食と入浴をすませると、今日という日がすでに終わろうとしていた。

二つ並べて敷かれた布団の上に、浴衣姿の朱が横たわった。宜野座も、朱の隣に寄り添って寝転んだ。

「今日は、心配をかけてすまなかった。ダンゴムシのおかげで俺もあの子も凍傷にもならず助かったよ」

「……必ず連れて戻るって言ったのに。通信が繋がらなくて、本当に心配したんですからね！」

朱は頬を膨らませて、宜野座に背を向けるように寝返った。

「そのことなんだが……いくら山奥で悪天候だったとはいえ、こんな大規模なレジャー施設の周辺で通信エラーだなんておかしいと思わないか」

「！　それって……」

朱ががばりと起き上がる。

「確信はない。だが、やはりどうもただのレジャー施設とは思えない。いずれ再調査する必要があるかもしれないな」

「……そうですね。柊哉くんたち家族のような、なんの罪もない人たちがなにか悪いことに巻き込まれる可能性もあります」

うつむく朱の髪を、宜野座は右手を伸ばして優しく撫でた。

「ああ。だけど今すぐなにかあるわけじゃない。あまり考えすぎるな」

「……そういえば、どうして柊哉くんの名前のこと、わかったんですか？」

声のトーンに明るさが戻ったのを感じて宜野座はほっとする。話題を出したのが自分だったとはいえ、朱の悲しそうな顔はなるべく見たくなかった。

「柊哉の『シュウ』の字に使われているヒイラギは、さっきも言ったが今日の誕生花なんだ。花言葉は『先見の明』。それから、ヒイラギは魔除けの意味を持つと言われている。名前というのは、一番はじめに親からもらうプレゼントだ。彼の人生が困難から守られますように と願ったのだろうな、と思って」

身をよじって宜野座に向き直り、まっすぐな瞳を向けて、朱は言った。

「宜野座さんの名前……伸元さんというのも、征陸さんとお母さまからのプレゼントなんですね」

「そういうことになるな。候補の中から最後は直感で決めたと聞いたことがある」

宜野座はふと、まだ幼いころ、父と一緒に暮らしていたときのことを思い出した。もうずっと昔のような、それでいて鮮明に思い出せる、幸せだったころの家族の記憶。

「……五年前の、ゆきが亡くなった日に柊哉くんは生まれたんですよね。そして今度は弟か妹も生まれようとしてる。命って、不思議です。消えてしまう命もあれば、生まれてくる命もある」

「常守？」

「宜野座さん、私、柊哉くんとご両親を見て思ったんです。家族って素敵だなあって。……私とあなたは、夫婦だけど血の繋がりはありません。だから、血の繋がったもう一人の家族が欲しいんです」

宜野座はこれまで、子供を作ることには踏み切れないでいた。「潜在犯の子供」がどれほどつらい思いをするか、身をもって知っている。昔ほどでないにしても、まだ差別は残っている。多くの親がそう願うように、宜野座も、子供に悲しい思いをさせたくない、自分がしたよ

うな辛い経験を味わわせたくないと思っている。
しかし、朱となら、生きる希望を与えてくれた彼女となら……。
「……常守」
「私たちの絆をもっと強くしてくれる『家族』を、あなたにあげたいし、私も欲しい」
朱の言葉の意味を、宜野座はひとつひとつかみしめるようにして飲み込んだ。
潜在犯である宜野座を愛し、その人生を共に歩もうとしているだけでなく、その身に、血を分けた家族を宿したいと言う朱に、宜野座は泣きたい気持ちになった。
父親が帰ってこなくなった日。母親が亡くなった日。一人で生きていこうと決めた日。監視官になった日。親友が執行官になった日。女の子の後輩ができた日。父親と左腕を失った日。真っ白な部屋に面会に来た朱が、宜野座を必要だと言ってくれた日。
そのすべての日々が思い出されて、胸が苦しくなる。目の奥が熱い。宜野座は、覆いかぶさるようにして朱を抱きしめた。
これからの人生は、朱と、彼女の信じるものを守るために捧げようと思っていた。いつか自分の身が朽ちるまで、守るべきものを守れるならそれでいい、と。
それなのに、朱の言葉がどうしようもなく嬉しくて、幸せで、温かくて。気がつけば、堪えきれずあふれた熱い滴が、下にいる朱の頬を濡らしていた。
「俺は……あなたからもらってばかりだ」
朱の両手が宜野座の顔をそっと包んだ。綿菓子のように優しく、親指の先で目の端を拭う。
「そんなこと、ないですよ。私がどれだけ宜野座さんに救われてるか、まさかわかってないんですか？」
「いつだって救われているのは俺の方だよ」
泣き笑いのような宜野座の穏やかな表情に、朱の胸にも温かいものが広がっていく。
「私たちは、もう一人じゃないんですよ」
そう言って目を閉じた朱の唇に、宜野座は触れるだけの口づけを落とした。
愛しい。この人がただただ愛しい。言葉では到底伝えきれない。二度と離れないように溶けて混ざりあってしまいたいけれど、それは叶わない。だからその代わりに、全身を使って愛しさを伝えたいと、宜野座はそう思った。

何度も重ねた唇は互いの唾液で艶めかしく濡れていた。触れるだけだったそれはいつの間にか、もっともっとと奥を探るように舌を絡ませ、理性を奪っていく。
宜野座の唇は次に朱の耳をかわいがり、濡れた舌を耳たぶに這わせた。くすぐったさに身をよじって逃れようとする朱の頭を左手で押さえ、「かわいいな」と囁くと一瞬で朱の力が抜けた。
「そういうの……ずるいです……」
「思ってることを言っただけだ」
「宜野座さんの意地悪……あっ、やだっ」
耳の中に舌をねじ込むと、朱の体がぴくりと震えた。どこもかなり敏感な朱だが、とりわけ耳を攻められるのに弱い。宜野座はわざとぴちゃぴちゃと音を立てながら舐め続けた。
それから首筋や鎖骨、胸元を丁寧に口で愛撫した。帯を緩めて浴衣をはだけさせる。右手はやわらかなふくらみを確かめるように撫でた。
ん、ん、という朱の吐息が次第に懇願の色を増す。敏感な頂に早く

触れてほしいのに、宜野座の唇はそこではなく、意外な場所へ向かった。
「ひゃ、そんなとこ、いや、んんっ」
右手で左腕をつかまれ、脇の下を露わにされた。そこを宜野座の舌が舐め上げる。
「いや、恥ずかしっ……」
反射的に腕を下ろして隠そうとするが、宜野座はそれを許さない。
「あなたのすべてを愛したいんだ」
普段なら触られてもくすぐったいだけのその場所は、朱も知らなかったが、感じる場所のひとつだった。生温かい舌が生き物のように這うと、腰から背中にかけてぞくりとした快感が湧きあがる。
抵抗する力の抜けた朱が快感に身を任せていると、宜野座は朱の肌から浴衣を取り去った。宜野座の舌は肘の内側を経由して指先へと向かった。親指から順に丁寧に口に含む。指と指の間を特に優しくなぞられると、体の中からとろりと溶けだした蜜が朱を潤していく。
反対側も脇から指先までじっくりと愛撫されて、再び宜野座が朱の口にキスをしたときには、朱の息はすでにあがっていた。
下腹部はおろか、まだ胸の先にも触れられていないのに、すでに宜野座を受け入れるのに充分なほど濡れているのが自分でもわかった。
「も……、はやく、ほしいです」
自分でも驚くくらい甘えた声が出たが、宜野座は意地悪くほほえんだ。
「まだだ。すべてを愛するって言っただろう?」
そこでやっと、ツンと上を向いた胸の先に舌が触れた。伸ばした舌でつつかれると呼応するように「あっ、あっ」と悲鳴のような声が出る。
上下左右に弾かれ、時折ちゅっと音を立てて吸われる。
「んんっ、あぁっ……やっ」
かわいらしく色づいたそこを、宜野座はわざと左手の指で摘んだ。
「つめたっ……!」
にやりと笑う宜野座を、朱は睨んだ。仕事の時は凛としていて立派に監視官を勤める朱が、宜野座の前でだけ切ない顔を見せる。もう少しだけ意地悪してやりたくて、宜野座は朱の右脚を持ち上げた。
え、と驚く朱を無視し、つまさきをつかんで口に含んだ。
「ーーやだっ、どこ舐めてっ……んっ、あぁっ」
手の指にそうしたように、指先も、付け根も、指と指の間も、しつこいくらい丁寧に舌でなぞる。初めは嫌がって逃れようとしていた朱から段々と力が抜けていくのがわかって、宜野座の征服欲が刺激された。左脚の先も同じようにじっくりと舐め上げると、小指に到達するころには、朱の中心から流れ出た蜜が下着をぐっしょりと濡らしているのが見えた。
朱がたまらなく愛おしくて、大事にしたいのに、同時に快楽で泣かせてしまいたい衝動にも駆られる。相反した想いを持て余した宜野座は、両の膝裏に手をかけて大きく開かせ、強引に下着を引き抜いた。
「……すごいな」
「やぁ……だ……って、宜野座さん、が……」
自分を求めてこんなになっているのかと思うと、宜野座はたまらない気持ちになった。脚の間に顔を埋め、ぷっくりとふくらんだ芽を舌の先でつついた。
「ーーあぁっ!」
ちゅぷ、ちゅぷ、という猥雑な音と、朱の切ない喘ぎが部屋に響く。敏感な芽を舌でこすり上げ、時折唇で挟んでやると、いっそう声が甘くなった。その下の秘所はひくひくと震えて、宜野座に触れられるのを待っているようだった。人差し指と中指の二本を挿し入れると、く

ちゅりと音を立てて蜜があふれ出る。
「んんっ！　そこ、ゆび、だめぇ……」
「いやなのか？」
「そ……うじゃ……なくて。も……おかしくなりそ……ひゃああんっ！」
二本の指をくいと曲げて壁の上側をひっかくようにこすってやると、朱の中がびくびくと痙攣する。いつになく感じている朱に、宜野座自身もずっと張りつめて痛いくらいだった。
指の動きを止めずに、口も使って朱の弱い部分を同時に攻める。朱の震えが大きくなり、声はもうほとんど吐息だけになっていた。
「はぁ……いつもよりすごいな。舐めきれないぞ？」
「だめっ！　そこ、で、しゃべらないで……あっ、もう……もう……いきそ……」
「我慢しなくていい」
限界までふくらんで今にもはじけそうな芽を、少し強めに吸い上げた。次の瞬間、朱の腰がびくりと跳ね、中が宜野座の指を強く強く締めつけた。
「――んんっ……！」
締めつけから解放されたあと、宜野座は指を引き抜き、どろどろに濡れたそれを、放心している朱に見せつけるようにぺろりと舐めた。
朱の目は潤み、頬は真っ赤で、はあはあと息ははずんでいる。すっかり発情した顔に、さすがに宜野座も限界だった。自らの帯を解き浴衣と下着を脱ぎ捨てた。
「入れるぞ……」
「もう……おねがいっ。はやく……」
「……本当に、いいんだな？」
「き、て……。欲しいんです……そのままの、宜野座さんが」
これまで避妊具を着けずにしたことはなかった。すっかりとろけきった朱のそこはすんなりと受け入れるだろうけれど、宜野座はまだほんの少しだけ戸惑いを残していた。
潜在犯の自分が、子を成すことなど許されるのか。誰よりも愛する女性に、苦労させることにはならないか――。
そんな様子に気づいた朱が、宜野座の肩を引き寄せるようにして抱きしめた。
「……だいじょうぶですよ。全部、受け止めますから」
女神のように慈悲深い言葉に、宜野座は覚悟を決める。目を閉じて、朱の額に軽く口づけた。
「……ほんとうに、かなわないな。……常守、いくぞ」
「ん……、あっ、ああっ……！」
ゆっくりと押し広げられる感覚に、朱の体がこわばる。皮膜越しでない分ダイレクトに伝わる熱と固さに、ひとりでにきゅうと締めつけてしまっている。宜野座のそれが、狭い道を分け入るように進んでいて、朱の中にぴったりと収まった。
「……はぁ。つね、もり……苦しく、ないか？」
朱は首を横に振った。なにか言いたくても、直接感じる圧倒的な存在感に、呼吸をするのがやっとだ。宜野座が少し腰を揺らしただけで、奥がずくりと疼いて止まらない。
「少し動くぞ」
「んんっ、すごい、です……。なんか、いつもより、熱くてっ……」
宜野座も、初めて直接感じる彼女の体温や、やわらかいのにきつく包み込むそこに、気を抜くとすぐにでものぼりつめてしまいそうだった。あんな薄い膜一枚だけなのに、あるとないとでは大違いだった。溶けてしまいそうなほど、たまらなく気持ちいい。
朱も相当に感じているのがわかる。その証拠に、彼女の中が不規則

にぎゅっ、ぎゅっとうごめく。絶頂を迎えようとする動きだった。
「……っ、あまり煽らないでくれ」
「だって……あっ、やぁ、やだぁ！　もうっ……だめ、だめなのっ！　なか、すごっ……！　いっちゃう――っ！」
まだそれほど突いてもいないのに、朱の中は勝手に痙攣を始めた。高波が押し寄せるような感覚を、宜野座は目をつぶり歯を食いしばってなんとかやり過ごした。
「――くっ、はあっ。……大丈夫か？」
目を開けて朱を見れば、閉じた瞳からぼろぼろと涙をこぼしていた。
「だ、だいじょうぶ、です。……いつもより、すごくって。は、恥ずかしいです、こんなに感じちゃって……」
「いいや、あなたが感じる姿は、たまらない」
「なに言って……あっ、そこ、だめっ」
波が少し引いたところで、宜野座はまた動き始めた。相変わらず朱の中は奥へ誘うようにきゅうきゅうと締めつけてきて、宜野座を煽る。汗で張りつく前髪を撫でてやると、朱は嬉しそうに目を細め、真似して宜野座の髪を手櫛で梳いた。朱は宜野座の髪に触れるのが好きだ。
宜野座は上体を起こし、両腕を朱の膝下に差し込んだ。折り畳まれる形になった脚が朱の胸を押しつぶし、やけにいやらしい格好になった。見下ろせば、ぐちゃぐちゃに濡れた朱の茂みに自身が出入りしているのが見える。腰を引けば液が絡みついた自分自身が姿をあらわし、突き出せばぴたりと収まって見えなくなる。と同時に朱の中から鈍く光る蜜があふれ出て、視覚的な刺激から、腰のあたりにぞわぞわとした感覚が走る。
宜野座は思わず目を閉じた。そうすると今度は朱の喘ぎ声と、自分の息づかいと、じゅぶじゅぶという水音がひときわ大きく聞こえて、熱がすぐそこまでこみ上げてきているのを感じた。
限界が近い。そう思った宜野座は、目を開けて、自身の体を朱に密着させるように倒した。半開きになった唇に食らいつき、貪るようなキスをする。
朱の肩をつかみ、体を揺さぶるように前後に激しく動かした。
「んんっ、私、またっ……」
「俺もだ。中に……出すぞ」
「あっ……、きて。……いっしょ、に……あっ、はぁっ、やっ、ああ――っ！」
体をくっつけたまま、腰だけぎりぎりまで引き抜いたあと、宜野座は奥の奥まで突き入れた。
「つねもりっ……！　くっ、うっ……！」
ひときわ強い締めつけに、宜野座ももう我慢はせず白い熱を思う存分吐き出した。
どくどくとした感覚がいつもより長い。肩で息をしながら、なかなか収まらない吐精に、宜野座は自分でも驚いていた。
なにも隔てられず、遮られずに抱き合うことがこれほどのものであると知り、宜野座は嘆息した。と同時に、朱が自分の子をはらむかもしれないということに言いようのない高揚を感じていた。
自分と彼女の遺伝子が混ざり合って紡がれる新しい命。それを思うと、宜野座はまた目頭が熱くなるのを感じた。幸せな家庭や自分の子供を持つことなどとうの昔に諦めていたはずなのに、それは単に気持ちに蓋をしていただけだと気づいた。宜野座は温かな家庭を、家族を、本心ではずっと求めていたのだ。それを与えてくれようとしている朱がたまらなく愛おしかった。
朱の脚を抱えていた腕を抜き、なかなか息の整わない彼女を優しく抱きしめた。
「……大丈夫か？」

「ん……、すごかったです……。宜野座さんの、いつもよりすごく熱くて、固くて、量もたくさん……って、え？　ちょ、ちょっと、これって……」

吐き出し終えたはずの宜野座のそれが、中で再度むくりともたげ始めたことに気づいた朱が、色気のない声を出した。

「仕方ないだろ。あなたがそんなことを言うから」

宜野座は気恥ずかしさをごまかすように、朱の首筋に口づけ、軽く吸った。

「ひゃあっ。……あの、もう一回、するんですか……？」

「……もう一回で終われるかどうか保証できない」

「え？　やっ、ちょっと……あっ！」

朱の体を抱え上げ、膝に乗せる形にして向かい合う。深くまで繋がれるし、朱の顔がよく見えて、宜野座の好む体位だ。

「ま、待って。そんなにすぐ、無理ですよ。力が入らないです……」

「あなたはつかまっているだけでいい」

「そんなこと言われても……あっ！」

先程までの激しい行為で宜野座も汗だくだ。しかし、肉体的な疲労は感じていない。鍛えているせいもあるが、なにより朱との行為が、心も体もこの上なく気持ちいい。何度でも抱き合えるような気さえする。

対照的に、三度も達して相当疲れている朱は、宜野座の首にしがみつくのに必死で、切れ切れに喘ぎを漏らしている。無理をさせたくないと思いつつ、めちゃくちゃにしてやりたくもある。

やわらかな尻をつかみ上下に揺さぶる。ぐちゃりと音がして、混ざり合った体液が行き場を失って流れ落ちてきた。もったいない、と宜野座は思った。自分のすべてを彼女の中にそそぎこみたかった。残したかった。

宜野座の首に顔を埋める朱の耳元で「顔、見せてくれ」と囁いた。いやいやと頭を振る朱の頬に右手を添え、半ば強制的に顔を上げさせた。汗と涙で濡れた頬、欲情した瞳、なにかを耐えるように結ばれた唇、どれもたまらなく愛しい。

「――愛してる」

「……っ！」

無意識に出た言葉だったが、自分でも聞いたことがないくらい甘ったるい声だった。朱の体が弓なりに反って、繋がった部分がぎちぎちと狭まった。特に動かしてもいなかったのに、宜野座の言葉だけで達した朱に驚く。

「……常守？」

「うぅ……だって……、そんな声、聞いたら……」

「……あなたは本当にかわいいな」

絶頂を迎えたことと羞恥で涙を流す朱の頭を撫でながら、その涙を舌で拭う。

朱は宜野座に強く抱きつき、長い髪をぎゅっとつかんだ。

「どうした？」

「……ずっと、そばにいて」

「ああ、離さない」

「宜野座さん……好き」

耳元で囁かれた朱の言葉に、宜野座のそれはどくりと疼いた。なるほど、耳元で紡がれる愛の言葉はかなりの破壊力だ。

頭を撫でていた手を背中に回し、隙間をなくすように強く抱きしめ返した。小刻みに腰を揺らし、何遍かに一度強めに突き上げる。朱を気持ちよくさせるための動きだが、同時に宜野座自身も追いやられる。

「常守……つねもりっ！」

「あっ……またっ……！　やっ、あっ、だめ、いっちゃう！」

「俺もだ……。くっ、あっ、いくぞ……つねも、りっ！」
「ふぁっ、あああ――っ！」
波が押し寄せる。意識すらも持って行かれそうなほど強烈な快感に、目を閉じて、朱を抱く腕に力を込めた。吐き出した熱は、二度目とは思えないほどの量だ。つまさきまで駆け抜ける電流のような痺れが落ち着いたころ、宜野座は腕の力を緩めて朱を解放した。
「常守？」
「……ん」
朱の顔をのぞき込むと、ぐったりとして目を閉じていた。かろうじて意識はあるが、相当に無茶をさせてしまったようだ。
「……すまない、平気か？」
「へいき……じゃない、です……。はげしすぎです……」
名残惜しいが自身を引き抜き、力の抜けた彼女を横たえて丁寧に後処理をした。繋がっていたところから白い液体が流れ落ちるのを見て、三たび集まりそうになった熱を、目を逸らしてやり過ごした。

浴衣を着せてやり、少し落ち着いた朱をうしろから抱きしめるようにして布団に横になった。右腕で頭を、左腕で腹を撫でる。
「……あなたは、男の子と女の子、どちらがいい？」
「ふふっ、気が早いですよ。……うーん、宜野座さんに似た男の子がいいかなあ。宜野座さんは？」
「あなたに似た女の子はきっとかわいいだろうな。欲を言えば、両方欲しい」
「……そうですね。たくさんの家族に囲まれて、にぎやかなのも、いい……かも……」
話しながらうとうとしかけた朱の髪にそっとキスをして「おやすみ」と囁いた。かわいらしい寝息をたてる彼女を起こさないように、宜野座は声を出さずに泣いた。悲しいときや悔しいときだけじゃなく、嬉しいときや幸せなときにも涙が出ると言うことを、朱に教えてもらった。
温かい涙が落ち着いたころ、もう一度「おやすみ」とつぶやいて、宜野座もまぶたを閉じた。

東京へ帰る前に、柊哉たちに会うことができた。両手をそれぞれ両親とつないで満面の笑みを浮かべる柊哉を見て、宜野座も朱も自然と笑顔になった。
「またきてね！　あかちゃんみせてあげるから！」
「ありがとう、また来るからね」

習慣で助手席のドアを開けようとした宜野座を、朱が制して先に乗り込んだ。
「帰りは宜野座さんが運転してください」
「構わないが、どうかしたのか？」
「……宜野座さんのせいで、いろんなところが痛いんですっ」
真っ赤な顔で拗ねるように言った朱に、宜野座は「すまない」と言いつつも、昨夜のことを思い出して、子供ができるまでの間に何度も無理をさせてしまうことになるかもしれないと思った。直接の感触の前には、自制心があまり役に立たない。
「大切なもの、か……」
ひとりごとのつもりでつぶやいたが、朱はきょとんとして「なんのことですか？」と聞いた。宜野座は笑顔でごまかした。
よほど疲れていたのか、帰りの車内で朱はすぐに寝息を立てた。無防備なその寝顔に、宜野座はこう思った。

「大切なもの」が増えてもそれらをすべて受けとめ、守れる男でありたい。だけど「いちばん大切なもの」と言われたら、まっさきに思い浮かべるのは朱の笑顔だ。それはきっと、ずっと変わらない。

【終】

人魚姫にはなれない

しきり

「私、前世は人魚だったと思うんです」
「はあ？」
波打ち際で一頻りはしゃいだ朱が漏らした言葉に、何を言っているのだと宜野座は彼女を見た。

同じ係の監視官二人が同時に長期の休みを取るのは難しく、結婚してから二ヶ月後にようやく実現した新婚旅行。そこで二人が泊まる宿泊施設は、朱たっての希望の海上のコテージである。当然本物の海ではなく、大きな室内に人工の海が作られ、周りの壁には海と同化するように空と砂浜のホログラムが投影されている。そして砂浜と海を跨ぐように建てられているのが寝泊まりするコテージ。大がかりな部屋であるために決して安いとは言えない宿泊料金だが、特別な記念にと思えばそれなりのものだった。
チェックインを済ませた二人がこの部屋に入った瞬間、朱はきゃあと声を跳ねさせた。大きな荷物はすでにコテージに運ばれているので、手にはハンドバッグを持っていたが放り投げるようにして朱は一目散に海へと走っていった。宜野座は慌ててバッグを掴みため息を漏らすも、嬉しそうにはしゃぐ妻の姿に思わず笑みがこぼれた。二人分の手荷物をドローンに渡して宜野座も海辺へと歩いていく。
砂浜には彼女の着ているワンピースとおそろいの白いミュールが転がっていた。波にさらわれないようにと海から遠ざけて揃えて置き、その横に自分のサンダルも並べた。
さて、自分も海に足だけでも浸けようかと振り向いた瞬間、宜野座の顔に水がかかった。
「うわっ!?」

「あははは っ」
「……朱」
まるで、いやまさにいたずらっ子の顔で笑う彼女に、やり返してやろうかと手が出かけるも大人げないと引っ込ませて、水滴で視界が見えにくい眼鏡を外して二足並んだ靴の方へと放り投げた。
「いいんですかー？　そんな雑に扱って」
「顔面めがけて水をかける奴が言うか」
「ごめんなさいっ、でもほんと、すごくって！」
大した反省の色を見せることもなく、子供のようにじゃぶじゃぶと波をかき分けて行く。
「おい、あんまりそっちに行くと深くなるぞ」
「大丈夫ですって！　溺れるほど深くは――うわっ!?」
宜野座のいる方へと振り向こうとしたところに波が押し寄せ、バランスを崩しぐらりと体が傾いだ。大きな水しぶきとともに倒れた朱の元へ慌てて駆け寄った。
「大丈夫か!?」
「けほっ……はい」
膝より少し高いほどの深さだったので、尻餅をつくことができた。咳き込みながら答えると、ほら見ろと言わんばかりの視線に、朱は苦笑いするしかない。
手を差し伸べられたので手を重ねるとぐいと引っ張られ、あっと言う間に抱きかかえられていた。
「伸元さん!?」
「君は泳げないんだから無茶をするな」
「確かにそうですけど歩けますよ！」
「今さっきすっ転んだのは誰だったか」
「……私です」
彼の言うことにむうと頬を膨らませて言い返せない代わりにぎろりと睨むも、宜野座は小さく笑うだけだった。
砂浜まで来ると朱を下ろし、宜野座はその横に腰を下ろした。
朱は、ふっ、と息を吐き、つま先にほんの少しかかる波をちゃぷちゃぷと蹴る。
「ねぇ、伸元さん」
波の音が響く中、朱はちらりと宜野座を見て言った。
「私、前世は人魚だったと思うんです」
「人魚姫って童話、知っています？」
朱の問いかけに、宜野座は少し悩んだ。
「昔、絵本か、いや、アニメか？　で、見た気がするが……確か、人魚の女の子が人間の世界に憧れて、魔法で人間になって、王子様と結ばれる、という話だったような」
「ああ、それです。そのストーリーならアニメですね」
朱の言葉に引っかかり、ん？　と首を傾げる。
「なんだ、違う話もあるのか？」
朱はこくりと頷く。
「おばあちゃんから直接聞いたお話なんですけどね、人魚姫って本当は、大好きな人間に会うために声を失うんですよ。それで、足を手に入れたはいいものの、その好きな人に何も伝えられず、最後は泡となって、消えてしまうんです」
「……なるほど、その話だと今の子ども向けのアーカイブからは除外されるな」
「ですよね、私も小さいときに聞いて、びっくりして泣いちゃった記

憶があります」
くすくすと笑う朱を、宜野座がじっと見つめる。
「それが、なんで前世になるんだ」
ああ、と朱は海を眺めて、きらきらと反射する波間にまぶしそうに目を細めた。
「人魚姫は足を奪われ泳ぐこともできず、それでも海が恋しくて泡になっちゃったんじゃないかなって思うんです」
朱は膝を抱えてその上に顎を乗せ、目を閉じた。波の音がよく聞こえる。
「私は本物の海に触れられないし、泳ぐのが苦手です。でも、ずっと憧れてる……なーんて、まだ結婚式のお姫様気分が抜けてませんね」
えへへ、と笑って朱が横を向くと、はぁ、と半ば呆れの入ったため息を吐いた。
「第一、本物の海に触れられない人間なんて全国民だと言ってもいいほどいて、その上で泳ぎが苦手な人間も山ほどいる」
「そうですね……」
「……それに、話と違って、あなたは……」
「伸元さん？」
途端に口を噤み、顔を逸らしてしまった宜野座に近づき、顔を覗きこもうとする。
「なんでもない」
そう言う彼の髪の隙間から見える耳は赤く染まっていた。朱はじっと見つめながら、彼の言った言葉の続きを考えた。
「あっ、そっか」
答えにたどり着くのは、簡単だった。
朱の声に、思わずといった風に宜野座は彼女の方を振り向く。彼女は嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「私は、大好きな人と結ばれたから、ですね？」
宜野座は自分の言いかけていたことを当てられてしまい、手で顔を覆い声にならない唸り声を漏らした。
朱はにこにこと笑みを絶やさないまま、彼に抱きついた。
「うわっ！」
片腕でしか体を支えておらずしかも不安定な砂場のせいで、突然抱きついてきた朱を受け止めきれずに宜野座は彼女に押し倒された。
「伸元さんなら、私が泡になっても見つけてくれそうです」
子猫のようにすりすりと身を預ける朱。そんな彼女のしっとりと濡れた髪を梳くように撫でていく。
「流石に無理だろう」
「例えですよー」
「……それなら泡になる前に捕まえておくさ」
ぱち、と目を瞬かせたかと思うと朱はむうと口を尖らせた。
「どうした？」
「どうしてそういうかっこいいことをさらっと言っちゃうんですか」
「いや、言っている意味が……」
「もうっ」
どういうことだと疑問符を浮かべる宜野座をお構いなしに、彼の顔に顔を近づけるとその尖らせた唇を彼のものに重ね合わせた。数秒間重なっていたそれは互いに乾いていたが、離れ際に赤く小さな舌が男の唇をぺろりと舐めたためにてらりと光っていた。
「お、おい、外だぞ……！」
「屋内ですよ」
「あ……そう、だな」
慌てて辺りに視線を回す宜野座に、朱はけろりとした表情で答えた。朱の指摘に、今はかけてない眼鏡を直そうとして右手が空振り、はー

っと長いため息をつきその手は額に置いた。
朱はその一挙一動を余すことなく見ており、ふふっと笑いをこぼす。
「伸元さんって時々抜けてるところありますよね、かわいいです」
「……君こそ、随分と可愛らしい下着を着けているな」
「へ？」
「さっきから、服が濡れて……」
朱はぱっと胸元へと視線をおろすと白いワンピースが濡れており、その上ずっと彼の上でうつ伏せになっていたのもあってぴったりと布が張りついて、うっすらとピンクの下着を浮かばせていた。
「わわっ！　え、えっち！」
朱は手を伸ばし、宜野座の目をその両手で覆った。
「……自分の妻の、なんだから見るだろ」
「うぅー、そう、かもしれないですけど……この旅行のために選んだから、もっと、その……ちゃんと見せたかったと言うか……」
尻すぼみになっていく声に、宜野座は目を覆う白く細い手首を掴んでそっと外させる。
「じゃあ見せてくれないか？」
「えっ!?　い、今、ここでですか？」
「屋内なんだから、いいだろう？」
「う……」
さっきのお返しだと言わんばかりの目に、朱は数分前の自分を呪った。
「伸元さんのえっち……すけべ……」
朱はぶつくさ言いながらも体を起こすと、ワンピースの裾に掴み一気に捲りあげて脱ぎ捨てた。
あまりの潔さに宜野座は一瞬言葉を失う。
「こっ、これでよく見えるでしょう！」
「あ、ああ」
ぷいとふくれっ面の顔を背ける朱が身に着けているのは、レースのフリルが縁に沿って彩られたピンクの揃いの下着で、いつものと比べれば少し布面積が狭くなっている。
「今日のために選んだのか？」
「そうですよ！」
少しからかいを含んだ問いに、やけくそ気味に答える朱を見て、宜野座はくくっと喉を鳴らした。
「わ、笑えるほど似合ってませんか!?」
「違うちがう。すまない」
完全に拗ねてしまう前に宥めるため、宜野座も体を起こして彼女の頭をぽんぽんと撫でた。
「今日のために選んだということは、少なからず俺のことも考えたうえで選んだのだと思うと、可愛らしいと思えたんだ」
頭を撫でた手を頭の後ろへと滑らせ軽く力を込めて固定する。
「……褒めてると解釈していいんですか、それ」
「ああ」
背けていた視線を正面に向け、目と目が合ったところでふくれっ面だった朱の顔は、ふにゃりとはにかんだ。
そしてどちらからともなく顔を寄せ合い唇を重ねた。先ほどのものよりも深く、男の唇を悪戯に舐めた赤く小さな舌は、今はその男の口に強く吸われてびくりと身を震わすことしかできない。口の端からはどちらのかも分からない、二人分の混ざり合った唾液がたらりと伝っていく。
「ん、ぁ……のふ、ひか、しゃん……」
深い口づけで酸欠になったのか、朱の瞳は涙で潤んでいた。
「朱……」

「……ずるい」
「は？」
「伸元さん、も、脱い、で」
「なっ、おいっ！」
宜野座の制止の声に耳を傾けることもなく、朱は後ろに下がり背を丸めてスラックスのボタンに指を這わした。ボタンを外してチャックを下ろすと、膨らみのあるボクサーパンツが見えてくる。朱はパンツのゴムを銜えるとそのまま引きずり下ろした。すると赤黒く勃った肉塊がぶるりと姿を現した。
朱は思わず、はぁ、と熱の籠った吐息を漏らした。その息に触れたそこはぴくりと反応する。
「っ、随分と、積極的だな」
「ん……言わな、れ、くら、ひゃい」
朱が恥ずかしげに眉をひそめるも、大きな肉塊を口に銜え、口を窄めてじゅぽじゅぽとはしたない音を自ら立てる。
今までに何度も体を重ねた中で、お互いに気持ちのいいところがどこかはもう知っていた。喉の奥まで銜えて吸い上げて、溢れ出てくる先走りを絡めた指で精の詰まった陰嚢を擽ると、口内にあるそれはさらに硬度を増していく。
宜野座は、ぐ、と奥歯を噛んで快感の波を耐え、朱の肩を押した。この小さな口によく入っていたと思えるほどの質量をもった肉がずるりと出ていき、肉塊の先端と唇に透明な糸の橋が架かる。それはいくらかか離れたとき、ぷつんと切れ、白い胸とピンクの下着に艶めかしく滴り落ちた。
「ん、もう……出しても、よかったのに」
宜野座は、少し不満げな様子を見せる朱の腕を引き寄せ、自分の足を跨ぐように乗せる。
「君がまだ、気持ちよくなってない」
「ひゃんっ……！」
朱の胸元に顔を埋めて肌を食み、指を足の間へと滑らせて下着に触れる。そこの感触に気付いた宜野座は顔を上げて朱を見上げる。
「――俺の見当違いだったようだな」
「あ、やっ……だ、め……！」
触れた先はぬちゃ、と音を立てた。
「銜えていただけなのに、もう、こんなにもか」
「う、海で、濡れた、から……ひゃぅんっ！」
ぷるぷると震え出した朱の顔は真っ赤に染まっており、ハアハアと吐き出す息も艶めいていた。布をずらし蜜壺に指を当てると簡単に挿入っていく。
「そうか、じゃあナカが濡れているのも、そのせいか？」
「――う、うそですっ！　あ……ふ、ふぇ、ら、して、きもちよく、なっちゃって……！　だから、お願い……もう……！」
ゆらゆらと腰を動かし、はっはっと犬のように息を切らす朱は、今一番欲しいものを目の前の男に乞うた。
「これ、ください……！」
硬い肉塊をそっと握り、潤んだ瞳限界だと訴える。
理性を手放すには、十分な材料だ。
「――朱っ！」
蠢いていた膣内からぬるりと指を抜くと、女の肉つきの良い腰をわしづかみ蜜壺に肉塊の切っ先を当てる。互いに十分潤った性器同士はすぐに絡み合い、ぬぷぬぷと挿入りこみ、一息置くと一気に奥まで貫いた。
「ああぁ――っ！」
「くっ、は、ぁっ……」

奥まで貫かれた衝撃で、朱はがくんと体を揺らし首を反らした。大きな波が去ると、かくりと頭を相手の肩へともたれかけた。
「う、ごくぞ……！」
「や……む、り……っ！」
ふるふると顔を振るもその意見は却下された。絶頂を迎えひくひくと蠢く熱い果肉を直に感じながら我慢など到底できない。掴んだ腰を揺さぶり、己のものを奥へ奥へと叩きつけていく。
肌と肌がぶつかり合うパンパンという音の合間に、波の音が聴こえる。二人きりの屋内ではあるが、熱に浮かされた頭では屋外の、本当の海で行為をしているように感じた。
朱は宜野座の首に腕を回し、足も腰に回してぴったりと抱きついた。
「のぶっ、あっ、か、さ……っ！　また、い、く……！」
「は、っ——俺も、だ」
「ん、あんっ！　いっしょ……に……んんっ！」
絶え間なく甘い声を出す口を覆うように唇を重ね、ただ相手を求めるだけを考えて舌を絡め合う。宜野座は何度か腰を打ち付けた後ひときわ強く穿ち、そして彼女の腰を押しつけた。
朱はふわりと頭の中が白くなっていく中で、自分のナカの熱塊がぶわりと大きくなって、どくどくと熱いほとばしりが一番奥に打ち付けられていくのを感じた。
「ん……」

「起きたか？」
朱が瞼を開けると、ベッドの上だった。ちょうどベッドに運ばれたところで目が覚めたらしく、横には腰を屈めてシーツをかけようとしている宜野座がいた。
「風呂入るか？　一応、簡単にシャワーで体は流したが……」
「あとで、はいります……今は、体……だるい、です」
起こしかけた体は再びベッドへと沈んだ。シャワーを浴びさせてくれた後に着せられたらしいバスローブの肌触りが心地よく、ふあ、とあくびが出る。同じものを着ている彼小さく笑ってシーツをかけてくれた。
「一時間後に夕食が来るよう手配したから、それまで休んでいるといい」
「はぁい」
ぎしりとベッドが軋んだかと思うと、彼がすぐ近くに腰かけた。ぽん、と大きな手が頭に載せられ、何度も何度も撫でてくれる。

本物の海に触れられなくても、泳げなくても、私は幸せだ。
波の音を聴きながら、その幸せを噛みしめた。

【終】

シーサイドラブストーリー

笠原のばら

まるでくらげのようだ、と宜野座は思った。

月の光を浴びて、常守のスカートがまるく輝く。目を背けてしまいたくなるほど真白のワンピースの裾が、波打ち際の風でたっぷりと揺れる。監視官であるときの彼女の雰囲気とはかけ離れたその姿に、何とも言えない妙な気分になってしまうことは否めない。

飛行場から航空機に乗って、遠く離れたこの島までやってきた。数十年前に上流階級の人々の別荘地として建設されたこの人工島まで、東京から数時間。出発したのは朝方だったにもかかわらず、コテージに到着したのは昼過ぎだった。到着してからすぐに昼食をとり、その後はずっとスーツケースに詰め込んでいた一週間分の生活必需品の整理をしていた。そしてそれにキリがついたのは外が暗くなり始めたころのことだった。

海に行きませんか。

そう誘ったのは常守の方からだった。借りているコテージから歩いて数分もかからない場所に砂浜があり、そこに行こうという彼女の誘いを断る理由などどこにもなかった。

完全に沈んだ太陽の代わりに、月がすべるように輝いていた。都心で見るよりずいぶんと自信ありげに輝きを増しているそれは、水面を白く照らしている。波に揺れる白い光に同じかたちはひとつもない。まばたきの瞬間だけでも景色は全く違うものに変化している。ゆらり、と視界の隅でやわらかな布が舞った。我に返ってそちらに目をやると、先ほどまで隣に立って同じように海を眺めていた常守の髪が揺れた。

「常守？」

宜野座の隣を離れ、行ったり来たりを繰り返している波に常守はそっと近づいた。淡い色をしたサンダルに着飾られた足は、波の際まで近づいたと思うとそのまま躊躇することなく海水にちゃぷ、と浸かっ

た。まるで生まれてきた場所に帰るかのように、海の中に常守は一歩、そしてまた一歩と歩みを進めていく。

彼女は服の裾を指先で軽くつまみ、膝下まで水に浸かるところまで歩き、そしてようやく足を止めた。遠浅の海のせいで、ふたりの距離はある程度離れてしまった。

その場所で、ゆっくり常守は宜野座を振り向いた。

「――宜野座さん」

ザザン、ザン、と耳の奥を波の音がすり抜けていく。薄いワンピースが光でかるく透けて、脚の形が露わになっている。彼女の髪の毛は沖からやってくるやわらかい潮風に揺さぶられて、白い裾と同じくらい頼りなく、肌の上をふらふらと踊っている。

「――常守」

絞り出せた声は彼女の名前だけだった。

その声が聞こえたのか、聞こえていないのかは分からない。常守は宜野座の方を見て淡い色の微笑みを見せた。

この国では、動植物の多様性が失われて久しい。温暖化による海面上昇で、国土の一部はすでに水の中に横たわってしまっている。他国との関わりを断ち、シビュラに身をゆだねたこの国にとって海は資源の宝庫でも、他の国につながる入り口でもなく、ただ国を浸食し死地と化させる要因のひとつにすぎない。もはや人々は海に営みや安らぎを求めることをやめかけている。多くの人々は、ホログラムの水族館に足を運ぶことはあっても、本物の海にどんな生物が存在しているかなどといったことにはもう興味を失ってしまったようだった。

海洋だけではない。国内で食物をまかなわなければならないという状況から、都心から遠く離れた場所において多くの森林が刈り取られ、ハイパーオーツの栽培に当てられている。行き場を失った生き物たちは、運良く安息の地を見つけることができていればそこに身を寄せているかもしれないが、生息地を追われた生き物の中でも熊や蜂、などといった人間に危害を与えかねないものたちはすでに国から消え失せている可能性の方が高いだろう。かつて森に住んでいた生き物たちのことには、都心の人々はみじんも関心を抱いていない。図鑑や本、もしくは娯楽施設のホログラムで見たことはあっても、直接それらの動物を見る機会などないに等しい。そしてそれは宜野座も常守も例外ではない。

常守も宜野座も、実際にこんなに都心から離れた場所に来て、遠浅の海をみつめるのは初めてだった。

その微笑みに引きつけられるように、宜野座は常守と同じように足を海の中に進めていた。急激に深くなる場所がないせいか、足を水にとられる心配はなかった。暗い足下に、白い光がちかちかと繰り返し揺れている。

やがて指先が触れあうほど近い距離で、宜野座は常守の隣に並んだ。水平線のずっと彼方にある、ぽっかりと夜にあいた穴から、絶え間なく白い光がこぼれ落ちている。

波の音が心地よい。単調だけれどもやわらかなその音に耳を傾けたまま、二人はしばらく無言でいた。障害がなにひとつない、まっすぐな水平線を見るのも初めてだった。ここにはそびえ立つような高層ビルも、たちの悪い粘着テープのような監視カメラもない。ただ海と、月と、浜辺があるだけだ。

変化しないことをよしとする社会に、変化しつづける自然の美。閉鎖空間に楽園を求める社会に、開放的で涼しさのある自然。それらが相反するものとなり、自然とあらゆるものの多様性が失われるということは、誰だって予知ができてしまうほど当たり前のことだったのかも

しれない。
しかし、そんなことは自分から遠く離れた過去の話だ。そろそろ上がるか、と声をかけようとしたところで、常守は突如宜野座の手首をつかみ、ぐいと引き寄せた。
「なっ」
完全に不意を突かれた。
ぐらりとよろめいた体勢の宜野座の手首をがっちりとつかんだまま、常守は自分の体重全てをその腕にかけて、宜野座を海に引き込んだ。
ばしゃんと二人分の音がして、水しぶきが周囲に飛び散った。倒れ込んで慌ててついた手のとなりでは水に浮いた服の生地と、常守の上半身があった。はっと顔をあげると、常守は楽しくて仕方がないというような笑みを浮かべてこちらを見ていた。
見つめ合った後、先に声をあげたのは常守の方だった。
「ふ、ふふっ」
ワンピースの裾は、本物の生き物のように水の中で揺れていた。
「あなたは本当に――予想できないことをする」
苦笑しながら宜野座がそう言うと、常守は「ごめんなさい、宜野座さんを驚かせるのが実は私、すごくすきなんです」とこぼしてからまたくすくすと笑った。変わった趣味だな、と口に出すとつられてくちびるが緩んだ。気づけば二人一緒になって笑っていた。
ひとしきり笑った後、水面の揺れが収まるように二人は真剣にお互いの瞳を見つめるようになっていた。濡れた水に浮いたお互いの瞳を穏やかに、でも食い入るように。
「――ぎのざさん」
我に返って冷静になった頭に飛び込んできた、ちゃぷちゃぷという水の音と、あまりにも角のとれたその声にぞくりとした。
このままではいけないと砂から手を離して立ち上がってから、宜野座は常守に手を伸ばした。常守は宜野座の手をとって起き上がり、張り付いた前髪をぐっとかき分けた。
ワンピースからはふわふわとした頼りなさが消え失せていた。ぴったりと皮膚に絡みつく白い布は、それ自体に意思がある吸盤になって彼女の白い肌を吸い上げている。そして海水でべっとりと首筋に絡みついている茶色の髪の毛が、光にあたってつやつやと光っている。
むき出しになっている肩からすべりおちる塩気のある水滴と、髪から落ちてゆくそれに目を奪われていると、常守の手がゆっくりと伸びてきてやがて宜野座の腕に触れた。
「びしょ濡れになっちゃいましたね」
宜野座さん、と常守は続けて、こちらをちらりと目だけで見上げてみせた。そんな瞳を見てしまってはもう白旗をあげることしかできない。
宜野座は触れられている常守の手を取り、砂浜に向けて踵を返した。
びしょ濡れのまま引いてきた、彼女の手は異様に熱くなっていた。コテージに入るとすぐに扉を閉め、宜野座は常守に口づけた。
「んっ」
潮の味がする口づけだった。くちびるの間をゆっくりと割って、舌を差し込むと潮の味がしない場所にたどり着いた。誰かに見られるからといって焦ってくちびるを離す必要も、他の何かに駆られて息をする間もないほど激しく舌を絡める必要もない。ここには、二人しかいない。
あたたかい時期に交尾をする蛇のように舌を絡ませ、ゆっくりと吸ったり舐めあげたりを繰り返す。そのままびしょ濡れになっているワンピースの肩紐に手をかけると、常守はくちびるを離してくすくすと

笑い始めた。
むき出しになった肩に向けて、くちびるを落とすとそこからも潮の味がした。
「宜野座さん、今日はやめておこうって言ってませんでしたか？」
小さく笑いながらそう言う常守を見て、宜野座も微笑んでみせた。
「その気にさせておいて。あなたは狡い人だな」
そう言うと、無意識か無意識でないのか、常守の喉がごくりと鳴った。そのまま中指にかかった肩紐をゆっくりと足下に向けて下ろすと、白いワンピースがべしゃりと音を立てて床に落ちた。
そっと肩を押すと、抵抗することなく常守はベッドに寝転がった。その上に覆い被さると、常守は瞳だけ動かして宜野座の方を見た。
「――宜野座さん」
やわらかに色づいたその声に「常守」と返すと、常守は先ほどと同じようにまた笑い出した。
「ぷっ……やっぱり、他人行儀過ぎませんか、私たち」
「そうだな……」
だったら、と宜野座は常守の頭の横に手をついて、顔を寄せた。
「朱」
唐突にそう呼ばれたことに驚いたのか、常守は目を一瞬丸くさせた。それから肩をふるわせて、表情を緩めて吹き出した。
「……ふふ」
「なにか間違えていたか？」
「いえ、慣れないなあって」
出会ってから、名字で呼び合う期間が長すぎたせいだろう。世間一般の恋人たちと同じように、ファーストネームで呼び合う文化はまだ二人の間では定着していない。仕事中はもちろん、二人きりの時に呼び合うことも滅多にしていなかった。
「朱」
もう一度、確かめるように宜野座は呼んだ。
「くすぐったいです」
「あかね」
常守の耳元にそっとくちびるを近づけて宜野座はそう囁いた。くちびるを離すと、こちらをまっすぐに見つめている常守とぱちんと目が合った。今度は声を出して笑うことなく、常守はそっと瞳を細めた。
「――伸元さん」
その響きに誘われるように、宜野座は常守の身体に触れた。しっとりと濡れた肌は手のひらにぴったりと吸い付く。そしてそれが当たり前のように、常守の手も無言のままそっと伸びてきた。

常守が26を迎えた頃、ついに彼女にもシビュラの相性適性診断の結果が下ることになった。ある一定の年齢を超えると、シビュラにより運命の相手の啓示をされることになる。一般人であるなら20代前半で診断結果が下りるのだが、監視官という多忙な職業についているせいかそれは遅めにやってきた。
もちろん宜野座も監視官であるうちにその啓示を受けたことがある。まだ常守が監視官として公安局にやってくる前のことだった。公安局で忙しく働いていてはいたが、ゆくゆくは結婚を、と考えたこともある。自分に合った――それならシビュラの診断結果でもかまわない――女性とつがいになることができれば、きっと自分の生活は安泰になるのだろう、とも。適性診断の相手の写真と経歴がデータで送られてきたときに、悪くない、と思ったのは本当のことだった。
けれどもその機会は完全に失われてしまった。
執行官には一般人と同じような人権は存在しない。シビュラからそ

のような啓示をされることもなく、一般の女性と出会う機会もないに等しい。しかし左腕を失ってしまったこと、父親を失ってしまったことと比べれば、その機会を失ったことなど宜野座の中では些細なことだった。このまま生涯ひとりで、公安局で執行官として働き、そのまま父親と近くの場所に骨を埋めるのも悪くない、そんな風に思っていた。

常守の相性適性診断の相手は、若くして政治家として名を馳せている男だった。

その結果を常守は隠すことなく宜野座に告げた。誰がどう見ても悪くない相手であり、マスコミでも悪い噂を聞いたことがない。その上色相もパウダーブルーの域を出ない、サイコパスの曇りとは縁遠い男だった。

けれども、常守は宜野座を選んだ。それだけの話だったのだ。

眠りから先に醒めたのは宜野座の方だった。人目や声を気にすることなく、のびのびとからだを重ね合わせていたぶんと、長距離の移動による疲労のせいか想像以上に長く眠っていた。執行官デバイスから時計を呼び出して、今が午前10時をすこし回った頃だということを知った。

目の上を軽くほぐして、首を回すとぱきりと関節の音が鳴って思わず苦笑した。常守を起こしてしまわないようにそっとベッドから起き上がると、皮膚がざらざらしていることに気づいた。海水で濡れたまま行為にもつれこんでしまったせいか、と気づいて宜野座はまた声を上げずに笑った。

室内の窓を開けてから、宜野座はシャワーを軽く浴びた。一日ぶりに浴びる湯の感覚を楽しんだ後、タオルで丁寧に義手を拭きながらシャワールームを出ると、ベッドでもぞもぞと動く常守の姿が視界に入ってきた。

「目が覚めたか？」

そう問いかけると「はい……」という頼りない返事がきた。その数秒後、びくりとシーツの中で常守の身体が揺れた。

「ええっ、もう10時過ぎなんですか！？」

おそらくデバイスの時計を見たのだろう。そのままごろんと身体を転がして、常守は仰向けになって小さくうめいてみせた。

「うわっ……なんだか寝過ぎちゃった気がします。早起きして宜野座さんとやりたいことがいっぱいあったんですけど」

常守はそのまま困ったように笑ってみせた。

「ひとつもできずじまいですね」

「焦らなくていい」

ベッドに腰を下ろして、宜野座は常守を見た。常守の身体はまるでウェディングドレスのように真白なシーツにくるまれている。宜野座はそのまま仰向けになっている彼女の瞳をのぞき込んだ。

「休暇は一週間取ってある。こうしてゆっくり過ごすのもいいだろう」

普段あまり見ることのない広い空と、砂浜と、潮風と、海に囲まれて。普段がせわしない分、のんびりと過ごすことができる時間は貴重だ。最初の数日くらい、ベッドでゆっくりと過ごしてもバチは当たらないだろう。

開けたばかりの窓から波の音が室内に飛び込んでくる。常守はそっと目を細めた。

「そうですね。せっかく二人きりの――バカンスですもんね」

そして二人は見つめ合い、ゆるやかに朝の挨拶をくちびるに落とした。

【終】

My body is filled with your tears.

ナカシマクロ

宜野座　伸元が決められた時間に刑事部屋にはいって最初におめでとうございます、と声をかけてきたのは一係で一番年下の監視官であった。とはいえ、腕を組んで事務的に済まされた祝福は、形式を気にする彼女らしいと言えば、彼女らしい。

「……ありがとう」

顔と態度に出る程度には宜野座は驚いた。勿論聡い彼女は気がついていて、なによ私が祝ったらいけないわけ、などと文句を言いながら、監視官の席へと戻っていく。それからしばらく奇妙な沈黙が続き須郷もやってくればそれは自然と解消された。やはり、この度はおめでとうございます、と深く頭を下げられる。

夜勤ということもあり、昼間よりも公安局内は静かである。それぞれに与えられた職務をこなしているうちに、第2分析室からコールが入る。潜入用に使っているドローンのメンテナンスに須郷を借りたい、という連絡である。たしかにこの三人の中では須郷が適任だ。霜月が許可を出して、須郷が部屋を出ていくと、彼女と宜野座は残った。またあの奇妙な沈黙が訪れて、それを煩わしく思ったのか霜月が珍しく宜野座に声をかけた。

「宜野座執行官、シフト変更の受理しました」

いつもならそんな一言で済むことすらメールですませる霜月に、宜野座は頷く。

「了解した、すまないな。負担をかける」

「シビュラの推奨プランですから」

二人はもうすぐ新婚旅行、というものに出かける。シビュラの推奨する慰安プランのひとつだ。そのためいつもよりも長めの長期休暇となり、一係全体のシフト調整が必要だった。ちなみにワーカーホリック気味の二人は別に住居が変わるわけでもないので長期休暇などは必要ない、などといっていたが、他の執行官やら分析官などに後押し

されるる形で、そのプランを選択することとなったのだ。
執行官は現状定数ちょうど居たのでシフトの調整が出来るんだろうが、監視官は定数がそろっていても執行官よりも数が少ないためそうはいかない。結果、他の係の監視官に頼んでもいるが、霜月に一番の負担がかかる。シビュラによるしわ寄せであるが、シビュラがそうしろ、というのだから、霜月に従う。それにここであの気に食わない監視官といつまでも子ども扱いしてくる執行官に恩でも着せておくのは悪いことではないだろう。
「確認した、問題ない」
「そういえばどちらからなんですか、プロポーズ。やっぱり先輩からですか？」
あとは上にシフトの変更を提出するだけだ。仕事はだいぶすませてしまったし、須郷も帰ってこない。何かと口うるさい宜野座と喋るとイライラするばかりであるが、興味がないわけではない。宜野座があの監視官に対しては過保護であることには知っていたが、結婚相手のサイコパスを気にするのであれば、結婚、などという選択肢を彼ならば選ばないはずだ。昔ほど過激ではなくなったとは言え、潜在犯の親族に対する風当たりは強い。あと数年もすれば厚生省入りするだろう彼女の監視官のキャリアにだって傷がつくことを、元監視官の彼が知らないわけがない。所詮自分の本能を優先させる潜在犯、ということだろうか。
「いや、俺からだ。こういうものは男からするものだろう」
「前時代的すぎません、それ」
いまや結婚だってジェンダーフリーになって久しい。時代錯誤も甚だしいのは髪型ぐらいにしてほしいものであると、霜月はため息を吐く。
「でも驚きました、宜野座さんにそんな甲斐性があるとは思っていなかったので」
「どういうことだ」
「そのままの意味です。まぁ、先輩は気にしてなさそうですけどね、そういうの」
「あいつは鈍いからな」
頭は悪くないはずなのだが、嫌みも通じないし、変なところで鈍いのが彼女の色相が濁らない理由の一つだろうというのだけは、少なくない宜野座と霜月の共通認識である。
「で、なんてプロポーズだったんですか」
「霜月監視官、なんでそんなに楽しそうなんだ。いつもなら執行官のプライベートなど気にしないだろう」
「暇ですし、先輩になんて言ったら落ちたのかは同僚として今度の参考にもなるかと」
「い、いや、普通に、結婚しよう、だが……」
「うわ、普通」
三十路を超えた男が耳まで真っ赤にして言うことだろうか。多分、先輩の前でもこうだったんだな、ということは容易に想像がついてしまって、自分の勘の鋭さに霜月は頭を抱える。
「ちなみに場所は？」
「親父の墓の前だ」
「はぁ？　そこはもうちょっと場所とかわきまえなさいよ！　っていうかそこで頷く先輩も先輩よ！　あーもう先輩もそんなに気にせずに、はい、とか嬉しそうに言っちゃったんでしょうね！」
確か二人が交際を始めたのは、かむいの事件の少し後であったと霜月は記憶している。もう二年も前のことだ。数年のつきあいの中で何度か喧嘩して口を利かない大人げない先輩たちをみて、潜在犯となんかさっさと別れちゃえばいいのに、と霜月はうんざりしたが、とうや

く落ち着くところに落ち着いた。
「あーもうこのまま先輩が産休とか入っちゃったらどうしよう……」
新婚旅行ならそこまでのしわ寄せはないが、そちらの場合だと長期休暇になってしまう。いっそ、先輩のいないうちに一係を牛耳っちゃえばいいんじゃないかという考えも脳裏をかすめたが、おそらくシビュラはそれを望んではいない。
「さ……っ」
明らかに動揺したらしい宜野座の様子に霜月は気がついてしまった。絶対にそんなこと気がつきたくもなかったが、このまま放っておくのも自分の色相によろしくない。
「ねぇ、もしかして、あんたと先輩ってまだセックスしてないわけ？」
「こ、婚前交渉になるだろうがっ！」
「……えっ、ああ、そうね、すみません、でした」
あまりの勢いに霜月のほうが謝ってしまっていた。謝った後に何故自分が潜在犯に謝らなければならないのかわからなかったが、謝ってしまったものは仕方がない。
つきあい始めの頃の二人は確かに初な雰囲気はあったが、気がつけばだいたい一緒にいたし、二年もすればそんな雰囲気すらなく常守の世話するのは当たり前みたいな空気を醸し出すほどではあったが、まさかまだセックスのひとつもしていない、というのは嘘だと思いたかった。大体この数年間べたべたべたべたしておいてなにをしていたと言うんだ、この人たちは。
「キスぐらいはしてるんですよね……？」
おそるおそる尋ねる。知らないことは知らないままでいる方がましだとわかっているのに、人間の好奇心というのは実にやっかいなものである。やや間があって、こくり、と頷かれ、ポニーテールが揺れる。正直三十路を越えた部下のそんな下半身事情とか、恥じらう様なんて知りたくはなかった。髭のそりのこしひとつないすべらかな白い頬が赤く染まっている様に霜月はうんざりする。
そんな時、ただいま帰りました、と須郷が帰ってきたので、遅い！などと霜月は怒鳴り散らしてしまった。自分がふがいないばかりに宜野座さんにもご迷惑を、などと青ざめている須郷がその日一番の被害者なのかもしれない。

さて、新婚旅行の初日だ。とはいえ、執行官の宜野座は妻が迎えに来るまで官舎で待つことになり、その移動も公共の乗り物を使うこともなく、申請してあった公安局の車を使うことになる。表向きは執行官の外出に同行する監視官、という形式から外れることはない。
「おはようございます、宜野座さん」
いつもはスーツでやってくる常守　朱であるが、今日ばかりは官舎内ではスーツのホロをかけていて、車に乗り込むとそのホロを解除させた。すっきりとしたデザインのレモンイエローのワンピースに、白のカーディガンである。宜野座もまたいつもの堅苦しい黒のスーツではなく、グレーのワイシャツに黒のパンツといったラフな格好だ。
「すまないな、迷惑をかける」
潜在犯と健常者の結婚は別に法律で規制されているだけでもないが、様々な壁がある。これからもきっと常守に負担をかけてしまうのだろう。
「これぐらいなんともないですよ、宜野座さんと一緒に居られるんですから」
そう言ってふにゃり、と嬉しそうに笑うものだから、つい抱きしめたくもなるが、今は車中であり、新婚旅行は始まって十分程度だ。ど

れだけ自分が浮かれているのかと、戒めるようにひとつ咳払いをして窓の外へと視線を逸らす。
「ここから約二時間か。あなたは寝ていてもいいぞ。夜勤だっただろう」
「仮眠もしましたから大丈夫です」
運転はオートモードなのでハンドルから手を離しても問題はない。常守はシフト調整のしわ寄せで、休暇のぎりぎりまで仕事だった筈だ。だというのに、常守は起きている、と首を横に振って、楽しみですね、と微笑む。
多忙な為、挙式などは行っておらず、役所宛に必要事項をいくつか打ち込んだだけで、二人は婚姻と呼ばれる行為を終えていた。おめでとうございますだのというメールに軽快な明るいメロディーのデータが添付された役所からの受理メールには、二人して少し笑ってしまったのもつい先日のことである。
「そういえば六合塚たちからと須郷から結婚祝いをもらったから荷物の中にいれてある」
「わたしも雛河くんから預かってきました。あとでお礼を言わないとですね」
「何か土産でも見繕っていくか」
六合塚と唐之杜から、というのは分かりやすいが、その連名の中に霜月の名前もあったのは意外ではあった。
「それから宜野座さんのおばあさまと、あとはうちの家族と香織からも。こっちはマンションの方に届いてるので、宜野座さんが見に来てください」
「了解した、一度リスト化しておいたほうがいいだろうな」
「そうですね」
他係の執行官からも祝いの言葉だのなんだのをもらっている。宜野座は今までに出てきた人間をとりあえずデバイスにメモをとった。

当直勤務のあと仮眠をとったとはいえ、やはり体を休める時間が必要だったのだろう。移動中に寝落ちした常守の代わりに、宿泊のためのチェックインだけをオンラインですませる。それからアナウンスされるがままに案内されたコテージのベッドまで運び、掛け布団をかけてやる。この休みを取るために随分な仕事量をこなしてきたらしい。
形のよい頭をくるりとなでてやると、常守の口元が自然と緩んでいく。緊張感のない唇に宜野座は起きたらちゃんと叱ってやらねば、という意志が徐々に削がれていく。
「まったくあなたの無茶はいつになっても変わらないな」
諦めたようなそれは宜野座自身ももう諦めているのか心なしか穏やかなものだ。切りそろえられた前髪を整えてやる。
「宜野座さん」
「……っ、すまない」
不用意に触れてしまったことに対してそんな風に謝れば、常守は首を傾げた。
「なんで宜野座さんが謝るんですか。ええと、私が途中で寝落ちしちゃったところまではなんとなく覚えてるんですけど、宜野座さんがここまで運んでくれたんですよね？　どれくらい寝てました？」
「ざっと二時間だな」
背中に抱えていたときも常守は一向に起きなかった。それどころかたまにむずがって暴れたりするので、何度か腹を蹴られたりもした。
「……すみませんでした」
「だから無茶はするなと言っている」

一応は反省しているようだから常守の涎で宜野座のシャツの肩の部分が濡れてしまったことまでは言及しないようにしておいてやろう。申し訳なさそうに肩を竦めている常守を見て、意地悪がすぎただろうかと少しだけ反省をして、常守、と声をかける。

「もう少し休んだ方がいい。まだ疲れもとれていないんだろう」

そう言って軽く肩を押してやれば、そのまま常守の身体は抵抗もなくベッドへと沈み込む。

「でも」

「いいから寝ていろ。食事は？」

寝起きのせいか胃の感覚は鈍く、常守は首を横に振る。

「おやすみ」

「おやすみなさい、宜野座さん」

宜野座の言葉に誘われるまま常守は糸が切れたみたいにまた穏やかな寝息をたてはじめた。出会った頃から比べるとずいぶん成長したと思うが、寝顔は宿直で居眠りをしていた時のあどけないままだ。

「……どうしたものか」

二人にあてがわれたのは自然公園の中にあるコテージのひとつである。もちろんホロではない。部屋自体は広々としていて、居心地もよい。本物の植物の鉢植えまであって、窓から見える森林だって本物だ。他の宿泊客と会うこともなく、部屋に小さなキッチンもあって、極めてプライベートな空間と言っていいだろう。何か必要なものがあれば、オンライン注文でドローンがすぐに届けてくれるようになっていた。

ベッドだってあの寝相の悪い常守が大の字で三回寝返りを打ったって平気な位広々としているが、問題はその数だ。確実に一人用ではない部屋なのにベッドは一つしかない。キングサイズ、と呼ばれるそれは二人で眠っても余裕があるだろう。つまりベッドは二人用、部屋には二人。何にも問題はない。

常守が一つ寝返りを打つ。流石に寝間着に着替えさせることはできなかったので、めくれあがった布団から大胆にさらけ出された太股からふくらはぎまでを視線からはずしつつ、宜野座はある一つの妥協案を採用することにした。

「ソファーで寝るか」

別にこれは初めてのことではない。宜野座の部屋に仮眠にきた常守を寝かせてやれば宜野座の寝床はいつだってソファーだった。リビングルームのベッドは広々としていて、少し背を丸めれば宜野座が眠る分には幅も問題はない。クローゼットから毛布を一枚拝借して、宜野座は寝室を出ていった。

翌朝、宜野座が起きると常守の書き置きのメモがあった。少し森の中を走ってきます、と短いそれに潜在犯をひとりこんな場所に放置していくな、とも思うが随分今更のことだ。彼女が帰ってくる前に朝食の準備を手早く済ませ、暇つぶしに厚生省推奨のニュースに目を通していると、トレーニングウェアを着た常守が息を切らせながら帰ってきた。

「おはようございます、宜野座さん。わぁ、なんかバターのおいしそうなにおいが……」

「おはよう、こんな時ぐらい休んだらどうだ。軽く朝食は準備しておいたから着替えてこい」

部屋にかおるバターの溶けていくかおりに鼻をひくつかせる姿は大好きなご飯の準備された時の愛犬の姿とどうしても重なってしまう。はい、と常守は寝室の方へと入っていく。あわただしい奴だとひ

前髪を指先でいじりながら、宜野座さんの髪ってふわふわしていて気持ちいいですね、と彼女は微笑む。
「それでアーカイブで調べたんですけど、地べたに座るときに膝を折るから膝枕、というらしいです」
疑問があれば答えてくれる、便利な世の中だ。そんな中でもどうしても答えがでないものはいつしか、色相の濁りになると切り捨てられることが多くなった。考えることを徐々に奪われている。そのように感じられるようになったのはいつからだろうか。
「常守、いつまでこうしているつもりだ？」
「嫌ですか、こうされるのか」
「嫌じゃないが、重いだろう」
「重くないですよ、それにこうやって宜野座さんを見下ろすのって新鮮でなんだか楽しくって」
たしかに常守は上機嫌だ。さらさらと髪の毛を彼女の細い指に梳いてもらうのは心地よい。宜野座もまた機嫌よく吐息を吐き出した。きっとダイムが撫でてもらう時の気持ちはこんなものなのだろうなんて思いながら、瞼を閉じる。
まだ眠いですか？　と常守に尋ねられて、どうせこんな時間に外に出たって仕方がないだろうと、宜野座は返事をする。
ふと、目を開ければ、くるりとした大きな瞳がこちらをみている。なにを疑うでもない子どものようなそれは仕事中には決してみられるものではない。信用されているのだ、そのことに対して宜野座は少なからずの喜びを感じる。
「常守」
ゆっくりと上体を倒して唇を重ねた。常守もくすぐったそうにそれに答えるものだから、何度も角度を変えながら口づけを交わす。常守のほうがやや温度は低いだろうか。ぬくもりを分け与えるように、続けているとまだ慣れない行為に緊張していただろう常守の唇から力が抜けていく。
唇に触れるだけでも心地よい。薄く開いていた唇の中に舌をねじ込めば、常守はびくりと肩を震わせた。
「常守？」
なにやら様子がおかしい。宜野座は常守の両腕を押さえるようにしてから、唇を離した。性急すぎたか、と自分の自制心のなさに落胆もしたが、とにかく、と横になっていた常守を抱き起こし、自分の膝の上に乗せる。こうすればもう逃げられる心配もないという無意識下の行動だ。
「あ、いえ、なんでもないんです。突然で驚いただけで」
「こっちをみろ、常守」
驚いている、という反応ではない。嘘をついている、ごまかしている。それくらい見破れなくて、常守の無茶や無謀に小言を言いながらもつきあってきたと思っているのか。そんな彼女を宜野座は何度も見逃してきたし、これからもきっと見逃し続けるのだろうが、プライベートなこの状況では見逃してやる道理はない。
おずおずとこちらに向けられたのは困ったように揺れる大きな瞳で、浮かんでいるのは明らかな困惑だ。どうやら自分は彼女を困らせてしまっているらしい。そんなに下手だったのだろうか。何かタイミング的なものを間違っていたのかもしれない。
「すまなかった。不用意に触れたせいか？」
「違います」
「じゃあ、どういう」
ことだ、と続ける前に常守の方から突きつけられた。
「宜野座さん、わたしのこと抱けるんですか？」
「……は？」

間抜けな声が漏れてしまったのは仕方のないことだと宜野座は思う。

「そのつもりがなかったら結婚なんてしないだろう」

ごくごく当たり前のことを答えれば、常守はふるふると首を横に振る。

「最近は色相の安定の為に結婚はしてもセックスはしない夫婦もいるらしいです」

過剰なストレスケアのひとつ、というべきか。少子化に繋がりかねないと、厚生省では頭を抱えている問題になっているとは監視官時代に厚生省の資料で見かけたことがあった。

常守はぐすり、と鼻をすする。自分の我が儘で今、宜野座のことをすごく困らせている自覚はある。心底情けなくて、今すぐ逃げ出してしまいたい。

だって何をやっても駄目だったのだ。

「唐之杜に教えてもらった通販サイトで買った短めのスカートでデートに行ったときも身体が冷えるだろうって怒るし、ベンチではわたしの膝にジャケット掛けましたし。お酒の力を借りて本音を聞いてみようにも宜野座さん先に酔いつぶれちゃいましたし……」

なんかもう自棄になっていろいろやってみても駄目で、結局落ち着いたのは元々清廉潔白を信条に生きてきた宜野座はそういう行為を常守に求めていないのだ、という結論であったという。

たしかにやたらと短い丈のワンピースの常守とのデートは覚えている。いつものストッキングもなく晒された白い脚にたしかに生唾の一つも飲んだがそれ以上に風邪を引きそうだという心配が先行した。酒に関しては宜野座からすれば情けないことではあるが、常守が強すぎるのだ。

「なんというか、すまなかった」

「宜野座さんが謝ることじゃないんです。ちゃんと聞けばよかったのに、それが出来なかったんですから」

「常守らしくないな」

疑問があれば尋ねる。自分で思い悩むよりは解決にも解決にもつながり、色相にもよろしいとされて推奨されている行為のはずだ。

「だって宜野座さんは私のことなんでもわかってるのに、私はわからないってなんだか悔しいじゃないですか。それから、自分ばっかりこんなことを考えて、きっと宜野座さんは私が望んでいると分かったら、きっとその通りにしてくれる」

「だから常守。俺はそこまで」

猟犬であるという自覚はあるが、獣にまで落ちたつもりはない。好きでもない女はおそらく抱けないだろう。そういう部分は犯罪計数が跳ね上がった今でも、社会に対して公平に誠実であり続けようとしている彼の本質みたいなものだ。

「はい、私のうぬぼれでした」

目元を僅かに赤くした彼女はへにゃり、と笑う。全くどうしようもないな、と宜野座も苦く笑って、どっと脱力したみたいに、ソファーに背中を沈ませた。腕の中に常守を抱いたままであったので、彼女もまた宜野座の方に身体が倒れる。

宜野座さんがそういうの出来ない人なのかなって思ってました、という言葉に宜野座はがくりと肩を落とした。

「どうしてそうなったんだ」

「宜野座さんあんまり子どもとか考えてないと、思ってたので。そういう行為に関しても興味がないものかと」

ああ、と宜野座は納得する。宜野座は潜在犯の子どもとして随分と昔苦労をした。自分の子どもにも同じ苦労をさせたくないと考えているのでは、と常守は考えていたらしい。行為自体色相が濁る、とサプ

リなどで抑制する者もいるというから、おかしなことではない。
ふと、宜野座は違う可能性に気がつく。
「言っておくが、同情であなたとつきあっていた訳じゃないぞ」
そんな獣の傷の舐め合いのような関係、冗談ではないと宜野座は眉間にしわを寄せる。
「わかってますよ、そこは心配していません」
「逆に気になるんだがその根拠は？」
愛情がある、ということに対しては常守は揺らがなかったという。
「だって宜野座さん、嘘つくのがあまり上手じゃありませんから」
あまり格好のつくものではなかったがそれでもすれ違うことなく常守が信じていてくれたことを思えば、下手でもよかったと宜野座は肩を竦めた。
でもよかった、と宜野座は思う。
「俺も安心した」
「何がですか？」
宜野座は口を開くことなく、常守の薄く開いたままの唇へと口づける。少なくとも彼女は自分の目の前でまだ我慢することなく泣けるらしい。

ソファーに横にすると、ここでですか、せめてお風呂にはいってから、なんて言葉が飛んできたが、聞かないことにした。もっときちんと手順を踏んで進めることなのだろうが、もうすでに手順もなにもかもすませているのだから問題はないだろうと、宜野座は常守の服を抜かせて床に落とし、その上に自分の服を放った。
大きく脚を開かせる。常守からなにやら声が漏れたが、耳に入らなかったことにして宜野座は、中央のやわらかく閉じた場所へと唇を落とした。びくん、と脚が跳ねるが押さえていたから問題はないだろう。自分の一挙一動にこんなにも反応を返してくれるのがかわいくて仕方がない。舌で花弁をこじ開けて、唾液で濡れた花芯へと舌を這わせる。
「っひ」
ここはまだ強すぎるらしい。焦らないように、ゆっくりと怖がらせないようにと細心の注意を払っているつもりなのだが、うまくできている自信はない。自分の腕の中で一番大事にしている女の子が泣きそうになっているのに、自分が感じているのは血が燃えるような興奮ばかりだ。
開かれていない蜜壺からは内側からあふれたような蜜で濡れていた。それを味わうように舌を這わせれば、常守から汚いです、と泣きそうな声で非難の声が浴びせられた。
汚いか汚くないなんてことはもはや彼にとってはどうでもいいのだ。
ただ、どこまでも常守という女性を貪ってしまいたいのだという欲求ばかりが先行して、その通りに身体は動く。もっとと強請るように、蜜壺にちゅくちゅくと音をたてながら強く吸いつけば、常守はくしゃりと顔を歪めて、あられもない声をあげる。
もうやめてください、と髪を強く引っ張られて、宜野座はようやく顔をあげて、口元を腕で拭う。
「痛いぞ、常守」
「宜野座さんが離してくれないからですよ」
ひっく、としゃくりあげながら常守は眉をしかめる。
このまま続けたら、蹴りあげられそうなので、仕方なく宜野座はそれ以上の愛撫の手を止めた。

貫いた常守の身体からどろりとこぼれたものに宜野座はわけもわからずに興奮する。ようやく自分だけのものになったのだという喜びと責任は心地よいもの以外のなんでもない。彼女に傷をつけたのと同意義であるというのに、己の欲望にうんざりしながら、彼女の身体を貪ることを本能は肯定し続けるのだ。

最初は彼女をとにかく怯えさせないようになんて最初は考えていたくせに触れてしまえばもう駄目だった。何度も唇をあわせて、その白さの与える印象からはまったく想像のつかないあたたかな肌へと指を沈ませる。薄い腹をまさぐれば、くすぐったそうな声が常守から漏れた。ふと顔をあげれば、常守はきょとん、という顔をして、それからふわりと笑う。

「どうした」

さっきまで泣きそうな顔をしていたくせに案外余裕でもあるのかと宜野座は手の動きを止める。

「ああ、いえ。宜野座さんも結構いっぱいいっぱいなのかな、と」

「それはそうだろう。あなたに触れるんだから」

観察されていたのかと思えばやや気恥ずかしい。それでも真実なのだから仕方がないが、なんとなく投げやりに答えてしまえば、今度は常守のほうから視線を外された。よくわからないが照れているらしい。赤くなっている耳朶に無意識に近い状態で噛みつけば、あまり色気のない声があがる。

どこまでもぎこちがない夜だった。いつもの連携が嘘みたいにお互い思い通りにならないことをもどかしく思いながらも、お互いのことだけをずっと考えている。

決して泣かせたいわけではないけれども、彼女は大好きな人の死すら己の意志で身のうちに押しとどめてしまった。宜野座にはできなかったことだ。信頼していた部下を、父を殺した相手を殺してやりたい、そんな憎むべき対象は、友人と呼んでいいのか今になってはわからない男によって殺されて、宜野座の殺意はぽっかりと宙へと浮かんだものの、犯罪計数が下がることはなかった。

彼女は事件が解決するまで決して泣かなかった。ただ、その終わった瞬間にその場に居合わせてしまったのが自分である。あとになってもっとハンカチを差し出すとかもっと出来ることはあっただろうに自分はそれこそ案山子みたいに突っ立っていることしか出来なかった。

それからだろうか。彼女の泣き場所に自分がなってやれないだろうかと考え始めたのは。芽生えたそれを自覚して、霜月に言わせればあまりにも幼稚だろう思いを伝えれば、常守は驚いて少しだけ考えさせて下さい、なんて言って三日後に答えをくれた。

それからもやっぱり常守は決して泣かなかった。

痛みにその身をさらしながらもずっと耐えている。

唇を引き結び、犯罪というものを理性的に憎み、秩序に乗っ取った決まりを守り続ける。秩序の番人ね、なんて唐之杜がたしか以前笑っていた。どうしようもない局面でも姿勢を正しているその姿はたしかに常守にはお似合いではあるが、冗談じゃない、と宜野座は思う。

宜野座にとって、常守朱という女の子はひとりの大事な女の子なのだ。秩序なんてものに食われてたまるかと、潜在犯らしくその腕を引いた。

涙で濡れた頬は赤く熟れた甘そうな果実のようで、べろりと舐めて

みれば、塩辛さのなかにやはり甘みが感じられた。突然わけもわからない箇所を舐められ驚いて目を丸くしている隙に常守をひっくり返す。宜野座はべそをかいて、時折しゃくりあげる常守の白い背中に指を這わせた。

もう無理、だとか常守は泣き言をいったが、宜野座はそれを聞き入れようとは思わなかった。ぐちゃん、と溢れた白濁に何度彼女の中に放ってしまったかなんて、宜野座だってもう覚えていない。

「ひぁっ、あっ、やぁ……っ」

あるところをこすりあげれば、常守の身体が弓のようにしなる。隅々まで探るようにしていれば、いくつか特別気持ちがよい部分が彼女の中には存在しているらしい。

一度枷が外されてしまえばもうどうしようもなかった。また、常守も止めようとはしないので、自分の良いようにとることにする。後ろから挿れれば、正常位よりも深く入っているようでたまらないし、抜き差しにもちょうどよかった。身体を支えるのが億劫になったのか常守の腕がぺたりとベッドに崩れれば、腰だけを高くあげた姿で宜野座の熱を受け入れることになる。常守は縋るように枕に顔を埋めていた。それすら気に入らなくて、枕を奪って床に投げる。

何かすがるものをさがすように虚ろな表情は強く腰を打ちつければまた焦点を失って、宜野座はがつがつと何度もそれを繰り返す。動物みたいに獲物を追いつめていけば、蜜壷がきゅう、と収縮して吐精を促し、逆らうこともなく、内側にすべてを吐き出した。

ずるりと引き抜けば溢れた白濁がシーツを汚す。常守だって随分汗やらなにやらの体液にまみれていて、宜野座という支えを失った身体はくたりとベッドへと崩れていく。

「常守」

自分でも驚くぐらい、温度のない、理性というものが感じられない声だった。名前を呼ばれて反射的に顔をあげる常守を抱き上げ大事なものだと言わんばかりに、自分の膝の上へと乗せる。

汗で濡れた頬を右手で撫でてやると、常守はくすぐったそうに笑う。そのことに僅かなばかりの理性を取り戻し、宜野座は熱のこもった吐息をひとつ吐き出した。

「大丈夫か？」

「こんな時にも宜野座さんは私の心配をするんですね」

「当たり前だ。俺がそういう風にしているんだから」

「それはそうですけど。ちょっとだけ痛いですけどもうよくわからないんです」

常守はそう言って困ったように笑う。

「怖い、とか痛いとかはたしかにあるんですけど、宜野座さんに撫でられるとそういうのなくなっちゃうんです。宜野座さんがいるから大丈夫、間違ってないんだ、って」

「俺にそこまでの判断を求めるのか」

「宜野座さんは私のストッパーですから」

「止めて止まるようなやつだったか？」

何度止めたって彼女は突っ走って結局宜野座はその後始末に走ることが多い。六合塚には宜野座さんが甘やかすからじゃないですか、と冷めた言葉をもらったことがあるが、甘やかしてなんていないはずだと宜野座自身は断言している。

「どうしても駄目だったなら、宜野座さんは私のときっと殴ってでも止めてくれるでしょう？」

さっきまでわけもわからないぐらいに喘がされていたくせにその瞳にはたしかにはっきりとした理性があった。今の自分では常守に返り討ちにでもされそうなんだが、なんて言ったら、引っかかれそうなので黙っておく。

お許しがでたのだからもうためらう必要はないと、宜野座はまたも理性というものを手放して、彼女の唇を、まなじりを貪る。彼女の中が自分の欲で満たされるように、自分の中も彼女の涙で満たされてしまえばいいのに。そんなことを考える余裕すらもうとっくに手放している。

ベッドで眠っている常守に宜野座がまずしたことは、デバイスに入っている簡易スキャナで彼女の犯罪計数を計ることであった。相変わらず今日も彼女は社会に対して良い存在であるという数値に宜野座はほっと胸をなで下ろす。

宜野座はゆっくりと身体を起こした。カーテンの隙間から漏れてくる光でまだ外が明るいことはわかったが、今が朝方なのか、それとも夕方なのかは分からなかった。執行官デバイスで朝の四時五十分であることを確認する。横で眠っている常守はというともはや寝相をうつのも億劫なのか泥のようにベッドに沈み込んでしまっている。すやすやという穏やかな寝息は聞こえてくるし、簡易色相チェックをしてみてもやはり常守は今日もクリアな色相を保っている。

おそらく常守のことだから寝ている間に計数を計っているなんて知ったら、怒るか呆れるかしそうではあるが、心配なものは心配なのだから仕方がない。おそらくこれからもきっと自分は同じことを繰り返すのだろう。そういう性分なのだから仕方が無い。万が一彼女の係数が上がっていたら自分はどうするつもりだろうか。そんなもしもを考えて、夫婦が執行官というのは前例がないな、なんてのんきなことを考えてしまう。

眠っている間に食事の準備ぐらいはすませておいたほうがいいだろうと宜野座はそのままベッドを出た。体力的に問題はないが、やはりけだるさは残る。一度ふやけた頭をリセットする為にシャワーを浴びるべきだろう。

「宜野座さん」

動いた気配で常守も起きてしまったらしい。しなやかな曲線を描く背中がシーツの中から現れる。ぽつりぽつりと白い肌に浮かぶような痕は昨晩自分が施したものだだ。

「汗だくだから、シャワーを浴びてくる。あなたはもう少し寝ていた方がいい」

あえてそちらから視線を外したことに特に深い意味はない。ただまるで悪いことをしでかしてしまった子どものような気持ちで逃げることも出来ずに佇んでいると、宜野座さん、と名前をもう一度呼ばれた。

やはり具合でも悪いのだろうかと心配になって、いまだに枕に顔を埋めている常守の方へと近づき、その顔色を伺おうとする。鉄みたいに頑丈なサイコパスを持っていることが取り柄とは言え、そちらの面から健康状態が確認できない分、常守の体調管理というのはおざなりになりがちなのだ。

「常守、身体は大丈夫か？」

そういう風にした本人が尋ねるのは実に滑稽だろうが心配なものは心配だ。常守は小さく頷く。

「お風呂、わたしも入りたいです」

それもそうだろう。身体がべたついて気持ち悪いのか常守は軽く身じろぐ。

「風呂もついでに入れてくるから少し待っていてくれ」

ついでに飲み水も必要だろう。常守の声は寝起きのせいだけでなくかすれていて、いつものはっきりとした声からはほど遠い。急いでシ

ャワーをすませてしまわなければと、寝癖のついた後頭部をなでやれば、常守はゆっくりと顔を上げる。

赤くなった目元にぼんやりと潤んだ瞳と視線が混じった。その瞬間、ぞくり、と背中が泡立つ。やはり今近づくべきではなかったのだと後悔しながら、まずいと宜野座は身体を引こうとしてそれが出来なかった。

「連れていって下さい」

そんな風に子どものように無防備に両腕を伸ばされてしまえばもう逆らえないことをきっと彼女はわかってやっているとしか思えない。思い切り大きなため息を吐き出し、常守の身体を大事な荷物みたいに抱えてやる。思ったよりも重みがある、なんて言ったらひっぱたかれそうではあるが、そこにあるのは人の身体だ。

腕の中で常守は大きな目を丸くして少し驚いているようだった。

「どうした、どこか痛むのか？」

「いえ……まさか本当にしてくれるとは思っていなくて」

いわゆるお姫様だっこ、というものだ。

荷物のように小脇に抱えて連れて行かれるとでも思っていたのだろうか。まったくもって失礼な話だ。常守は不穏な空気を察したのがゆるく宜野座の首に巻き付けていた腕の力を強くした。耳元に彼女の吐息が降りかかってくすぐったくて、宜野座は肩を竦める。

「常守」

「はい、なんですか」

「風呂の準備にはもう少し時間がかかるからな」

つまりそれまでの僅かな間は休ませてやるつもりはない。少しばかりの意趣返しというやつである。

だというのに、常守ときたら頬を赤くして押し黙るくせにその様子はちっとも嫌がっていない。ただ昨日のことを思い出したのか宜野座の方からは視線を外し、恥ずかしそうにふるりとまつげを震わせただけだった。

おそらくこれからもこんな調子で彼女には勝てないのだろう。

そんなうんざりした気持ちで宜野座は乱暴に浴室の扉を脚で開いた。

【終】

海の彼方に

山岡鉄心

むせかえる熱気が肌を撫でる。輸送機から降りた瞬間、朱は風に含まれる湿気に思わず眉を顰めた。

「暑い……」

零れた不満は後ろの青年に笑い声で拾われた。それを照れ隠しの笑いで答えながら朱はジャケットを脱いだ。こんな気候だ。ジャケットを着ているのが馬鹿馬鹿しい。

颯爽とタラップを降りる宜野座は涼し気だがよく見ると首筋に汗を一筋流している。暑いのならジャケットを脱いだらいいのに。朱は頑なに『執行官』でい続ける宜野座の真面目さに心の中で微笑んだ。

「宜野座さん、ジャケット脱がないんですか？」

「脱いでもすぐ移動して官庁公社行きだろう？　仕事が終わったら脱ぐ」

歩き出した後姿は黒豹のようにしなやかだ。煌々と照り付ける陽の光の中で闇色のスーツは異質なものだが、この男が身に着けると様になる。朱はそのしなやかな背を見つめながら後を追う。

（足が縺れたと言ってぶつかってみようかしら？）

悪戯心が鎌首をもたげるが一瞬にして崩れ去る。宜野座が振り向き手配された車のドアを開けて待っているのではないか。朱は小走りで近づくと一礼して車に乗り込んだ。

バタンとドアが閉められ慌ててそれを開けると、朱は立ち竦む宜野座に手招きをする。

「宜野座さんも早く乗ってください」

「執行官は監視官と同じ車には乗れないだろう」

「日本ではそうですけど、ここで手配できた車は一台だけなんです。それとも宜野座さんは庁舎まで走りますか？」

そんな風に声を掛けると僅かに眉根を寄せられた。ムっとした表情が拗ねた子供のようだと頬が緩むのを堪えながら、腰を浮かして宜野座

が座れるスペースを確保すると何も言い返さずに男は乗り込んでき
た。
「出して下さい」
運転手に発車の指示を出すと舗装された道路の上を静かに車は動き
出した。
朱はゆったりと体をシートに沈めた。日本からの移動距離と現在地か
らの移動距離、そして仕事とはいえ監視官と執行官が国外派遣される
という緊張感、それらが今彼女の胸に圧し掛かる。
何よりも同行者が問題だ。
宜野座伸元執行官――。常守朱の夫である。
（仕事じゃなかったら理想的な新婚旅行になったのに……）
車窓から見える風景に目を向けると、南国特有の強い日差しと蒼天が
延々と続いている。それをぼんやりと見つめていると左手にそっと手
を重ねられた感触があり、朱は夫へ視線を向けた。
「疲れたのか、常守？」
優しく気遣うように囁かれ自然と頬が緩む。ううん、首を振って否定
しながら重ねられた宜野座の右手に、自分の右手を重ねて小さく撫で
た。執行官に着任して以来鍛錬を重ねているその手の甲の拳頭（けんとう）は凹
凸が目立つようになり、表面的な美しさだけが宜野座の美徳ではない
ということが指先から伝わる。
「それにしても局長も思い切ったことをするな。貴方と俺を選んで海
外派遣だなんて。いつぞやのシーアン行きの時はにべもなく断ったと
いうのに」
「あの時のことがあったから今回は一緒に行けたのかもしれないで
すね」
「前例が出来たから、か」
ふ、と口角を上げて微かに笑う。『前例がない』から随行できなかっ
たことを思い出したのだろう、朱もその時のやり取りを思い出して笑
い、大きく深呼吸をして感傷を払拭した。もう終わったことなのだ。
前を見て生きなければ……。
朱は宜野座の右手をポンと叩きながら顔を覗きこんだ。夫の前だとど
うしても子供っぽいことをしてしまうが、それだけ彼に心を許してい
るのだ。
「今回の派遣は交渉とかがメインですから、宜野座さんの協力は不可
欠です」
「俺の任務はあくまで貴方の護衛だぞ？　その他に交渉までさせる
つもりか？　全く……」
左手を伸ばし朱の頭をわざと乱雑に撫でながら宜野座は答えた。その
手は頭から頬へ弧を描くように滑らかに移動した後、素早く朱の背に
回されると力強く引き寄せられた。
頬に衝撃が走る。冷房で冷やされたシャツのひやりとした感触の奥に
ある、男の肉体から発せられる熱と匂いに目の前がクラリと溶けそう
になったところ、端正な男が女の耳元に口を寄せて囁いた。
「――悪い子だ」
鼓膜を震わせ脳髄に届いた声色に朱の芯が疼きだす。
仕事なんて放り出して夜までこの男と重なっていたい。そんな自身の
女の部分が掻き乱れそうになり、朱は誤魔化すように大げさに宜野座
の背中を叩いてみせた。
だがそう思うのも無理はない。
二人は籍を入れてまだ一月も経っていない『新婚』なのだから。
――こんな状態で海外派遣とは……！
朱は脳内で禾生局長とその裏（そ）に控える脳みそ集団を思い出し、言いな
りになるんじゃなかったと臍を噛んだ。いつかあいつらの一部を豆
腐に変えてシャッフルしてやる。

なんとも不穏な考えを胸に車に揺られることにした。

＊　＊　＊

世界の均衡が崩れ各国が混沌の渦中におり、そこで暮らす国民も安穏たる生活から程遠い暮らしをしていた。

戦争の反対は平和ではない。秩序こそが平和を成し遂げ混沌と無秩序から人を護り国家を安定した組織へと成熟させるのだ。

そんな中日本だけが新たな秩序・新たな法、シビュラシステムの誕生により再び繁栄を謳歌している。そのシステムの初めての輸出先はシーアンであったが、その成果を見て導入を検討し始めた国家があった。今回朱たちが派遣されている国家・スレイマン諸島がそうである。シーアンより更に南に位置するこの国家の強みは豊富な地下資源だ。それをシステム導入への返礼として日本へ割譲するというのだから、それほど期待は大きいというのだろう。

国家間のやりとりは通常なら外務省が担当するのだが、シビュラの管轄である厚生省が先遣隊として実地調査及び初期の交渉などを任され、海外派遣経験があるということで厚生省の「人間」代表として一係監視官の朱と彼女を護衛するために執行官の宜野座に白羽の矢が立ったのだ。

会談は想像以上に穏やかに進んでいった。

知的な、というよりは優しげな風貌をした議長が資源の配合について進めようとしたが、それは外務省管轄であり厚生省が口を出したら越権行為になる、と我ながらよくそんな言葉が出るものだと朱は自嘲を耐えながら語った。

（この人も擬体なのだろうか……）

ガタリと席を立ち固い握手を交わす。そこから感じる皮膚の柔らかさと体温ですら実際のものかどうか分からない。好意的な笑顔すら武器に見え、朱は早く自分だけの温もりに触れて安らぎを得たいと思いながら握手を交わしていると、時間が余ったので良ければ散策をしてはどうか、と観光を勧められた。

「ここの海は汚染されておらず泳ぐこともできますよ」

「泳ぐのは……」

「日本の海は壊滅的だと聞きました。波打ち際を歩くだけでも日本にないものを発見できるでしょう。資本主義制度が崩壊する以前のスレイマンでは観光業が盛んでしたから、その名残で今でも自然保護には力を入れているんですよ」

その綺麗な海というものがどんなものか。朱はこれからの時間の使い方に夢をはせていった。

木目の美しい扉を開くと警護役としてその前に立っていた宜野座が振り返り、終わったのかと小さく訊ねてきた。それに笑顔で答えるとホッとしながら朱の隣に立つ。シビュラ導入前のこの国ではドミネーターは使えない。だからこそ警護はもっと必要なのに、と宜野座は文句を言っていたが朱は公務と言いながら二人だけで外に出られる歓びからそのことについては目を瞑っていた。新婚夫婦だから二人きりでいたいって思うのは仕方ないもん、と何度も自分に対して言い訳を繰り返し黙殺したのだった。

「予定より早かったな」

「ええ。難航する覚悟はしてましたが、どうやらスレイマン政府は一刻も早くシステムの導入に踏み切りたいようで。もうほとんど最初の提案通りでした。先遣隊の意味、なかったですね」

「そんなこと言うな常守。俺は貴方と一緒に海外に来られただけで十

分意味があった」
サラリと朱が喜ぶ言葉を口にされ胸の奥の柔らかいところが擽られる。頬を染めて見上げると愛おしい者を包み込むように、その目尻を下げて柔らかく微笑まれた。
――確かに私は愛されている。
ふと見せる夫の眼差しを目にするたび、朱の心はズクズクと疼く。この眼差しがあるから自分は前に進める。不器用な彼から愛されているからそれ以上の愛で応えたい。そうやって想いの熱量が朱の体を渦巻くのだ。
「それでこれからどうするんだ？」
「海、行きません？」
「海？」
「ええ。議長が昔ここは今でも綺麗な海が見れますよって教えてくださったんです」
「……海か」
「どうしたんですか？」
「ああ、悪い。海に行くなら見たいものがあって……」
なんとも歯切れの悪い物言いに首を傾げてみせれば困ったように笑われた。貴方が興味持てるものか分からなくて、そう言われて初めて気遣われていたことを理解したと同時に、彼の我儘を叶えてあげたいという衝動に駆られた。
「海、行きましょう？」
「だが……」
「宜野座さんはそれが見たいんですよね？　それでいいですよ。私はそんな宜野座さんを見ていたいです。というか、伸元さんと一緒にいたいんです」
いいでしょう？　そうダメ押しに腕を絡ませると宜野座が慌てて周りを見渡す。公用車で人の心を震わせておいたくせに公私の区別をつけたがる男に、女はしてやったりと舌を出しておどけて見せた。
――これからは私用の時間、夫婦の時間だ。
だから朱は新妻の掟――あくまで朱が生み出した掟だが、それに則って年下の愛妻らしくとことん夫に甘えよう、そう心に決めたのだった。

＊　＊　＊

潮騒が海の香りを運んでくる。波の音が聞こえ始めると何故か心が弾み小走りで砂浜を目指していった。
「わあ……！　本当に綺麗！」
目の前に広がる大海に感嘆の言葉が零れた。それは宜野座も同じだったようで朱の隣に並び溜息を漏らしながらジャケットを脱ぎ、次いでネクタイを緩めた。その仕草が彼のオンとオフの境界であり、ようやくオフになった夫に朱は歓びを隠せない。じゃれるように宜野座の腕に縋りつくとその腕に掛けてあるジャケットを奪うとそのまま浜辺に走り出した。
「おい常守！　転んだらどうする！」
「平気です！　ジャケット返して欲しいならここまで来てください！」
「待て常守！」
南国特有の陽気が心を軽くさせるのか、いつも以上にはしゃぎながら海岸を目指して走り出す。砂浜を駆け抜け岬の端まで走り抜けると大地が溶けて海に呑まれそうになった。
水平線の彼方はどこまでも青く、空の果てはどこまでも白い。

「……！」
言葉を無くし立ち竦んだ。まるで自分もこの海に溶けて消えてしまうのではないかという恐怖と安堵感。矛盾する二つの感情が足元を突き抜け只々我を忘れたように彼方を見つめていたら、その先にある赤黒い塊が目に留まった。
「あれって何だろう？」
「昔の日本の船だ」
いつの間にか追いついた宜野座が朱の背後から現れ疑問に答える。そのついでに朱の頭を軽く小突き、ジャケットを奪い返した。
「日本の船がなんでこんなところに？」
「今から……二〇〇年くらい前か？　シビュラ以前よりも更に前に、世界各地で大規模な国家間紛争があったんだ。日本の戦線は広く延び、ここも戦場の一つになったそうだ」
「そんな昔に日本はここに来たんですか？」
「そうらしい。親父の残した歴史戦記ものにスレイマン諸島での戦いの記述があって、陸からでも沈没船が見れる場所があると書いてあったから気になってたんだ」
「これが宜野座さんが見たかったもの……」
海面から覗く物体を指さす。どこまでも青い空と海の中では異質なのに、なぜか自然の一部のように存在している。ヒトが造った建造物と自然の融合は不思議と落ち着いているが、どこか物悲しさが漂っていた。
「ああ。だから貴方が興味を持てるか分からなくて、これを見たいって言ってもいいか悩んだ」
正直なぜこんなものを宜野座が見たいと思ったのか朱には理解できない。ただ愛する夫とずっと一緒にいたい一心で彼の提案を飲んだ。それだけだったのだ。

「この船って何だったんですか？」
「駆逐艦だ。小型の軍艦……あー、攻撃船だ」
「くちくかん……」
「おかしなもんだな。シビュラ以前に日本はここに来ていた。それから何百年もたっているのに日本は再びここに来た。今度は戦争のためじゃなく秩序のために。親父だったら何の因果だって言っただろうな」
鉄の塊を見つめたまま宜野座は呟いた。その下の美しく青い海でもその上にたなびく白い空でもなく、ただ彼の眼差しは一点に注がれている。
秩序……シビュラが秩序になりえるのか、シビュラが平和の代名詞になるのか？　朱はぼんやりとした不安を胸に抱きながら、宜野座の視線の先にある残骸を見つめた。
「何で引き揚げないんですか？」
「船自体が墓標だからな。あとは漁礁……魚の住処にもなっているから動かせない」
「……お墓なのにお家なんですか？　なんだか変な感じですね」
朱の感想に宜野座は笑った。笑われるようなこと言ってないのに、と朱はぺちんと腕を叩く。
「……宜野座さんは……」
そしてそっと腕に触れる。慎重に優しく――恐る恐る宜野座の腕に触れると汗で湿った皮膚が掌に吸い付いた。
「宜野座さんは何でこれが見たいって思ったんです？　人工物をも飲み込む自然の雄大さを見たかったっていう訳じゃないですよね？」
――瞳を逸らしてはいけない。
――共有したい、何もかも……。
臆さず見つめていると困ったように笑われた。そして腕に回した手を一度だけ強く握られた後、労わるように撫でられる。

「……伸元さんの考えていること、感じていること、少しでも共有したいんです」
「……潜在犯の考えることに気を取られては」
「潜在犯とかそうじゃないんです！　伸元さんだから、私の好きな人だから……だから、知りたいんです」
参ったな。宜野座の唇がそう動いた。
「確かめたかったんだと……思う」
「確かめる？」
「ああ。船は引き揚げられると解体処分になる。だが引き揚げられない限り船はずっと船でいられる。……例えどんな姿になろうと船は船なんだっていうのを見たかった」
「この海にいる限り……船は船」
「まるで俺達みたいだと思ってな」
思いがけない宜野座の言葉に驚き振り返る。泣いているかと思うほど悲壮感に溢れた声色だったのに、宜野座の表情は穏やかだった。
「執行官でいる限り潜在犯は人として生きていられる。それがどんな形であれ」
酸化が進めばこの船もいつかは消えてなくなるだろう。だがその瞬間まで船でいられる。潜在犯として施設で自分を無くすより、執行官として生きていれば死ぬ瞬間まで『人』でいられる。宜野座はそんなことを思っていたのか。朱は鉄くずを見つめながら呟いた。
「幸せ……なんでしょうか……？」
この船は。
朱の呟きはぼんやりとしたものだったが、はっきりとした答えが返ってきた。
「幸せだ」
あまりにも迷いなくきっぱりと断言したその意外な反応にまじまじと宜野座を見ていると、笑顔から一転、困惑した表情に変わり徐々に頬を赤くして咳払いをし始めた。宜野座らしくない狼狽に朱も驚き、どうしたんですか何ですかと腕を引っ張りながら矢継ぎ早に問い質す。気にするな何でもない、と耳まで朱色に染めた宜野座が必死になって話題を逸らそうとしてきたが、朱の猛攻に渋々口を開いた。
「その……貴方が『幸せか』って聞いてきたから、俺のことかと思って即答したんだが、よくよく考えたら船の話をしていたんだと気づいて、その、ま、あ、……早とちりというか、勘違いというか……いやでも船も幸せだと思」
「伸元さんは幸せなんですね？」
宜野座が言い訳の羅列を言い切る前に、朱はその腕を抱きしめてまるで犬が飼い主の服を引っ張るように　何度も何度も引っ張った。
「伸元さんは幸せなんですよね？　すっごい幸せなんですよね？」
「だから、まあ……そ」
「私は幸せですよ？　伸元さんと一緒になれて」
微笑みながらその広い胸元に頬を寄せる。暖かい鼓動と波音が耳に届くたびに胸の奥に安らぎが満ちる。その幸福をもっと感じたくなり背中に腕を回し抱きしめると、観念した宜野座もゆるゆると朱の背中に腕を回す。
「俺も幸せだ」
優しい檻は言葉と共に強くなる。その束縛が嬉しくて朱は益々その胸に縋り付いた。
「さっきの言葉、少しだけ訂正させてくれ。俺は貴方の傍にいる限り俺でいられる。例え執行官という形であっても」
「伸元さん……ううん、違います。伸元さんは潜在犯でも執行官でもありません。私の傍にいる時は、伸元さんは私の夫です」
この船が海にある限り船であり続けるように、宜野座伸元が常守朱の

――宜野座朱の傍に居続ける限り、互いが支え合う限り、夫であり妻でいられる。
どちらともなく互いに腕を離した。宜野座の背筋を掌でなぞりながら下ろしていくと、宜野座は朱の頬に手を添えそっと上を向かせた。そうして見つめ合い、ゆっくりと二人の唇はそうなることが自然であるかのように、静かに重なった。
優しく触れるように。何度も何度も――……。
角度を変えて幾度となく啄ばむような口づけを交わす。暑さと興奮で額に浮かんだ汗が流れ落ち、唇に流れ込んだ。
「ん……」
はぁ。
僅かな隙間から吐息を漏らすと、海の味だと汗を飲み込んだ宜野座が口角を上げて揶揄した。そして艶めかしい舌で自分の唇を舐めると再び朱の唇を蹂躙する。今度は深く深く、溺れるほど深く愛し、舌先で朱の唇をこじ開けると歯列をなぞりその先の蕾を絡め取った。
口内を思う存分楽しみ舌を吸えば、朱は目の淵に涙を溜めて快楽を享受する。
互いの唾液が絡み合い卑猥な水音をたてる。ちゅくちゅくと音を立てながら舌を吸いあい絡めあい、息を飲み込み愛撫を繰り返していくと、行き場のなくなった銀糸がツツと口の端から垂れていく。それすらも逃さぬよう、宜野座は舌先で舐めとり何度も朱の口を愛した。
ちゅ、そんな音を立てながら下唇を食み、ようやく唇が離れる。
息を整え潤んだ瞳で宜野座を見つめるといつもの涼しそうな瞳はそこになく、欲情に煽られた獣のような瞳が目に映った。
――食べられたい。
――この男に、食べられたい！
朱は自分の中の被虐的な感覚にうっとりと酔いしれた。瞳を閉じ、食べてくださいと言わんばかりに喉元を曝け出す。自分の荒い息遣いが耳障りだが、それもどうせ気にならないくらいの快楽が訪れる。それまでの辛抱だと思っていたが、獣は牙を立てずじっと朱を見下ろしたままでいた。
「なん……ひゃ！」
不満を口にしようとしたその瞬間、体が宙に浮き慌てて宜野座に縋りついた。横抱きにされ驚いた顔にキスを落とされる。そのまま木陰に連れて行かれると何事もなかったかのように再び唇を塞がれた。
「さすがに日向では色々まずいだろう」
朱を下ろしながらキスの雨を降らし宜野座は着々と行動を移しているが、朱は告げられた言葉に我に帰り慌てて宜野座の腕を止めた。
「だ……！　ここ外です！」
「ああ。だが貴方が物欲しそうな表情をしてたからな」
「もの……っ！　そ……れは伸元さんの方ですよね？」
「ああ。俺は貴方が欲しいい」
あまりにも素直な言葉に拒絶の腕が緩んだ。
――貴方が欲しい。
ああ甘美なるその言葉！
暑さ以外の熱が鼓膜から脳髄に響き血液に乗って全身へ運ばれているかのように、手足の先まで熱を孕み心臓は踊りだす。胸の高鳴りは本能を呼び起こし……。
「……ズルイです」
抗議の腕はそのまま男の背中に回った。
「大人はズルイんだよ」
「私だって大人ですよ？　伸元さんの妻です。それに……いつまでも子供でいられないです」
「そうだな。だが俺の前では子供でいていい。甘えてくれ。頼りない

大人かもしれないが少しでもいいから……」
「……やっぱりズルイです」
――でも、大好きです。
そう耳元で囁くと男は満足そうに喉を鳴らした。
誘い込むように腕を首に回し引き寄せると、ゆっくりと体重をかけて覆いかぶさってくる。口づけを交わしながら地面に腰を下ろし、互いの体を愛撫する。服の上からでも分かるしなやかな筋肉。朱はそれを確かめるように指を這わす。そのたびにこの男に抱かれるのだという歓びが全身を駆け巡った。
いつの間にかインナーの下に入り込んだ大きな掌が、朱の柔肌を滑るように動く。そのたびに吐息が漏れる。体を合わせるようになってから知った宜野座の手は、その冷静な性格とは裏腹に熱い。
「は……ふ」
もどかしさで胸が詰まる。荒々しく口づけを交わすのに、なぜ彼の手はこんなにも優しく気遣うように触れてくるのか……。
ねだるように腰をうねらせるとインナーが捲られた。外気と同じくらい熱が燻ぶっている肌から汗が流れ落ちる。
自分でも分かるくらい期待している。その長い指で胸の頂を愛されることを……!
無意識に、いや、意識をして胸を反らし、宜野座の視線にその小ぶりな乳房が映るように強調させると、目の前の肉食獣はスッと目を細めた。
「はしたないぞ、監視官」
そう言って唇を綺麗に歪ませた。嘲笑するかのようなその笑いは朱の背筋を粟立たせ、悦楽の期待に女を疼かせる。
「そんな目で……見ないでください……!」
イヤイヤと首を振って羞恥に耐える。耐える?
いいや違う。
――もっと見てほしい!
願望とは裏腹にしおらしい乙女のように朱はふるまう。その相反する行動はどちらも朱の本音なのだ。
――見ないで欲しい! もっと見て欲しい!
「見るなと言われても」
「ひゃ!」
「可愛らしい妻の姿は全部見たい」
下着の上から無遠慮に乳首を抓られ肩を揺らして驚いた。電流の様な痺れがジンジンと胸に響き、そこからジワジワと全身へ広がっていく。緩やかな甘い毒。
「あっ……あぁぁあ……! やだ……」
「いい声だ。貴方の声は素晴らしい」
首筋をキツく吸い上げられ足が跳ねる。体中の熱はいつの間にか下腹部に集まり、花弁を濡らし始めている。そこに早く熱を埋めたくて、先に進みたくて宜野座のシャツに手をかけてボタンを外していく。
「はっ……あ……いい……」
布越しに抓られるたびに声が漏れ、膝をすり合わせる。もどかしい熱が溢れて止まらない。
「気持ちいいのか、常守?」
「い……です……」
「ん?」
「ひあ! きもち……です!」
「そうか、良かった」
緩急をつけられての愛撫に中断されながらもようやくボタンを全て外し終え、筋肉質な肢体が露わになった。その美しい肉体に溜息を吐くと朱はそっと頬を寄せ背に腕を回す。

「はぁ……」
思い切り深呼吸をすると鼻孔に宜野座と汗の香りが充満した。花を愛でる彼から薫る涼やかな香りと汗から漂う埃と塩の匂いが混ざりあい、独特の匂いが鼻孔を擽る。
蠱惑的なその香りはまさに男の香り。
その香りに身をゆだねている間に宜野座は朱の下着を剥ぎ取り胸を露わにさせた。小ぶりな乳房が重力に従い俯く様子が愛らしく、手のひら全体で優しく包み込み親指でその頂を押しつぶす。自身の手の中で自在に形が変わっていくのが愛おしい。何度も揉み弾き抓り撫で押しつぶす。そんなことを何度も繰り返すと、朱の口から短い喘ぎ声が聞こえてきた。
「伸元さ……ん」
潤んだ瞳で見つめられると途端に宜野座の中の嗜虐性が動き出す。乳首を強く摘みながら口を弓型にしならせて形ばかりの笑顔を作る。そして酷く優しい声色でどうした、と機嫌を伺えば朱は言い淀むように口を何度も開け閉めし、視線を右往左往させた後にようやく意を決して言葉を――発する前に噛みつくようなキスを与えた。
「ん……ふッ！　ん……！」
自分の愛撫に翻弄されている姿に心が躍る。そこから首筋に移動し肩に鎖骨に花を咲かせ、片方の小さな果実を口に含み舌でねっとりと愛撫しもう片方は指で楽しんだ。
「はぁぁ……！」
身をくねらせて感受しながらも、朱は忙しく宜野座の頭を掻き抱く。それに答えるように一度乳首を強く噛むと、喉の奥から小さな悲鳴が上がる。痙攣する指先、上下する薄い胸。そのどれもが愛おしい。それでも震える手で朱も宜野座の肌に触れた。肩に腕に滑らすように撫でるように触れる。彼女の精一杯の愛撫を受けようと宜野座は体を離した。
唾液で濡れそぼつ乳房が艶めかしく揺れている。
荒い息を必死に抑えながら起き上った朱は宜野座に触れる。頬を触り喉仏を通り過ぎ鎖骨を爪でひっかき赤い糸を綴る。なだらかな胸板を掌で感じながら下へ進んでいけば、引き締まった腹筋に指が止まった。
「汗……」
割れた腹筋の間に汗が流れる。そうだ暑いんだ。そんなことすら忘れるほど二人はお互いに没頭していた。
「常守も汗をかいてるな」
「忘れてました」
「俺もだ。暑さを忘れるほど貴方に溺れていた」
散々悪戯を繰り返してきた指で汗で湿った朱の前髪をかき分け、優しく口を寄せた。その労わるような、大人が子供に与える様なキスに瞳を閉じて受け入れる。心がくすぐったい、朱はふふ、と小さく笑う。
「伸元さんは汗をかいても……」
――カッコいいです。
あまりにも罔惚れしている言葉だ。朱は喉の奥に言葉を仕舞い、その代わりに宜野座の鎖骨に歯を立てた。
汗と男の味が口内に広がる。自分を狂わす男の香りに酔いしれると、とろりと蜜が溢れるのが分かった。
（はしたない……）
そう自虐しても止まらない。ちゅ、と吸い上げるたびに溢れる泉に吐息が漏れる。
「常守、汗をかいてるんだろう？」
「？　だからさっ……っ！　あっ！」
「汗、かいてるな？」
いつの間にかスカートの中に入り込んでいた宜野座の手で無遠慮に

「っっ！　……っメじゃない……！　いい……イ……あぁ！」
あああ！
まるで水揚げされた魚のように全身を波打たせ朱は絶頂した。淫口は悦びの涙を流し男の指を締め付ける。脊髄を走り抜け脳髄で弾けた快感は、全身を一瞬で支配し萎縮するとやがてゆっくりと弛緩していった。
何という快感なのだろう。
大きな波が去り　漣（ささなみ）　に身をゆだねているような浮遊感に、朱の上半身はぐったりと地面に倒れそうになり、宜野座はそれを支え自分の方へと抱き寄せその背を優しく撫で続けた。
朱は宜野座の肩口に体を預けながらぼんやりと思った。余韻で頭がはっきりしないが、全身を痺れさせる快楽の他に胸の奥からにじみ出る幸福で涙が溢れた。
「大丈夫か？」
「大丈夫じゃ……ないです」
――だから……。
朱は気だるげに宜野座の肩から顔を上げた。そして情欲に濡れた瞳で覗き込む。
「大丈夫じゃないです……から、これ……ください」
下腹部にあたる熱棒に指を滑らせる。ツツ、ツツツ。たったそれだけなのに宜野座の陰茎は震えた。
「宜野座さ……、伸元さんも、大丈夫じゃない、でしょう？」
「そうだな。早くあなたの中に入りたいと言って聞かない」
朱の両脇に腕を入れて持ち上げ、自分の膝を跨ぐように座らせると、そそり立つ男根が朱の花弁にぬるりと掠めた。
「私もです。私の、ここ、宜野座さん……伸元さんにもっと愛されたいって言ってます」
腰を押し付けると潤んだそこは口を開き陰茎を食む（は）。亀頭が肉芽に当たるたびに痺れる様な快感が流れる、朱は腰を止めることができなくなった。短い喘ぎ声を漏らしながら享楽にふけっていると、宜野座がふ、と笑った。
「本当だな。もの欲しそうにぱくぱく言ってる」
「う……ふっ、う……、はっ、お喋りな、女は……嫌いですか？」
「いいや。素直な貴方は愛おしい」
「はぁ……ん……っ！」
たったそれだけの言葉でも嬉しくてたまらない。朱は今更ながら頬を染めて恥じらいながら笑った。
「そうだ常守。俺の名前が呼びづらいなら、無理に呼ばなくてもいいぞ」
「え？」
「貴方がイったあと、何度も俺の名前を呼び直してる。無意識だな？」
「ええ!?　……すいません。すぐ慣れますから」
「別に構わない。どっちで呼ばれても俺は俺だ。貴方が俺の名前を呼んでくれる、それだけでいい」
羽のように軽いキスを朱の唇に落とすと、きょとんとした顔で返された。それがなぜか愛おしく、もう一度啄むようなキスをして宜野座は笑った。
朱はそのまま押し倒されるかと身構えたが、その衝撃は来なかった。その代わりに宜野座がゆっくりと仰向けに倒れていった。
「え？　ぎ……伸元さん？」
「草の上とはいえ貴方の背中に傷がつくのは忍びない。今日は貴方が上になってくれ」
「う……え？　私がですか!?」

嫌だとは言えない。だからと言って、はいとも言えない。だがすでに宜野座は仰向けに寝転び朱の腕をとって待ち構えている。男根が隆々とそびえ立っている。一度だけ朱はぎゅっと目を瞑った。そして陰茎に手を添えると自身の入り口にあてがう。それだけで頭がクラリと揺れた。

「う……む……！」

肉棒が外れないように慎重にゆっくりと腰を落とす。ぬちぬちと蜜壺が男根を飲み込んでいくたびに、朱の口からは吐息が漏れた。何度体を繋げても最初の挿入は体が強張る。そのあと気が狂うほどの快楽に溺れると分かっていても、どうしても緊張するのだ。

「あ……あぁぁ……！　ぎの……ざ、さん！」

受け入れる恐怖に震えながら男を見つめる。幾分か男根を飲み込み補助がいらなくなった手を、宜野座へと伸ばし縋り付く。

「そのまま」

「う……ん……っ！」

強く握られた手から勇気を貰い腰を進める。じゅぷ、自分の体から水音が響くたびに息を飲んだ。

あ。

ひくり、と朱の腹部が波立った。自分の意志とは関係なく動くそこは宜野座を締め付け、朱の子宮に快楽をもたらす。それをもっと感じたくて。朱はずぷずぷと腰を落とした。

「あっ……あぁ……あー……！」

「っく！」

「はい……たぁ」

下腹部を埋める熱に震えながら朱は悦びに満ち溢れた。少しでも動けばちくちく言う秘所は、怒張を根元まで咥え込み満足そうに啼いている。

「そのまま……そう、いい子だ」

「はい……」

褒められ心が弾む。

んっんっんっ。短く喘ぎながら腰を揺らす。それだけで子宮は啼き膣は杭を扱き上げる。

我を忘れるほどだった。

下から宜野座が突き上げると朱の体はよく跳ねた。亀頭が子宮口を小刻みに叩くたびに目の前がチカチカと点滅する。

――もっと、もっと……

子宮に男の精を注ぎ込みたくて朱は一心不乱に腰を揺らす。ゆらゆらゆらゆら。前後左右に動かすたびに、その杭は道を広げて進んでいく。

（気持ちよすぎて動けない……）

それなのに腰は勝手に動こうとする。宜野座の胸に腕を置き、ガクリと倒れそうになる状態を必死に起こす。その瞬間ですら子宮は疼き膣が蠢く。

「あ……きもち……い……！」

頬を染め瞳を蕩けさせながらうわ言のように繰り返した。揺れるたびに宜野座の腹筋が波打ち、置いた手が時折汗で滑る。その不規則な衝撃が別の快楽を生み出し、二人は互いの体に溺れていく。

「常守、見てみろ」

宜野座が嗤いながら朱を煽る。じっと一点を見つめられ、その視線の先を追うと、ぐちぐちと男を銜え込み涎を垂らす貪欲な女陰が映った。

「ひっ……！」

あまりにも淫猥な光景に引き攣った声が漏れる。

そして……。

「あ……すご……い」

恍惚の笑みを浮かべる。淫らで猥雑で目を背けたくなるほど不道徳で。

腰を動かすたびに花弁から蜜が垂れる。とろとろ、とろとろ。そんな姿をもっと見たい、もっと見て欲しいと思い、朱は上半身を後ろに反らし閉じていた足を開き結合部分に手を添えた。膣口は大きく開き、固い陰茎を口いっぱいに頬張っている。

「あっあっあぁあぁ……！」

「凄いな常守。貴方はこんなにも淫らに男を咥えこんで離さないばかりか、っ、腰の動きが激しく……。そんなにこの体位が気に入ったのか？　それとも……」

グッと腰を叩きつけると朱は髪を振り乱して啼いた。違う違う、いいのいいの、と陰核に刺激を与えながら男根を貪る。上体を反らしたせいか入口付近を愛撫され、何度も訪れる快感に酔いしれる。

「やっやっ……、やぁあ……っ！　ひっ！　宜野座……さ……！　も……ダメです！！」

自分で何を言っているのか何を思っているのか分からないほどの快感の波が、子宮から溢れだし朱の肉体を支配した。何度目か分からない絶頂を迎えた蜜壺からは蜜がとめどなく溢れ、二人の下腹部に泉を作る。にちにち音を立てながら花弁は差し込まれた如雨露から熱い飛沫が放たれるのを心待ちにしている。

「っ！　つ　ねもり！」

「あぁっ！　あっあっあぁあ！　宜野座さん、激し……いい！」

朱の腰を掴み宜野座が激しく動き出す。肉と肉がぶつかり合い、宜野座の陰嚢が激しく揺れ動く。主導権は宜野座に移り、朱はただ揺さぶられ叩かれ抉られ、男の精と深い快楽を絞り取ろうと膣を蠢かせる。一方的に犯され貫かれ、目の前が白く染まる。息をするのも苦しいくらいの律動を受けるたびに朱の喉は歓喜の声を上げ続けた。

欲棒は何度も最奥を叩く。子宮口をこじ開けその奥へ、本能の行き着く先目掛けて何度も叩いて女にする。女もそれを望んでいるかのように、男を深く奥へと誘う。

「つ……ね……っ！！」

せり上がる射精感を我慢しながら、宜野座は最奥に膨らみ切った亀頭を打ち付けた。

「っあっ……あぁぁあああ！！」

弾ける熱い飛沫に体が戦慄く。内腿が震え膣が一滴も零さぬものかと律動を繰り返し、雄の精液を奥へ奥へと運んでいく。

「朱……っ！」

その衝動に身を委ねながら宜野座の陰茎は何度も吐精を繰り返す。朱の体を強く抱きしめ何度も最奥を白く汚す。

（名前……呼んでくれた……）

宜野座の腕の中で朱は痺れるような甘い時間を過ごした。

溢れんばかりに出された精液は子宮を満たし、受け止めきれなかった分は結合部分から滴り落ちていく。流れ落ちる感覚、それだけで朱の意識は空に溶ける。

「のぶ……ちかさ……ん」

全身を包み込む多幸感。

波音が耳に心地よい。息をするたびに上下する宜野座の胸に抱かれ、まるで波間を漂う船のようだと朱は思いながら心地よい疲労から来る睡魔に負け、瞼を落としていった。

＊　＊　＊

たった三日間の海外派遣だった。朱は苦心しながら荷物を無理矢理詰め込み、なんとか行きと同じ状態に戻し大きく深呼吸をした。

「常守、いいか？」
ノックと共に宜野座が入ってきた。小さなアタッシュケースを小脇に抱え、いつも通りスーツを一部の隙もなく着込んでいる。
「帰り支度できました。お待たせしました」
「早いな。帰りの便まで時間が空くぞ？」
「ええ、ちょっと行きたい所がありまして……」
そう朱に言われて連れてこられたのは、先日二人で沈没船を見た岬だった。一体なぜ朱が再びここを見ようと思ったのか宜野座には分からない。ただ警護のため、いや、愛する妻と一緒にいたい、その思いで彼女のあとをついてきたのだった。
波は穏やかに寄せては返している。
鳥たちが遠くを飛び、魚は漁礁となった駆逐艦の周りを泳いでいる。
「私、思ったんです」
まっすぐ前を見据えながら朱は口を開いた。
「もしかすると『生きる』っていうのは、この船のようになることじゃないかなって。軍艦としての役目を終えても魚たちの住処になったように、例え朽ちてもそれで終わりじゃないんだって。私たちが運んできたシビュラもきっとここで違った形で生きていく。そうやってぐるぐるぐるぐる……海みたいな人の歴史の中を流れていくんだって、そう、思ったんです」
潮風で乱れる髪を押えながら振り返ると、宜野座は優しい眼差しで朱を見つめていた。
「だからあの船は宜野座さんだけじゃないんです。私でもあるし……」
「親父でもあるのかもな……」
「そうですね。色んな人が役目を終えても、こうやって別の形で生きていく……」
そう考えると寂しげに浮かんでいる沈没船が一変し、希望の塊に見えてくる。
――あれは終わりでもあり、始まりでもあるんだ。
「……行こう常守、時間だ」
宜野座に肩を叩かれ朱は頷いた。
空港までまた来るまでの移動だ。たった三日間だったが楽しい時間だった、そう思いふと足を止めると宜野座が怪訝そうに振り返った。
「どうした？」
「いえ。またここに来たいなって思って」
「……そうだな。次こそは新婚旅行で……」
宜野座の提案に朱はよく頷いた。
何度でも二人で出掛けたい。何度でも何度でもこの海を見よう。
命が尽きても、永久に。

【終】

BECAUSE I LOVE YOU

織斗梓穂

宜野座伸元と常守朱が結婚式を挙げたのは先日のこと。
入籍だけはその前に済ませていたが、お互いの仕事の都合でなかなか時間も取れず、休暇も先延ばしになっていた。
レストラン・ド・カンパーニュでささやかながら内輪だけの食事会という形式で、宜野座側の出席者は実父である征陸の他に母方の祖母にあたる宜野座亜紀穂、常守側の出席者は両親の他に祖母の常守葵、その他一係のメンバー以外にも、監視官として同期生の青柳や刑事課内の親しい相手を招待したものだった。
店の主人とは、以前に事件の捜査で協力してもらった縁もあり、特別な日だからとサプライズで特製ケーキまで用意してもらった。
皆が祝福をしてくれた中でも、征陸は息子の晴れ姿を見て式の間、ずっと涙を流して喜んでいた。普段はどっしりと落ち着いて一係のお父さん的なポジションの彼がこんな表情をするのは、おそらく今後もなさそうだ。
そして一晩明けた。
「俺がいない間に余計な仕事を増やすんじゃないぞ」
一番心配の種である狡噛と縢の方を睨みながら、空港まで見送りに来た一係の執行官達へ宜野座が念を押す。
「分かった、努力するさ」
「おい、そうじゃなくて……」
「大丈夫だって、俺らだってもう大人よ?」
「そういう縢が一番心配なんでしょ」
へらへらと笑っていた縢にすかさず六合塚がつっこむ。
「まあ、ひどいようなら私が宜野座くんに代わっておしおきをしておくから安心して」
一係の監視官が二人とも休暇に入ってしまうので、その間は二係の青柳の指示に従うよう手続きはしている。

「よろしくお願いします」
朱がぺこりと頭を下げ、その隣に立っていた征陸の方へと向き直った。
「少し留守にしますけど、お願いします」
「ああ、俺に任せておきな、お嬢ちゃん……いや、そう呼ぶのもおかしいな」
「別にいいですよ、今まで通りで」
ふふ、と幸せそうに笑う年下の上司で、息子の嫁となった彼女につられる形で、征陸もようやく表情を和らげた。
「それでは行ってくる」
「お土産、たくさん買ってきますね！」
タラップを上がっていく二人に精一杯手を振りながら、彼らは旅の無事を祈った。

新婚旅行に選んだのは沖縄だ。
手続きさえすれば海外旅行も可能だが、今回は十分な準備期間もなく、急遽決定したので国内となった。
地球温暖化の影響で、かつての海岸線は浸水によって複雑に変化し、人口減少に伴う市街地の過疎化で無人区画も増えている。それでも昔ながらの観光地を維持している地域もいくつか存在しており、旅行を楽しむ人達もいる。
水質汚染が進んで生態系にも深刻な影響が出ているので、今では海水浴をのんきに楽しめる場所はほとんどない。
そんな中で、地道な研究が続けられ、生息数が極端に減少したと言われる土着の動植物の繁殖に成功し、本土ではもう見られない本物の生物を展示している水族館もあると聞き、朱が見にいきたいと希望したのも理由の一つであった。
「私、クラゲってホログラム展示でしか見た事がないんです」
子供の頃から泳ぐのは苦手だったが、海の生物には興味があり、祖母に連れられて何回か水族館に連れてもらった。
一般的には過去の膨大なデータから復元された３Ｄ画像を投影して、生きているかのように見せ掛けるタイプが多い。
約百年前の世界恐慌以降、鎖国しているので海外との交流も断絶しており、稀少生物も剥製が置かれている程度で国内の飼育されていた個体数も激減した。本物を維持出来る施設はごく一部となり、剥製の展示のみという場合もある。
「昔ほどの規模ではないが、大きな水槽で泳ぐジンベエザメを見られるらしいな」
「わあ、楽しみです！」
開館当時は世界最大級と言われていた。
その頃よりも飼育されている生物数はかなり少ないが、それでも相当な数になる。
デバイスで情報を検索すると、青く煌めく大洋を模した水槽の中を悠々と泳ぐジンベエザメたちの姿が動画で浮かぶ。
周囲を小さな魚が群れてついていく様子は眺めているだけで色相が浄化されていく。
「あまりはしゃいで転ぶんじゃないぞ」
「んもう、私だって子供じゃないんですよ」
ぷくっと頬を膨らませて怒ってみせるが、朱の年齢の割には幼い容姿では可愛らしく拗ねているように見えて迫力がまるでない。八歳年下とはいえ、全体に凹凸に乏しい体型もあり、就職してからも時々学生に間違われるというが、それも仕方ない事だろう、と宜野座は溜め息をついた。

「はあ、すごく良かったですね！」
空港に到着して、ホテルに向かう途中でその水族館に寄っていったが、想像していたよりも広大な敷地で、隅々まで見て歩いたらあっという間に夕方になってしまった。
先に送っておいた荷物を確認して、カウンターでチェックインを済ませると、スタッフの案内に従ってエレベーターに向かった。
「そうだな、あんな大きなものが泳いでいるなんて驚きだ」
「ありがとうございます。クラゲも、こんなちっちゃいのがふわふわしていて可愛かったです」
機嫌良く鼻歌まじりの朱を眺めつつ、宜野座は彼女の方から絡めてきた指をしっかりと握りかえした。
コロニアル風の洒落たデザインのラウンジには、南国の植物がそこかしこに配置されている。しかもそれらはホログラムではなく本物だ。大きく開け放たれた窓から、ひんやりとした夜風がそよぎ葉を揺らす。
仄かに香るアロマオイルに色相もクリアになっていく。
「こちらの部屋になります」
ホテルの一室というよりも、離れの小さな一軒家という形の部屋で、寝室の他にリビングやキッチンまで備え付けという広さだった。
「ベランダのジャグジーはいつでも利用可能です」
操作方法はこちらに、とボタンを押す。小さなノイズ音を立てて空中に浮かんだ画面で説明を受けてから、室内の施設についても利用方法をレクチャーされた。
「他に質問はありますか？」
冷蔵庫には一通りの飲み物が揃っており、これらは自由に飲める。食事も部屋の端末からルームサービスを注文出来る。
「そうですね、今のところは大丈夫です」
「何かございましたらフロントまでご連絡ください」
それではゆっくりおくつろぎください、とにこやかにお辞儀をしてスタッフは部屋を出て行った。
二人きりで残されて数分、何となく話しかけにくくて黙り込んでいたが、宜野座から口を開いた。
「とりあえず風呂に入るか？」
夕飯はホテルに来る途中で済ませている。
慣れない移動で思ったよりも疲れているだろう、と朱を気遣い、先に入るかと宜野座が尋ねてきた。
「あ、そうですね……ん、でも伸元さんの方が先で良いですよ。色々と時間かかっちゃうでしょうし」
さすがに一緒に入るとまでは言わず、少々語尾を濁した。
「それなら先に入ってくるか」
「ちょっと荷物の整理もしたいですし」
「分かった」
既に部屋に運び込まれていた二人分のスーツケースの片方を開けて、必要な着替えを取り出す。そしてそのまま宜野座はシャワールームへと入っていった。
「ふう」
洗面所の扉が閉まり、中から水音が聞こえてくると、朱は胸を撫で下ろした。
「……よし、今のうちに」
自分のスーツケースを開けて、着替えを入れているポーチの一つを手に取り深呼吸をする。可愛らしいレースに縁取られたピンクの袋にはこれまた綺麗にラッピングされたものが入っていた。
「うーん、使うなら……今しかないよね」

添えられたメッセージカードには六合塚と唐之杜からの祝いの言葉の他に赤い口紅のキスマーク付き。追記で「今夜も頑張ってね♡」とハートマークまで書かれている。

ごそごそと中身を出してみた。

一回だけ広げて確認したが、大胆なデザインに赤面してすぐにたたんでしまった。

「朱」

「ひゃ、ひゃい！」

考え事に没頭して油断していたので、不意に声をかけられて思わず返事が上擦る。

「なんだ、俺が驚かしたようじゃないか」

「す、すす、すみません。ちょっと緊張して……へへっ」

何事にも泰然として新人の割に胆が据わっていると思っていたが、やはりこういう時には女の子らしい反応をする。

朱の態度がなおさら新婚として初めての夜だと意識させられて、宜野座もつられて赤面した。

「……そうか、どこか具合でも悪いなら、と思ったんだが」

「わわっ、そんな事ありませんよ」

じゃあお風呂行ってきますね、と着替えを掴んだ朱はばたばたと慌ただしく洗面所に駆け込んでいった。

扉を閉めて、その場にずるずると座り混む。

悩んでいても仕方ない、ここは腹をくくって開き直るしかないだろう。そう割り切ると、服をためらいなく脱いで浴室に入った。

ベランダにあるジャグジーは明日にでも使わせてもらえば良いか、と考え、まずは体を綺麗にしようとスポンジを手に取る。浴槽は広く清潔感のあるデザインで、曲線を取り入れた古風な雰囲気がかえって新鮮に感じられる。

「そうだよね……きれいに……わ、いや、そんな意味じゃなくて……うーん、でもそういう、ことだし」

いつもよりも念入りに肌を洗いながら、これからの行為を意識してしまい手が止まる。同世代の友人に比べて凹凸に乏しいボディラインを密かに気にしており、もう少し胸のサイズがあれば良いのかな、と柔らかな乳房を持ち上げてみる。

「ち、ちが……そうじゃなくて！」

鏡に映った間抜けな格好にようやく我へ返った朱は、手早く全身を洗って、熱い湯に肩まで浸かる。のんびり寛ぐなんて考えはまったく浮かばず、のぼせる前にさっさと上がった。

洗面所の中から、ぶつぶつと独り言らしい声や、ばしゃばしゃという水音が聞こえるので、どうしたことかと宜野座も気になっていたが、緊張しているのだろうと結論付け、朱が出てくるのを待っていた。

「……遅いな」

やっぱり様子を見にいこうと腰を浮かしかけたその時、扉が開いて彼女が出てきた。

「お……おそくなってすみません」

「いや、別に構わないんだが……どうした？」

たたんだ服をぎゅっと胸元に抱えて、部屋に備え付けの白いバスローブをきっちりと着込んで、そこに立ち尽くした朱の表情を見て、具合でも悪いのかと覗き込もうとする。

「あ、ちょっと荷物置いてきますから、先に寝室に行ってくださいね」

「そ……そうか」

お互いに緊張しているんだと解釈した宜野座は、伸ばしかけた手の置き場所に困惑して、静かに降ろした。ちらりと壁の時計を見れば、

午後十時を回った頃。仕事がある日はようやく家に帰り着くあたりで、まだ寝る時間には早いが、今日は移動や観光で疲れているし、と理由を付けて、彼は寝室へと向かった。

待つこと数分。

パタパタとスリッパの音が聞こえ、ばたーんと勢いよく部屋のドアが開いた。

「お待たせしました！」

バスローブの襟元を握ったまま、頬を赤らめている朱の声は無駄に元気である。

「もう少し大人しく入ってきたらどうだ」

緊張していたのは自分だけかとやや呆れつつ、宜野座は腰掛けていたベッドから立ち上がる。

「え、あぁ、そうですね」

「……どうこう言っても仕方ないが」

朱の傍へと近付こうとした瞬間、ばさりと白いバスローブが床に落ちた。

「おい、これは……っ」

彼女がその下に着ていたのはいつものようなシンプルな下着ではなく、ほとんど紐に近いもの。いわゆるセクシーランジェリーと呼ばれる代物で、ひらひらとレースがついているが、肌が透けるほど薄いので、股間の仄かな陰りまでも見えてしまう。

「……だめ、ですか？」

しおしおと耳を垂らして懇願する子犬のような仕草に、宜野座も強く叱るのもためらわれ、大きく息をつくと、朱の肩に手をかけて、ぐっと抱き寄せた。

「どうせ唐之杜あたりの入れ知恵だろう、まったく君は」

胸元に押しつけるようにして抱えられているので、朱からは彼の表情を知る事は出来ない。やはり女の色気にはまだ足りないのだろうかと考えた。

「に、似合わないならすぐ脱いできま……」

「……似合わないとは言っていないだろ」

「だって、伸元さ……わぁ！」

ひょいと横抱きにされてベッドへ運ばれ、そこに降ろされたかと思えば、宜野座が上にのし掛かってきた。

「ふぎゃ」

しゅるりと自らのバスローブの紐を解き、前を開きながら、朱の口に軽く触れるキスをして、間近からじっと覗き込んできた。

「俺のために着てくれたのなら嬉しい」

ふっと穏やかな笑みを浮かべ、今度は先程よりも深く口付けてきた。

「あむ……ちゅ……他の、人には……見せないですよ？」

「……そんな事をされたら、嫉妬に狂う」

朱が身に付けていたのは下だけで、上は無防備に何も付けていなかった。肩を掴んでいた彼の手が、湯上がりの肌を確かめるように触れ、ふっくらとした胸を包む。

「ひゃあ！」

セックスをするのはこれが初めてではない。

結婚する前にも何度か、それこそ片手で数えられる程度の回数だが二人だけの夜を過ごしている。お互いに恋人と呼べる相手は今までになく、全くの手探りで、最初の告白から手を繋ぐまでは長かったように感じる。

部屋の明かりを消してもらおうかと思ったが、そんな余裕はどちらにもなく、朱は目の前に迫った彼の端正な顔をぼんやりと見詰め、頬が熱く火照ってくるのを感じた。

十分な愛撫を受けていないにも関わらず、柔らかな胸の頂点はつん

と固く立ち、大きな彼の手に包まれただけで腹の奥がじんわりと熱を帯びる。
「誰にも見せるなよ？」
指の腹で乳首を優しく摘みながら、もう片方の手をなだらかな腹に滑らせて、際どい下着のラインをなぞる。
「ん、んん……当然、れす……よ」
朱から腕を伸ばして彼の首へ巻き付けると、舌先を突きだしながらキスの続きをねだってみる。
普段なら恥ずかしくてこんな真似は出来ないが、夕飯の時に飲んだワインの影響か、程よく酔いが回って多少大胆な誘い方も出来そうだ。
肌をまさぐる宜野座の手の動きに、もっと色んな場所に触れてくれと言いたげに腰をくねらせて足を開いた。
「ひゃん」
「……そんなに押しつけてくるな」
半ば屹立しかけているものが腿に触れ、急にそこを意識してしまう。
「なんか……あたって」
その詳細な形まで脳裏に思い描いてしまい、軽くパニックに陥る。
「仕方ないだろう、君がそんな格好をしていれば……」
俺だって人並みに興奮するんだ、と宜野座に耳元でわざと低い声で囁き掛けられた。はっきりと熱のこもった男の声に胸が高鳴る。
「今日はいいか？」
正式に夫婦となるまでは、と彼なりに避妊には気を使っていたようで、朱もその辺りは理解していた。
生での行為は経験がない。
自分がどうなってしまうのだろうか、という不安もあるが、ここまで来て止めるのは酷である。相手も辛いだろうし、朱自身も中途半端に煽られたままではどうにもならない。
「……もちろん、良いですよ」
早く征陸さんにも孫の顔を見せたいですね、と妙に達観した意見を聞いて、宜野座も半ば呆れつつ、それに関しては同意見だと返した。
紐と呼んでも良い構造の下着の上から、そろりと敏感な部分へと指で触れてみる。
「ん？」
しかし、そこにはあるべき布の感触はなく、ぱっくりと切れ込みが入っており、直にとろとろと蜜を溢れさせる肉襞に触れられるようになっていた。
そこまで深く考える余裕がなかった。
唐之杜の選んだ品だろうが、大胆なものを寄越したもんだ。「ひゃあぁ！」
つぷ、と指先を挿入されて朱が驚く。
「……なんだ、知らなかったのか？」
浅く入口を掻き回すように指先を動かしながら、彼も朱の反応に軽く驚いていた。
「ら、らって……」
くにくにとそこをいじられながらも、拒否はせず、止めないでくれと上目使いに朱がねだる。
「……妙に涼しいな、とは思ったんです……けろ……」
「少しは警戒しろ」
軽率過ぎる、と苦言を呈しながらも、宜野座は朱の中に入れた指で特に敏感な部分を探る。
「ひゃふ……ゆび、増やさない……れ……ひゃあっ」
長い指を二本挿入され、くぱぁと広げられる恥ずかしさはたまらない。
「んもう……」

顔を真っ赤にしつつも、彼の腕からは逃れようとせずに、じと目で軽く睨み付ける。
「君の体のことなら、全部知りたいと思っているが？」
「……えっち」
毎回、新しい発見ばかりだな、と言われて口を尖らせた。
「ああ、結構だ」
くちゅくちゅと具合を確かめるように、だが肝心な部分には届かないもどかしさに、朱もこらえきれずに腰を振る。
「ん、ぁ……」
「丁度いい、このままで」
ぐぐっと朱の足を掴んで広げ、スリットの間からてらてらと蜜を滴らせる肉襞へ、宜野座は己の雄の先端をめり込ませてから、ぬぷりとくわえ込んだそこへ押し込んだ。
「え、えっ……うそ、ひゃ……あ、あぁん♡」
きついかと思われたが、思っていた以上に朱も期待していたのか、すっかり解れた様子で、熱く潤いきった中にさしたる抵抗もなく奥までずっぽりと受け入れた。
「はぁ、はぁ……ふか、い……」
「……朱」
下腹部を圧迫する感覚には慣れない。
太く長く固いそれに体の奥を深く抉られ、こつんと子宮口を押し上げられる苦しさに喘ぎながら、朱はほっそりとした足を宜野座の腰に絡みつける。
その体勢で自ら腰をぐいぐい押しつけて、今夜はたっぷりと注いでくれと言わんばかりにしがみつく。
「……ん、もっと……ひゃふ……っ！」
ぬぷぬぷと擦れ合う粘膜の感触。
お互いの耳元で聞こえるあらい呼吸。
控えめの照明で浮かび上がる顔を見合わせて、どちらからともなく唇を寄せて、貪るようなキスを繰り返しながら、腰を何度も打ち付ける。
「朱、朱……あぁ」
「あぁ、あ……ん、奥に、あた……る」
ぱちゅ、ぐじゅ、と小気味良い音を立てて、肉と肉のぶつかりあう様に、朱の羞恥心も薄らいでいく。
眦に浮かぶ涙で潤む視界の中、控えめな明かりに浮かぶ顔を見詰めて唇を寄せ、貪るようなキスを迫る。
「……はふ……ぅ」
ぐぐっと体を折り曲げられる格好となり、息苦しさを感じるが、腹の奥を満たされる感触に恍惚とした表情を浮かべて腰の動きを合わせて揺らめかす。
「ひゃ、ふ……あ、あぁ、あぁ、あぁあん！」
体の一番深い部分でとぷとぷと精を吐き出される。
びくん、と体を震わせて、彼の背中へきつく爪を立ててしがみつき、一際高い声を上げて昇り詰める。
「くぅ……」
避妊具を付けた状態とは異なり、直接触れる中は熱く蕩けそうで、宜野座もそのまま意識をもっていかれそうになる。
四肢を絡ませて汗ばんだ肌をすり寄せてくる体を抱きしめた状態で、大きく息を吐き、半ば放心している彼女の頬に口付けた。
「……はぁ」
脱力しきった表情ながら、くわえ込んだそこはきゅんと締め付けて未だ離そうとはせず、無意識に腰をくねらせて続きを求めてくる。
「朱？」

「ん……きもち、良すぎて」
もぞもぞと恥ずかしげに視線をそらしつつ、朱がぽつりと呟いた。
「まだ、いけるだろう？」
「ふええっ、まだ、動かなっ……ひゃっ」
むくむくと己の中におさめたままのものが脈打ちながら勢いを取り戻すのを感じて、これ以上ないほど顔を赤らめる。
「あふれちゃう……ん！」
少し体の位置をずらしながら、宜野座が解けた朱の片足を抱えて肩に乗せる。大きく割り広げられ、ぷちゅ、とおさまりきらない白濁が二人の結合部からあふれだして下着の生地をぐっしょりと濡らす。
「ふぁ……こんな、格好……」
白い肌を覆う鮮やかな色彩の下着と、その合わせ目から覗くめくれあがった肉襞の色。そこに深く穿たれた血管を浮き立たせた欲望の形をまじまじと観察してしまう。
あんな太く長くかたいものを受け入れている人体の神秘に驚きつつ、次第に体温が上がっていくのを感じていた。
「……入って、る」
お互いの熱い吐息に触れ、汗ばんだ肌のぬめりに興奮していく。
「ああ、そうだ」
ぬぶっと湿った音を立てて掻き回され、とても恥ずかしいことなのに視線をそらすことも出来ずに朱はごくりと唾を飲み込んだ。
二人分の体重を受けて、かすかにベッドが軋む音。
「ひとつ、に……なって……ひゃう！」
ごりごりと内壁の特に感じる部分を擦られて、細い肩がびくびくと揺れる。
「あふっ……やっ、また……ん、んんっ！」
つい先程、極限まで追い詰められたばかりだというのに、再び容赦なく快楽の波に体を揺さぶられ、極まった声を上げて、だらしなく涎を垂らしながら喘いでしまう。
小振りだが、形良い乳房がふるりと揺れ、色付き固く結ばれた乳首がつんと立ち上がっている。
こんな恥ずかしい下着を付けて、男の前で大股を開いて、なんて浅ましい格好をしているのだろうかと思いつつ、彼に深く求められている喜びに震えていた。
「あっ、あっ、あぁ、あぁぁっ！」
深く体の奥から抉られる感触。
二人の鼓動が一つに溶け合い、融合していく。
あられもない痴態を晒しながら、朱の脳裏は白く染まっていった。

どのぐらい眠っていたのか分からないが、まだ夜は明けていなかった。
「……あふ」
寝惚けながら、枕元にある時計を探ろうと手を伸ばす。
「ここは自宅じゃないぞ」
「ひゃ！」
朱が伸ばした手を後ろから宜野座が掴んで引き留めた。
「何時ですか？」
「午前一時半過ぎだな。明日……いや、もう今日になるが、予定がどうする？」
もぞりと寝返りを打ち、朱は彼と向かい合わせになるように体をずらした。
「ん～、海を見たいです」
「海か」

ぎゅっと抱きしめつつ、朱の栗色の髪を撫でる手付きは優しい。そっと宜野座の胸元へ甘えるように身を寄せる。

「……あっ」

そこまでいって、ようやく二人とも何も身に付けていない事に気付いた朱は固まった。

どうやら唐之杜から贈られた下着は脱がされているようだ。

汗と体液に塗れた肌は綺麗に拭われている。

「どうした、気になるなら風呂にでも入るか？」

「えっと……その……」

ここは新婚旅行で泊まっているホテル。

つい数時間前まで彼と生でセックスをしていた事実を思い出して、今更ながら恥ずかしさに顔を伏せた。

あの時は酔いが回っていたのだ、あんな恥ずかしい下着は二度と身につけられない。

「……君が寝ている間は何もしていないから安心しろ」

意識のない相手を無理矢理犯す趣味はない、と宜野座は言い、溜め息をつきながら彼女を宥める。

「うう～」

「そういえば、君も結構乗り気だったな」

笑いを含んだ彼の声に記憶の彼方に押しやろうとしていたものを思い出されて否定する。

「わ、わわ、忘れてください！」

「たまに、ならああいうのも悪くない。俺のために着てくれるのならば歓迎する」

するりと裸の背中を撫で、宜野座の手が引き締まった腰に添えられ、まろみを帯びた曲線を堪能するかのようにむっちりとした尻を掴む。やわやわとあからさまな意図を持って揉み解す動きを察して、朱が指を掴んだ。

「伸元さんって、結構えっちなんですね」

「誰でも良い訳じゃない、朱でなければ駄目なんだ」

唐突な告白に、大きな瞳を見開いたまま、彼の整った顔立ちを見詰めた。

「君はどうなんだ？」

「……私だって」

他には考えられませんよ、とようやく聞き取れる程度に小さな声で返した。

【終】

宜朱ハネムーンアンソロジー発行
おめでとうございます！

このたびは素敵な企画にお誘いいただき、ありがとうございました！海、月、砂浜、バカンス……と大好きなものをたくさんつめたお話が書けてとても幸せでした！

参加されているみなさま方の幸せな宜朱を読めるのがとても楽しみです！

笠原のばら

pixiv:12632582
twitter:rosenight_76

宜朱ハネムーンアンソロ発行
おめでとうございます！！！

アオイ

WRITERS COMMENT

新婚宜朱アンソロ発行
おめでとうございます！

めくってもめくっても
いちゃいちゃらぶらぶしている
新婚さんな宜朱ちゃんが
見られるのが
今から楽しみで
仕方ありません(*´д`)
素敵なアンソロに
お誘いいただき
ありがとうございました！
鴻神江夢

pixiv：6050878
Twitter：@kougamiM

祝!!宜朱ハネムーンアンソロ!!

この度はお誘い頂きありがとうございます。宜朱の幸せなお話を今から一読者としてわくわく楽しみにしています。

紆余曲折を経てお互いを認め合えるような宜朱うめえ。

おめでとうございました!!

2015年7月吉日　織斗　梓穂
（pixiv ID:696436）

宜朱ハネムーンアンソロジー
発行おめでとうございます！

この度は宜野座夫婦の新婚旅行にお招きいただきありがとうございます！

一期監視官宜朱夫婦に、海できゃっきゃしてほしかったのと海上コテージに泊まってほしかったために、海に入れないあの時代でも人工のプライベートビーチを未来の技術に作っていただきました。たとえ本物の海がなくったって、好きな人と一緒ならどこでも幸せだよね、と思います。

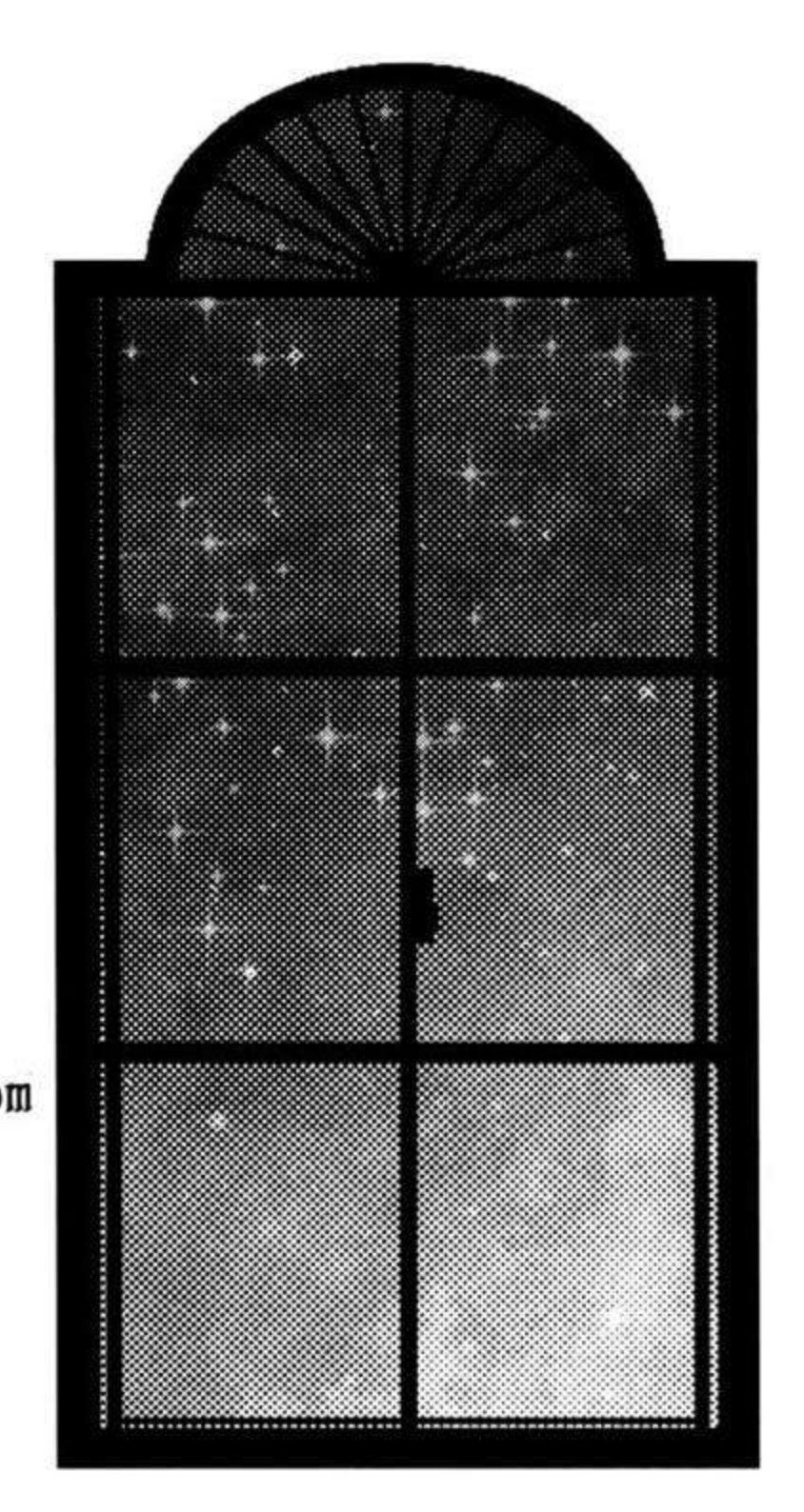
あ、お土産はハネムーンベイビーがいいな♥

しきり

pixiv:178724 @akntyn

WRITERS COMMENT

ハネムーンアンソロ発行
おめでとうございます
お誘いいただき
ありがとうございました!!
山風鉄心
PixivID:3857964
Twitter:@Y_Tessin
宜朱ハネムーンアンソロ
発行おめでとうございます！
このたびは、とても素敵な企画に
お誘いいただきありがとうございました。
どのページにもイチャラブな宜朱がいるかと思うと楽しみでたまりません。
ぽん
普段はpixivに投稿しています。
pixivID:8590261
Twitter:ponpon_1010
WRITERS COMMENT
祝！宜朱
ハネムーンアンソロ
発行!!
おさそい頂きまして、
ありがとうございました！
宜朱ハネムーンアンソロ
発行おめでとうございます！
お誘い頂きありがとうございました！
めろる
pixiv：1225898
Twitter：srtmhosikusa



星空旅行
～The Arcadia of seven colors～

✦発行日：2015.7.5
✦発行者：花鳥マサムネ
✦発行　：花鳥庵
✦ＨＰ　：http://ginoakahoneymoon.blog.fc2.com
✦連絡先：rinne0226@gmail.com
✦印刷所：大陽出版様

ネットオークションへの出品
アップロード・無断転載・転用・複製等
固くお断りします。
Scans by Super Shanko

アオイ
鶴ヶ峰鎮
物語マサムネ
鎧神江夢
しきり
チコア
ナルシマウロ
のぼる
ぼん
ゆろ
山岡鉄也
IEA
原前